

在米ロシア人移民労働運動史研究：在米ロシア人コロニー統一の試みを中心に

山内, 昭人
九州大学大学院人文科学研究院：教授

<https://hdl.handle.net/2324/25910>

出版情報：2012-05-15
バージョン：
権利関係：



在米ロシア人移民労働運動史研究

— 在米ロシア人コロニー統一の試みを中心に —

山 内 昭 人

(九州大学大学院人文科学研究院 教授)

2009 ～ 2011 年度 科学研究費補助金（基盤研究(C)）

研 究 成 果 報 告 書

(課題番号 21520749)

2012 年 5 月

ま え が き

本報告書は、2009～2011年度 科学研究費補助金（基盤研究(C)）による研究（課題番号 21520749）にもとづくものであり、本来、同研究は課題名を「アメリカ移民労働史の再検討—トランスナショナル・アイデンティティ・アプローチ」とした4名の共同研究であり、山内が研究代表者を務めた。同研究成果報告書（付録1）は、2012年5月15日付で日本学術振興会へ提出されたが、従来のように共同研究者全員の研究論文を収録するものではなくなっていた。

そこで山内は、4名全員の研究論文を収録した従来のような研究成果報告書を冊子体で発行することを共同研究者に呼びかけたのだが、諸般の理由で全員の論文を収録することができないことになり、1名でも欠ける報告書を発行するよりはむしろ山内の研究成果のみをここに収録することにした。併せて、付録として共同研究の正式な成果報告書および共同研究にもとづくシンポジウム「アメリカ移民労働史研究の再検討——ヨーロッパとアメリカをつなぐ視点から——」の学会報告（『西洋史学論集』49号、2011年12月、133-142頁）を再録させてもらうことにした。

ここで、なぜ山内だけでも報告書の発行を個人的に望んだかという理由を記しておく必要がある。山内は本共同研究の成果として以下の2篇を公刊でき、また1篇を公刊予定である。

山内昭人「在米ロシア人移民労働運動史研究ノート（1）」『史淵』148輯、2011年3月、37-65頁。

同「在米ロシア人移民労働運動史研究ノート（2）」同上、149輯、2012年3月、31-78頁。

同「在米ロシア人移民労働運動史研究ノート（3）」同上、150輯、2013年3月（刊行予定）。

本報告書は、上記の第1、2篇および第3篇の約3分の1をもとに全体を編集し直し、2012年5月時点までに新たに得た知見を可能な限り増補したものとなっている。なぜならば、「研究ノート」と題目に記したように、発表誌が年1回の刊行であるため研究の進展と同時併行して研究発表に追われた面があり、結果として二つの補論を章立て構成に挟まざるをえないという不体裁が生じ、その上、発表後もマイナーながら新事実の発見が続いたからである。よって、再編集され、増補され、「在米ロシア人移民労働運動史研究——在米ロシア人コロニー統一の試みを中心に——」という新たな題目を付された本報告書を、いわば定本として扱ってもらいたいという山内のたつての願いが、その理由である。

以上、共同研究者である田中ひかる、山本明代、そして大津留厚の皆様のご理解とご了承をいただき、本報告書を発行するものとする。

2012年5月15日

山内 昭人

目 次

まえがき	1
序	3
1 在米ロシア人移民史概観	6
2 在米ロシア人移民労働者の世界	8
3 ロシア語新聞報道にみる在米ロシア人の意識	11
4 逮捕・国外追放者にみる在米ロシア人労働者像	16
5 ロシア人労働者同盟	19
6 在米ロシア人コロニー統一の試みとロシア人全コロニー大会	
1) 第1回ロシア人全コロニー大会まで	27
2) 第2回ロシア人全コロニー大会まで	43
3) 第3回ロシア人全コロニー大会まで	48
7 ロシア人コロニー全市民大会と在米ロシア人諸組織連盟	52
8 在米ロシア人移民労働者の帰国規模 ― 結びにかえて ―	57
注	59
文献目録	72
付録 1 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書	76
付録 2 アメリカ移民労働史研究の再検討 ――ヨーロッパとアメリカをつなぐ視点から――	85

序

アメリカ移民労働運動史は、従来ナショナル・ヒストリーに組み込まれてきたが、ヨーロッパ史をも含めたトランスナショナル・ヒストリーとして再解釈する新たな研究が胎動しつつある。その際、移民労働運動における個人・集団等のアクターを「トランスマイグランツ」(transmigrants)と規定し、彼らのトランスナショナルな諸側面を明らかにするトランスナショナル・アイデンティティ・アプローチが採用される⁽¹⁾。それにより、これまで看過されてきた個人と様々なグループの諸活動、労働者の生活圏、そして個人・集団によって表明されるアイデンティティにいかなるトランスナショナルな特質があるのか、の解明がめざされる。

私は社会主義者のインタナショナルな活動を一貫して追究してきている。拙著『リフトヘルスとインタナショナル史研究 ― 片山潜・ボリシェヴィキ・アメリカレフトウィング ―』⁽²⁾においては、亡命社会主義者たちの間で国境を越えるネットワークが築かれ、アメリカ・レフトウィングによる社会運動が昂揚した要因はこのネットワークにあったと指摘し、また、この運動は単一のエスニック集団に還元できない極めて多様な人々によるものであり、ヨーロッパ・ロシアとの深い結びつきをもつ「インタナショナリズム」をいわば体現していたという点も明らかにした。

その結果、彼らは、近年の研究に依拠して言えば、一面では「トランスマイグランツ」であり、反戦インタナショナリズムを梃子にトランスナショナル・アイデンティティを形成しつつあったとの認識に至った。他方、アメリカ移民史・労働運動史が未だ国民国家の枠組みにのみ依拠し、これを克服する上で、ヨーロッパに関する知見や枠組みが極めて有効であろうこともわかった。そのような理解の水準に立って、私は初めてアメリカ移民労働運動史研究に着手することとなった。

実際、在米ロシア人移民労働運動史研究に着手してすぐに判明したのは、その困難さである。主な理由を二点あげると、1) ロシア移民史研究自体が困難であり、ロシア人移民は後述するアメリカ政府関係機関による移民統計上の不備もあり、ロシア人としての認知が困難であり、その上にユダヤ人の占める比率が高かった。そのことは、ロシア人アイデンティティ形成の障害となり、関連史料の保存にとっても不利となった⁽³⁾。2) 1917年のロシア革命勃発の影響は決定的であり、ロシア10月革命後の干渉戦争下の状況では、在米ロシア人移民がその親ソとか反ソとかの政治的対立の影響をもろに受け、さらにいわゆるレッド・スケア (Red Scare) の時代のアメリカ政府当局による弾圧の主たる対象にもなった。かかる対立状況はまた、史料においても反映し、史料の散逸による困難な収集といずれかのバイアスのかかった史料の慎重な解読を強いることとなった。

本稿では、ともかく在米ロシア人移民史の全般的把握から始め、少しでもロシア人移民労働運動の世界へ入っていくことに努め、そしてロシア2月革命勃発を機に起こった在米ロシア人コロニー統一の試み、すなわち在米ロシア人移民の歴史において初めて団結の始まりとなった運動の顛末までを追究することにする。が、その前に、史料および文献につ

いて本文でも論評することはあるものの、最小限の概説をしておくことにする。

デイヴィス (J. Davis) の 1922 年刊行の書は、在米ロシア人移民労働史の先駆的な研究であり、かつ当時としてはその取り扱う範囲の広さで群を抜き、概説的面があるものの今日でもその網羅性においてそれを越える研究は出ていないと言っても過言ではない⁽⁴⁾。私自身は、デイヴィスが十分に活用した各年度の合州国人口調査の網羅的収集・分析は短期間ではできなかったものの、私なりに収集・分析できたものを補充している。なお、現代のロシア人移民史研究の第一人者と評されるのがマゴチ (P.R. Magosci) だが、彼の専門はオーストリア-ハンガリー帝国からの東スラブ人移民 (後述) であり、本稿で扱う在米ロシア人については概説書しか出ていない⁽⁵⁾。

第 1 章で在米ロシア人移民史を概観した後、第 2 章で同じく概説的な域を出ていないけれども、デイヴィス、マゴチらの研究を手がかりに在米ロシア人移民労働者の世界へ入っていくこととした。

第 3 章「ロシア語新聞報道にみる在米ロシア人の意識」では、デイヴィスによる 1921 年 1 月時点でのロシア語新聞 4 紙の貴重な紙面分析に、また第 4 章「逮捕・国外追放者にみる在米ロシア人労働者像」では、パヌンティオの (C.M. Panunzio) による 1919 年末に国外追放された者の統計的分析にもとづく先駆的研究⁽⁶⁾に、それぞれ大いに負っている。

第 5 章「ロシア人労働者同盟」については、これまで本格的な研究は出ておらず、断片的な研究にとどまっていたのだが、私は司法省捜査局およびアメリカ陸軍省軍情報部 (MID) の報告書類⁽⁷⁾をほぼ網羅的に調査・分析した上で初めてその実像に迫りえた。

引き続き同報告書類は、第 6 章「在米ロシア人コロニー統一の試みとロシア人全コロニー大会」および第 7 章「ロシア人コロニー全市民大会と在米ロシア人諸組織連盟」でも活用されたが、これら二章で扱う内容は多岐にわたっており、当時のロシア語新聞類『ノヴィ・ミール』(Новый Мир)、『ゴーロス・トゥルダー』(Голос Труда)、『ルースコエ・スローヴォ』(Русское Слово) など、および当事者の著作などの渉猟にも努めた。とりわけ、1917 年 10 月に刊行されたオメリチェンコ (Е.И. Омельченко) の小冊子『ロシア人コロニーの組織化に関する問題によせて』はその組織化に関して最も重要な文献であり、オクンツォフ (И.К. Окунцов) の著作『北米および南米におけるロシア人移民』は新聞発行者としての活躍を踏まえ当事者としては最も広範囲にわたる記述をなしていて、本稿での引用も繰り返されるのだが、後年 (1967 年) の著作であり、注もなく、日付など不確かなところが散見し、今となっては確認困難な箇所も多い⁽⁸⁾。

また、ニューヨーク州公文書館の通称ラスク委員会押収文書、ニューヨーク公共図書館の在米ロシア人諸組織連盟文書、コロンビア大学バフメチェフ文庫の各第一次史料も利用した。各組織等の説明は後述するが、ラスク委員会が出した大部の報告書『革命的急進主義』も慎重に利用した⁽⁹⁾。

ここで、ロシア本国の研究に触れておけば、ペレストロイカおよびソ連解体後に在米ロシア人移民史研究は本格化したと言ってもよく、ニトブルク (Э.Л. Нитобург) が独創的ではないものの精力的に多数の論文を発表したのち 2005 年に集大成の『アメリカにおけるロシア人』を刊行した。関連する博士論文も目下、続いているようで、インターネットで入手しえたルチュキン (А.Б. Ручкин) の「20 世紀前半期アメリカ合州国におけるロシア

人ディアスポラ」は上記在米ロシア人諸組織連盟文書をも利用したレヴェルの高い学位論文である⁽¹⁰⁾。けれども、両者とも（私が史料の宝庫だとみて活用している）アメリカ・レフトウィング系の、のちに共産党機関紙となる『ノーヴィ・ミール』を利用しておらず、そのことは旧ソ連時代の研究へのリアクションなのか、彼らにはレフトウィング系の移民労働運動への関心が弱い点で、旧ソ連時代とは逆の意味で、一方の側に偏した面があることは否めない。

第8章「在米ロシア人移民労働者の帰国規模 ― 結びにかえて ―」では、その帰国規模がアメリカの人口調査にもとづく研究だけでなく、受け入れ側のタルレ（Г.Я. Тарле）の『ソヴェト国の友人たち』の中のデータなども加えて暫定的に推定されているが⁽¹¹⁾、今後、出国側ばかりではなく、入国側の調査データのさらなる追求によってより精度の高い推定が求められる。

1 在米ロシア人移民史概観

デイヴィスによる「ロシア人」の使われ方は、以下のとおりであり、本稿もそれに準じている。すなわち、中央ロシアに住む大ロシア人、ポーランドとロシアの間で生活する白ロシア人、かつて南ロシアにいた小ロシア人の三つであり、ポーランド人など他のスラヴ民族やユダヤ人は含まれない⁽¹²⁾。

1898 年までアメリカ合州国人口調査では、ロシア帝国政府によって管理された領土から来たすべての者はロシア人として分類されていたことが、1 ダース以上の民族を「ロシア人」と総称させたのであり、ようやくその年からユダヤ人やガリチアからのルテニア人が区別され始めた。その一方で、1910 年においても自らのネイティヴ言語をロシア語だというすべての者はロシア人と考えられていた。1899 ～ 1910 年の統計によれば、ロシア帝国からの移民は、43.8 %がユダヤ人、次いで 27.0 %がポーランド人であり、ロシア人は 4.4 %にすぎなかった⁽¹³⁾。

そのロシア人移民の波をみていくと、第 1 波は 1881 ～ 1917 年であり、20 世紀初めにピークを迎え、1917 年 10 月革命直後に終わる。その間、ロシア帝国からの移民は 300 万人前後と推定され、ユダヤ人強制集住地域 (the Pale) より貧困やボグロムから逃れて来たユダヤ人が中心であった⁽¹⁴⁾。それらのうち、ロシア語を話したのは約 10 万人にすぎなかった⁽¹⁵⁾。しかも、マゴチによれば、その約半分はオーストリア-ハンガリー帝国からの東スラブ人 (オーストリア領からのウクライナ人とレムコ人 [Lemkos]、ハンガリーからのカルパティア-ルシン人 [Carpatho-Rusyns] など) であり、彼らはギリシア正教に改宗し、その結果としてロシア人と同一視された⁽¹⁶⁾。

デイヴィスの別書に紹介された 1910 年の人口調査によって、95,140 人を数える全ロシア人の州単位の分布をみると、ニューヨーク州が 34,612 人、ペンシルヴェニア州が 24,558 人で、合わせて全体の 8 分の 5 (62.2 %) を占めた。次いで、イリノイ州とニュージャージー州が 4,000 人台、オハイオ州とコネティカット州が 3,000 人台とそれぞれ続いた⁽¹⁷⁾。

同じく 1910 年の人口調査によれば、ロシア帝国生まれの 87 %の外国人 (フィンランドを除く) は、都市コミュニティに住んでいた⁽¹⁸⁾。その 10 年後、ロシア人総数は 30 万台に急増し (第 8 章参照)、1920 年の人種間評議会 (Inter-Racial Council of the United States)⁽¹⁹⁾ の見積によれば、左側がロシア人がいる州、右側がロシア人コロニーがある都市のそれぞれ多い順となる⁽²⁰⁾。

New York	60,000 人	New York	25,000 人
Illinois	50,000	Chicago	20,000
Ohio	45,000	Detroit	17,000
Massachusetts	40,000	San Francisco	15,000
Pennsylvania	35,000	Pittsburgh	14,000
New Jersey	35,000	Philadelphia	12,000

Michigan	30,000	Newark	10,000
Connecticut	20,000	Jersey City	8,000
		Cleveland	5,000
		St. Louis	5,000

ロシア人が担うことになる都市労働者の世界については、少しあとで取り上げることにし、また第6章の主要舞台がニューヨーク市となる。

第2波は、ロシア革命に続く1920～30年代に来了。ロシア革命とそれに続く干渉戦争の数年間、多くの亡命者が続出し、大多数はヨーロッパ、主にフランスとドイツに定住したけれども、約3万人が赤十字国際委員会の後援などで合州国にやって来た⁽²¹⁾。その数を約4万人と推定した事典的記述によれば、彼らは中産階級と貴族からおおよそ成り、よく教育され熟練した労働者ないし専門家として、より早い時期の移民農民より産業化された合州国で大いにより早い時間で生活を適合させていった⁽²²⁾。

レッド・スクエアのピーク時、1919-20年に在米ロシア人は、特別な窮地に立たされた。たとえロシア・ソヴェト政権を支持しなくとも、自分たちが同政権に同情的であるとの嫌疑や告発という反-ロシア差別の波にしばしば直面した。マゴチは記している、アメリカ社会へ自らを適合させることによってこのディレンマに応えたロシア系アメリカ人もいれば、アメリカ市民としての忠誠を保ちながら、その一方で自分たち特有の文化的遺産を（とくに正教会とロシア語新聞を通じて）なお保つことに努めた人もいた、また別の箇所でも、多くのロシア人は彼らの宗教をプロテスタンティズムへ変えたり、彼らの名前をアメリカ化することによってアメリカの主流へ混ざろうとし、この過程において彼らは彼らのエスニック・アイデンティティをぼやかし、たぶん彼ら自身からさえそれを隠した、と⁽²³⁾。しかし、それは後述するデイヴィスによる困難な現状への指摘からすると一面的すぎる把握であり、同化以前の、とりわけアメリカ側の問題が大きかった。

その後、第3波（第2次世界大戦直後の1945～1950年代初め）と第4波（1970年初め以来）が続いていく⁽²⁴⁾。1980年の人口調査によれば、ロシアないしソ連からの278万人が合州国に住んでいる（全人口の1%強）が、民族的なロシア人出自のアメリカ人は約75万人にすぎない⁽²⁵⁾。2000年の人口調査によれば、2,652,214人のアメリカ人がロシア系であることを主張している⁽²⁶⁾。

2 在米ロシア人移民労働者の世界

上述のように在米ロシア系移民の多民族性およびロシア革命後レッド・スクアの荒波に彼らが呑み込まれた政治性ゆえにであろうか、在米ロシア人移民、とりわけその労働者の世界を包括的に研究したものは現時点でも出ておらず、デイヴィスの前掲書をしてはまだまだ掘り下げて解明されるべきことは多く残されている。本章では、その在米ロシア人移民労働者の世界を探ることとする。

第1波期において、オーストリア-ハンガリー帝国からの東スラヴ人移民の多くは、東ペンシルヴェニアの石炭坑夫かピッツバーグの製鋼工場の労働者として働いていた。ロシア人はその東スラヴ人と一緒に働くか、それともニューヨーク市の衣類産業のいわゆる搾取工場でロシア系ユダヤ人に加わって働いた。ニューヨーク、ニュージャージー、イリノイの工場、屠殺場、精肉工場で、未熟でしばしば極端に不快な仕事に分散した多くの移民にとっては、マゴチの表現によれば、「民族的アイデンティティは工場街の煙の中へと消えた」⁽²⁷⁾。

そのような中でロシア人移民は、組合に加わり、労働ストライキに参加し、そしてより公正な支払とよりよい労働条件のために闘う何千人の中で突出していた。彼らはしばしば彼ら自身のロシア人労働組合支部をもち、ロシア系ユダヤ人とともに左翼および社会主義運動において顕著な役割を果たしはじめた⁽²⁸⁾。

1898年から第1次世界大戦勃発まで、ロシア移民の86%が男性で、女性は14%にすぎなかった。合州国に入国する時、少なくとも72%のロシア人が独身かまたは妻帯者ではなかった⁽²⁹⁾。その独身男性を中心としたロシア生まれの労働者は、主に最低賃金の肉体労働の中に見い出された。すなわち、鉱山業がトップで(1,853人)、第2位が鉄鋼業(1,372人)、第3位が屠殺業・精肉業(1,010人)と続く。第2世代は、羊毛・毛織品などのより軽い労働へ移っている⁽³⁰⁾。

その上、1909年の調査によれば、3,311名の外国生まれのロシア人(18歳以上の男性)の1週間の平均賃金は11.01ドルで、それはすべての外国生まれの平均より0.91ドル低かった(日給で見れば、2,819名の1日の平均賃金は2.06ドルで、全体の平均より3セント低かった)⁽³¹⁾。

ロシア人は労働グループの最低層であり、いかにうまくあるいは誠実に働こうとも、自らが上昇する機会がなく、絶えずアメリカ人に見下されるであろうと感じていた⁽³²⁾。その上に、ロシアで「ポリシェヴィキ」体制が始まって以来、ロシア人はどこでも「ポリシェヴィキ」とみなされ、遠ざけられる傾向にますますあり、「ポリシェヴィキ」の特徴とみられるヒゲをそり、英語の名前を使う者さえ出てきた⁽³³⁾。

多くの法律は、外国人が自らをアメリカの生活に適合させることを手助けするための建設的な試みであるよりはむしろ、「アメリカ化」立法のための努力であるように思えた。例えば、1917年10月6日の敵国との取引に関する法律(The Trading With the Enemy Act)の一条項は、すべての外国語の新聞類をして郵政省からの許可を得ることなどを強いるも

のでありつづけた〔例えば『ノーヴィ・ミール』の 1919 年段階の紙面をみると、各主要記事の冒頭では露文に忠実な英訳文がニューヨークの郵便局長に提出されている旨、注記されていた〕。もはや戦時の非常時でもない 1922 年においても、この法律は効力をもっていた⁽³⁴⁾。

ロシア人の逮捕は、二つの襲撃において非常に多くなされた。すなわち、一つは 1919 年 11 月 7 日夜ロシア人労働者同盟 (Union of Russian Workers of the United States and Canada; 後述) に対して、もう一つは 1920 年 1 月 2 日にアメリカ共産党に対してである。学校、クラブ、労働者協会、労働組合、そして政党に出席しているところの人々が収監され、教会セツルメント (隣保館) でさえ必ずしも免れなかった⁽³⁵⁾。

ロシア革命はまた、ロシア人のアメリカ政府への態度に決定的な効果をもたらした。すなわち、ロシア人は実情を知らなかったが、しかしロシアにおいて大幅な改善があつていると信じた⁽³⁶⁾。1922 年ではボリシェヴィキへの好意がヨリ少なくなりつつあるとしても、かつてと同様にソヴェトへの支持者は存続した。ロシア革命はアメリカ政府・人民のロシア人への態度に同様に深く影響を及ぼし、その結果、互いに相手に対してますます疑い深くなっていった⁽³⁷⁾。

ここでロシア人の特徴の一端がよく捉えられている、一社会学的調査報告を紹介する。それはソコロフ (L. Sokoloff) によって 1915 年にロサンジェルス在住の約 3,750 名のロシア人を対象になされた調査で、それによれば、ロシア人、とりわけモロカン教徒 (Molokans [“milk-drinkers”]) は、いかなる形態の戦争にも軍国主義にも反対しているので、彼らは帰化することを拒んでいた。彼らはこの国で戦争の場合、徴兵されやすいので、帰化することを欲していなかった。また、ほとんどは自由公債 (Liberty bonds) を買わなかった。なぜなら彼らの理想からすれば、その購入手続きは戦争支持を意味したからであった。その一方で、彼らは各家庭で、5 ～ 10 ドルを自由意志で赤十字へ寄付した⁽³⁸⁾。

ソコロフはロシア人の賞賛に値する特徴として相互自助 (mutual self-help) を挙げた⁽³⁹⁾。それは上述の困難な労働状態への対処の仕方でもあったであろうが、彼らの中ではどこでも、彼らはここに一時的にいて、彼らが永続的に身を落ち着かせたい国へ出て行く絶えざる希望をもっていた⁽⁴⁰⁾。

そのこととおそらく関わるであろう、1910 年調査報告によれば、1,388 名のロシア人のうち、15.1 % がアメリカ市民権を与えられ、12.9 % が第一書類 (市民権取得の意思を具申する書類) を持つだけだった。残り 72 % は、第一書類を持つことすらなかった⁽⁴¹⁾。このデータを引用した後に続けて、デイヴィスは、今日 [1922 年刊行時] たぶんヨリ少ないロシア人しか市民権を望んでおらず、90 % 以上のロシア人が帰国を希望しているというほどであった、と記している⁽⁴²⁾。しかし、それは明らかに誇張であろう。なるほど、上記 1910 年調査報告によれば、合州国に 5 年以上居住し、21 歳以上の男性で帰化したのは、いわゆる「旧」移民の主要部では平均 61.6 % に対して「新」移民の主要部は 11.3 パーセントと 50 % もの差があったが、しかし 1920 年調査では、「旧」移民は依然 60 % 台だが、「新」移民は 20 % 台に上昇し、そのうちロシア人は 40.2 % までも急上昇している⁽⁴³⁾。そこには第 6 章で考察するロシア革命を機に起こった親ソヴェト派の帰国ラッシュ、ボリシェヴィキ政権への好意的態度からの後退などの要因が推定される。

そのような局面の変化の兆しにもかかわらず、デイヴィスの著書の結論部は、以下のよ

うに決して楽観を許していない。大多数のロシア人移民は孤立し、ほとんどまったくアメリカ人民とは違うままである⁽⁴⁴⁾。アメリカ人とロシア人を分離している社会的相違という大西洋に、現実には架橋するものはほとんどない。それゆえに我々は、大多数のロシア人がアメリカを理解することも愛することもしていない、と結論づけることができる、と⁽⁴⁵⁾。

他の箇所ではデイヴィスは、アメリカの産業にとってロシア人は必要とされていると判断して、次の一例を紹介している。マサチューセッツ州ローレンスの著名な工場主が私に以下を認めた。繊維工場は外国人労働者がいなければ動かし続けることは決してできないであろう、「アメリカ人は汚い仕事をするのを拒むであろう」と⁽⁴⁶⁾。それほどスラヴ系労働者は、アメリカの経済機構の必須部分であり、我々がロシア人労働者をみるのは、まさに鉄鋼業、炭鉱業、鉄道建設業、精肉業、そして製糖業のような必須産業においてである⁽⁴⁷⁾。

デイヴィスの提言は、外国人が同化するために、我々は双方の側、すなわちロシア側と同様にアメリカ側の偏見を克服しなければならないというものであった⁽⁴⁸⁾。その提言が実際、いかに困難であったか、まさしくデイヴィスの研究自体が明らかにしていたことであつたろう。

3 ロシア語新聞報道にみる在米ロシア人の意識

合州国・カナダのロシア人労働者組織は、19世紀末から20世紀初めにかけてロシア急進主義運動と強く結びつけられ、影響を受けていた。移民の大移動が始まる前でさえ、ロシア人革命家の個人および小グループは社会主義が討論されるところのサークルを形成していた。ヘルダー編の書誌目録に収録されたロシア人労働者定期刊行物は38タイトルであり、それはロシア人全定期刊行物の約5%にあたるとのことだが、しかしながら1920年を前にそれは約33%になり、総発行部数は約4万部にのぼり、合州国・カナダにおけるロシア人コミュニティの非常に重要な部分に達していた⁽⁴⁹⁾。ここに、在米ロシア人労働運動を追究するに際して、他の移民労働運動に比して、とりわけロシア革命家、社会主義者らが果たした役割に着目する所以がある。

1922年段階で当時としてはかなり網羅的に移民の新聞・雑誌を調査したパーク(R.E. Park)によれば、移民の新聞・雑誌の大衆化によって初めて、ほとんど例外なくヨーロッパからの農民は自分たちが話す言語で書かれた新聞を見い出した。そこで初めて読書習慣が彼らの中に確立された。しかも徐々に、そして大規模に社会主義新聞・雑誌を通じて考える習慣が確立された、と⁽⁵⁰⁾。

そのことは、1917年のロシア革命勃発後のロシア語新聞・雑誌にとくにあてはまる。すなわち、パークによる1884～1920年の合州国における外国語新聞・雑誌の統計表によれば、ロシア語新聞・雑誌は1887年に1紙(誌)が登場し、1893-94年に3に増え、1909年に4、1911年に9と一ピークを経て、1913年には5に落ち、再び1915年に8に増え、1917年に11、1918年に最大の14となり、1919年に13、1920年に11と続いた⁽⁵¹⁾。最後の2年間は『ノーヴィ・ミール』(以下『HM』と略記)など政府の弾圧による停刊が影響している⁽⁵²⁾。

1921年時点で発行されていたロシア語新聞は5紙にすぎない。政府の弾圧によって1920年に停刊を余儀なくされた第5番目の『HM』を除くと、以下の4紙である⁽⁵³⁾。『ルースキー・ゴロス』と『ノーヴォエ・ルースコエ・スローヴォ』は日曜日も含めての日刊であり、『アメリカンスキエ・イズヴェスチヤ』と『スヴォボードナヤ・ロシヤ』は日曜日休刊である⁽⁵⁴⁾。

以下、4紙はそれぞれ末尾の単語で略記することにするが、予め書誌的データを記しておく(ただし、不明な点があることも断っておく)。

最初に、1921年頃の発行部数について。『ゴロス』は公称35,143部とあるが、15,000、17,000、20,000部と開きが資料によってあり、実数はその間あたりだろう。『スローヴォ』は郵政省発表で32,256部とあるが、実数は10,000部程度だろう。『イズヴェスチヤ』は3,000～5,000部。『ロシヤ』は3,000部⁽⁵⁵⁾。

①『ルースキー・ゴロス』(Русский Голос) (New York)

1907年、アナーキストのオクンツォフとポストニコフ(Ф.А. Постников)が週2回刊で創刊したが、1909年に停刊した。アメリカ市民権を取得したオクンツォフは1917年2

月1日に同紙を再開したが、それは協同組合による日刊急進的新聞としてであった。ボリシェヴィキ政権に対してしばらくの間、支持したが、まもなく同紙の指針と方向性は変えられ、「親ソヴェト的」でありつづけるも、合州国への忠誠は保った⁽⁵⁶⁾。

②『ノーヴォエ・ルースコエ・スローヴォ』(*Новое Русское Слово*) (New York)

オクンツォフは1909年に『ルースキー・ゴロス』を停刊した後、発行人パスヴォリスキー(М.Л. Пасвольский)の娘と結婚して、1910年に創刊されたばかりの『ルースコエ・スローヴォ』の編集者となり、同紙は1915年にアメリカで最初の日刊ロシア語新聞となった。1916年、家庭の事情でオクンツォフはそこから去り、同紙は完全にパスヴォリスキーの手に移り、息子(Л.М. Пасвольский)が編集者となった。が、経営危機で、1919年に所有者がシムキン(В.И. Шимкин)に替わり、編集者は当初ヤコブレフ(А.И. Яковлев)、その後ドウルマシュキン(И.Л. Дурмашкин)、オクンツォフ、ヴィリチュル(М. Вильчур)となった。1920年8月20日号から紙名が『ノーヴォエ・ルースコエ・スローヴォ』に変わった。1922年、編集者に加わったヴェインバウム(М. Вейнбаум)は、同紙のリベラルな(しばらくの間は「親ソヴェト的」でさえあった)立場を公然と反ボリシェヴィキ的なそれへ徐々に変えることに成功した⁽⁵⁷⁾。

③『アメリカンスキエ・イズヴェスチヤ』(*Американские Известия*) (New York)

1920年2月3日(あるいは2週間前の1月19日)に創刊。のちに週刊となり、1924年12月3日が終刊。発行人はクズネツォフ(Г. Кузнецов)。詳細は不明だが、副題にロシア人労働組合というよりはむしろ(後述するロシア人労働者同盟との関係で)統一ロシア人職業人同盟と訳しておく組織の機関紙(*Орган российских профессиональных союзов*)とあり、発行元は合州国およびカナダのロシア人労働者諸組織であった⁽⁵⁸⁾。とは言え、後述のように、とくに同紙に労働組合関係の、しかも好意的な記事が多かったわけではない。その一方で、ロシア共産主義、IWW主義などの急進主義への好意的な記事は多い。

④『スヴォボードナヤ・ロシヤ』(*Свободная Россия*) (Chicago)

1917年から「ロシア人労働者および農民の1グループ」によってシカゴで出されていた日刊紙(編集者はニコレンコ[Н. Николенко])。1923年10月末に再組織化され、翌11月から『ルースキー・ヴェーストニク』(*Русский Вестник*)と改題されることになる⁽⁵⁹⁾。

いよいよこれから、4紙をもとにデイヴィスが行った貴重な紙面分析を詳しく紹介していく。当時の在米ロシア人がアメリカおよびロシアに対してどのような意識を持っていたかを知るのに、格好の材料を提供してくれるからである。

ロシア語日刊紙の発行部数の大きさおよびあらゆるロシア人クラブや図書館でのそれらの存在のゆえに、そしてそれらがデイヴィスが話し合ったすべてのロシア人によって最も影響力のあるものとしてみなされているゆえに、デイヴィスは4紙を1921年1月15～21日の1週間[いかなる特別な出来事もない週]の号に限定して以下のようにユニークな分析を行った⁽⁶⁰⁾。

まず、以下の4つに分類された。A. 諸外国に関する報道; B. 明瞭にアメリカまたはアメリカ人に関する報道; C. 明瞭に在米ロシア人の諸活動にはっきりと関係する報道; D. 厳密にアメリカ、ロシア、または外国として分類されない報道(ただし、社説は別個に分析され[後述]、また多くの記事は報道と意見の巧妙な混合物であったので、両者を分離する試みはなされなかった)。

主な見出しの各々はさらに細分化され、かなりの項目数が、はっきりと好意的、はっきりと非好意的、あるいはテーマの見出しに中立的であるかどうかによって分類された⁽⁶¹⁾。デイヴィスは、材料を「好意的」か「非好意的」、そして「中立的」として分類することは主観的である、との反論の余地があることを十分に理解するにもかかわらず、大部分の記事がそれらのトーンまたは内容によってアメリカの制度に反対であるかどうか、または、それらの効果がアメリカへの善意を促しうるかどうか、をむしろはっきりと示していると捉えた⁽⁶²⁾。

以上の手続きを経て、スペースの量（見出しも含む）を縦行の幅（column inches）、つまり 2.25 インチで表し⁽⁶³⁾、その数値でまとめられたのが、表 1 である（ただし、B. と D. の合計の一部に誤りがあり、訂正してある）。さらに引用者が表 1 の A. ～ D. の各欄を小計して百分率を加えたのが、表 2 である。

表 1 1921 年 1 月 15 ～ 21 日の 1 週間における 4 つの新聞の諸外国、アメリカ、在米ロシア人等に関する報道に割かれた記事量

A. 諸外国に関する報道

	ゴーロス	スローヴォ	イズヴェスチヤ	ロシア
1. ソヴェト・ロシアに関する	744	1,009	522	549
2. 他の諸国に関する	715	408	319	534
合計	1,459	1,417	841	1,083

B. 明瞭にアメリカまたはアメリカ人に関する報道

		ゴーロス	スローヴォ	イズヴェスチヤ	ロシア
1. アメリカ政府に対して	はっきりと好意的	0	0	0	0
	はっきりと非好意的	58	49	135	124
	中立的	25	74	50	24
2. アメリカ史に対して	はっきりと好意的	0	44	0	0
	はっきりと非好意的	0	24	0	0
	中立的	0	0	0	0
3. アメリカの政党に対して		0	3	0	0
4. アメリカ「帝国主義者」、 雇用主または資本家に対して	はっきりと好意的	0	0	0	0
	はっきりと非好意的	124	35	75	97
	中立的	27	0	22	33
5. 産業内の出来事		0	9	0	0
6. ストライキと労働組合に 対して	それらに対してははっきりと好意的	0	0	0	0
	保守的組合に対しては はっきりと非好意的	0	49	0	0
	それらに対して中立的	55	31	29	40
7. アメリカ報道機関に 対して	ある新聞に対しては はっきりと好意的	0	0	0	0
	はっきりと非好意的	0	7	6	0
	中立的	0	0	0	0
8. アメリカの教育、宗教ま たは福祉制度に対して	それらの方法に対して はっきりと好意的	0	0	0	0
	はっきりと非好意的	0	0	18	31
	中立的	2	3	10	0

9. アメリカに関するその他の報道に対して	アメリカに対してはっきりと好意的	0	0	0	0
	はっきりと非好意的	0	14	28	29
	その他すべて	11	34	72	6
合計：はっきりと好意的		0	44	0	0
合計：はっきりと非好意的		182	178	262	281
合計：中立的		120	154	183	103
総合計：アメリカについて		302	376	445	384

C. 明瞭に在米ロシア人の諸活動にはっきりと関係する報道

		ゴーロス	スローヴォ	イズヴェスチヤ	ロシア
1. ロシア共産主義、社会主義またはアメリカにおけるIWW主義（政治囚と追放された彼らに関する項目を含む）	急進主義のそのような形態に対してはっきりと好意的	20	0	247	45
	はっきりと非好意的	0	0	0	0
	中立的	19	22	100	5
2. ロシア文学または在米ロシア人のための教育		126	172	299	47
3. 宗教		60	0	23	22
4. レクリエーション		60	219	96	5
5. 協同組合		9	2	4	0
6. 他のロシア人諸協会		19	65	31	6
7. ロシア人コロニー全般		37	0	283	4
合計		350	480	1,083	134

D. 厳密にアメリカ、ロシア、または外国として分類されない報道

	ゴーロス	スローヴォ	イズヴェスチヤ	ロシア
1. 社説	126	182	212	192
2. 詩、物語、逸話	164	245	125	160
3. 犯罪	15	124	11	52
4. 残りの項目	196	170	20	13
合計	501	721	368	417

A. + B. + C. + D.

1週間の総合計	2,612	2,994	2,737	2,018
---------	-------	-------	-------	-------

[J. Davis, *The Russian Immigrant* (New York, 1922), pp. 130-132.]

表 2

	ゴーロス	スローヴォ	イズヴェスチヤ	ロシア
A. 諸外国に関する報道 (うちソヴェト・ロシアに関する報道)	1,459 56 % (744) (28 %)	1,417 47 % (1,009) (34 %)	841 31 % (522) (19 %)	1,083 54 % (549) (27 %)
B. 明瞭にアメリカまたはアメリカ人に関する報道	302 12 %	376 13 %	445 16 %	384 19 %
C. 明瞭に在米ロシア人の諸活動にはっきりと関係する報道	350 13 %	480 16 %	1,083 40 %	134 7 %
D. 厳密にアメリカ、ロシア、または外国として分類されない報道	501 19 %	721 24 %	368 13 %	417 21 %
合計	2,612	2,994	2,737	2,018

続いて、表にもとづくデイヴィスの考察を抜粋する。

『ゴーロス』と『ロシア』では、全項目の半分以上が外国に割かれ、そのうち4分の1以上がソヴェト・ロシアにであった。『スローヴォ』では、3分の1強がソヴェト・ロシアに割かれ、他方、『イズヴェスチヤ』では外国報道は最も少なく、3分の1弱が割かれていた⁽⁶⁴⁾。

「B. アメリカ報道」に関して、「非好意的」な材料の合計の大きさは顕著である。つまり、「好意的」なのは合計で44インチにすぎず、他方「非好意的」が903インチであった⁽⁶⁵⁾。同報道は、『ゴーロス』が最も少なく、合計302インチだが、そのうち206インチ(68%)が「4. 帝国主義・資本家」や「6. ストライキ・労働組合」に割かれ、これらの話題はすべて外国人労働者に非好意的印象を与えるものと推定される⁽⁶⁶⁾。

どの紙もアメリカの新聞についてなんら重要性を置いていなかった。さらにヨリ不運に思えるのは、アメリカの教育的、宗教的または福祉的制度についての情報が不足していたことである。在米ロシア人の活動の報道では、かなりの注意がロシア人の教育に向けられていた。一部は、ソヴェト・ロシアへ戻ることが可能になった時、読者にその準備ができるよう促進するためであった。他方、一つの項目すら英語のクラスのようなものへの言及がなかった。ロシア人に開かれている教育的および宗教的機会は、アメリカの生活との接触のための機会をほとんど与えていなかったのである⁽⁶⁷⁾。

さらにデイヴィスは、各紙の方針の指標としての社説を分析しており⁽⁶⁸⁾、こちらの方はそのまとめの考察だけを取り上げておく。

すべての新聞が読者に好意的なものを多く与えず、その一方で非好意的なものにスペースを割いた。このことの一部は、ツァーリの専制政治から追い出されてきた革命家がこの国のロシア語新聞雑誌の方針にしばしば影響を及ぼすようになってきているという事実によるのかもしれない。その上に、新聞の内容が概してロシアとロシア人に当てられている⁽⁶⁹⁾。

ソヴェト・ロシアについて提出された材料は、はっきりとボリシェヴィキに好意的である。なぜならば、在米ロシア人移民は個人的経験からツァーリ政府のなんらかの専制政治的性格を知っているし、彼らが彼らの新聞で読むものから、ボリシェヴィキ政府は良いと考えるのももっともだろう。このことはアメリカの新聞雑誌による取り扱いと著しい対照をなした⁽⁷⁰⁾。

以上は、デイヴィスが紙面分析した1921年1月段階の在米ロシア人の代表的な意識であったと言えよう。もちろんそれは、デイヴィスが「2年後だとその結果はまったく違っていただろうことはありうる」と自ら記しているように、「ロシア革命についてなおかなりの感情があった」時代状況下の意識であった⁽⁷¹⁾。

4 逮捕・国外追放者にみる在米ロシア人労働者像

1918 年 10 月 16 日に改正された移民に関する法律に則って、アメリカ政府による社会主義者、アナーキストらの逮捕・国外追放が本格化した。その第 1 条では、「アナーキストである外国人、力または暴力による合州国政府打倒を信じるか唱道する外国人……は、合州国への入国から排除されるものとする」と、第 2 条では（1917 年 2 月 5 日の法律にあった「入国 5 年以内」という条件が取り除かれて）「合州国入国後いかなる時でも、入国時に本法第 1 条において列挙された外国人のなんらかの階級の一員であった、あるいは、その後そうなったことが知られるいかなる外国人も、労働長官の令状にもとづき収監され、国外追放されるものとする」と謳われていた⁽⁷²⁾。

1919 年 11 月 1 日から 1920 年 4 月 26 日にかけて、法律違反の嫌疑で 6,350 名の外国人（aliens）のための逮捕令状が発され、そのうち約 3,000 名が逮捕され、約 2,500 名が共産党員、残りがロシア人労働者同盟員だと申し立てられた。そして訊問後、762 名（内訳は共産主義者が 455 名、ロシア人労働者同盟員が 307 名）が追放を命じられた⁽⁷³⁾。追放率は共産主義者が約 18 %、ロシア人労働者同盟員が約 61 %で、後者は前者の 3 倍以上であった。

ただし、この 3 倍以上については、補足説明が要る。原史料によってデータを改めて挙げておくと、1919 年 11 月 1 日から 1920 年 4 月 24 日までの半年間で発行された令状総数は 6,350 である。うち国外追放命令を受けたのが 762 で、令状総数の 12 %にあたり、実際国外追放されたのが約 3 分の 1 の 263 で、令状総数の 4.1 %にすぎない。その中でアナーキスト、ロシア人労働者同盟員と共産主義者等との取り扱いには顕著な差があり、令状が取り消されたのがロシア人労働者同盟員では 61 に対して、共産主義者等では 1,232 と 20 倍にもものぼる⁽⁷⁴⁾。後者の取消が極端に多いのは、老革新主義改革家で 1913 年以来労働省次官を務めていたポスト（L.F. Post）が担当し、司法省の圧力に屈せず、裁判のために「意識的メンバー」であったかどうか（第 4 章参照）の判定を証拠にもとづき厳密に行ったからである⁽⁷⁵⁾。危険人物が共産主義者以上にロシア人労働者同盟員に実際多かったというわけでは必ずしもない。

なお、シュミットの新研究によれば、「レッドスケア」を機にフーヴァー率いる司法省捜査局は、一連の襲撃・逮捕・起訴を主導し、大量の国外追放をめざす裁判の職務を移民局をかかえる労働省から奪い、管轄しようとした。そこには捜査局の政治的監視活動の制度化のために連邦政府内の権力の集中が意図されていたのであり、その意味で「レッドスケア」は仕組まれていたという側面も見逃しえない⁽⁷⁶⁾。

1919 年 12 月 21 日にアメリカ海軍輸送船「ビュフォード」号（USAT *Buford*; *Soviet Ark*）で 249 名が追放され、そして 22 名が続いた時点で⁽⁷⁷⁾、彼ら国外追放者の統計的分析を行ったパヌンツィオの先駆的研究によって以下、彼ら追放者の実像を明らかにしていく。

記録が吟味された 200 名のケース（訴訟事件）のうち、7 名が女性で 1 名が未成年であった。国籍別には、148 名（74 %）がロシア人（ロシアとウクライナを一緒にグループ化）

で最も多く、そして 19 名 (9.5 %) のポーランド人、9 名 (4.5 %) のリトアニア人、8 名 (4 %) のオーストリア人と続く⁽⁷⁸⁾。

年齢については、20 歳以下が 2 名、20 ～ 25 歳が 46 名、26 ～ 30 歳が 62 名、31 ～ 35 歳が 48 名、36 ～ 40 歳が 23 名、41 歳以上が 15 名であり (残り 4 名は不明者)、20 ～ 40 歳の若者が 179 名 (89.5 %) を占めていた⁽⁷⁹⁾。

アメリカでの居住歴は、1 ～ 5 年が 31 名 (15.5 %)、6 ～ 10 年が 134 名 (67 %)、そして 11 ～ 15 年が 23 名 (11.5 %) であり⁽⁸⁰⁾、比較的長い期間居住していた。

112 名 (56 %) が既婚者であり、うち 74 名に子供がいた。子供の合計数は 156 名で、うち 98 名がアメリカで生まれた⁽⁸¹⁾。

200 名の州別分布を上位 6 番目まで記すと、次のようになる。コネティカット州が 34 名 (17 %)、イリノイ州が 33 名 (16.5 %)、ミシガン州が 31 名 (15.5 %)、ニューヨーク州が 23 名 (11.5 %)、ニュージャージー州が 19 名 (9.5 %)、ペンシルヴェニア州が 10 名 (5 %) であり、ここまでの 150 名 (75 %) を占める⁽⁸²⁾。

市民権については、192 ケースのうち、26 ケースでは市民権についての記録がなく、残り 166 のうち、約 3 分の 1 の 54 ケースが第一書類を申し込んでいた (ただし、市民権取得は困難)。また、37 名が自由公債を購入していたし、24 名が戦費調達用貯蓄印紙 (thrift stamps) を購入したか、あるいは愛国主義的基金に寄付した。その上、追放を控えた 2 名は、実際にアメリカ軍に勤務しており⁽⁸³⁾、アメリカ市民とかけ離れすぎるイメージは弱いと言える。逮捕時に兵役の有無を尋ねられ、有りの場合は即釈放された事例からみて⁽⁸⁴⁾、なおさらかけ離れすぎではない。

このように在米ロシア人移民がアメリカで生活する限り、アメリカへの「接近」は不可避であったろう。その一方で、ツァーリズムを倒したロシア革命への期待は大きく、アメリカ市民権獲得よりも帰国の道を探るロシア人も多かったし、母国の革命政権への直接的ないし間接的な関与を少なくとも 2、3 年の間は志向するロシア人も多かった。そのことと、例えば 1915 年 5 月に 18 部、250 ～ 300 名でもって創立されたアメリカ社会党ロシア人部連盟は、1917 年 10 月時点で党员 600 名で 29 部から成っていたが、1918 年 9 月末に 32 部、2,500 名、さらに終戦直後の同年 12 月には 7,824 名に激増し、1919 年に入って 150 支部、12,000 名に達したこととは、決して無関係ではなかった。在米ロシア人コロニーでの社会主義的傾向はとくに強化されたのだった⁽⁸⁵⁾。

このロシア人部の動きは第 6 章で取り上げるとして、かかる社会主義者や急進主義者へのアメリカ政府の対応は迅速で、当局による逮捕は、襲撃によってか個別の逮捕によって二通りのやり方でなされた。200 名のうち 169 名が襲撃によって逮捕された。二つの襲撃が主要なものであり、一つは、ロシア 10 月革命 2 周年目にあたる 1919 年 11 月 7 日夜、ロシア人労働者同盟に対してであり、もう一つは、1920 年 1 月 2 日夜、アメリカ共産党に対してであった。前者で襲撃された主要都市は、デトロイト、ニューヨーク、ハートフォード、クリーヴランドであり⁽⁸⁶⁾、ロシア人労働者同盟の本拠地、ニューヨーク市人民の家 (the People's House) では授業中とかで 211 人もの一斉検挙が行われた⁽⁸⁷⁾。

200 のケースのうち、87 名は令状が発される以前に逮捕された。48 の場合、日付が記録されていなかったし、令状なしの場合が一つあった⁽⁸⁸⁾。200 のうち、パヌンツィオの研究がなされた時までに 175 の最終決定がなされた。そのうち 97 が令状取り消しで、78 が

国外追放となった⁽⁸⁹⁾。実は、『ニューヨーク・タイムズ』1920年1月3日号の記事が暴露したように、逮捕に先立って政府当局は秘密捜査員（“under-cover” men）を潜入させて、内部から煽動などを策動すらした⁽⁹⁰⁾。

彼らはたいていグループで、あるいは公会堂での集会で逮捕された。逮捕後長い間、逮捕令状がなかった例も少なくない。これらの外国人のわずかなメンバーだけが、危険な急進主義者と分類されうる。多くの者の当該組織への関与は、決して自覚的であったとは言えない。すなわち、自らが共産党員であることを認めたけれども、党が非合法組織であり、合州国政府に反対して暴力を唱道していることを知らなかった者もいた⁽⁹¹⁾。1919年9月に共産党が形成された時、アメリカ社会党レフトウィングの多くの支部は一斉にそれへ移り、その移籍を知らなかったか、知っていてもそのことの重大性を知らなかった者もいた。また、社会党の年会費を前納し、移籍後それが共産党へ機械的に振り向けられた者もいた。こういうふうな非合法組織の一員となったケースは200のうち74もあり、そのうち29が移籍自体を知らず、45がそれを知りつつ事の重大性を知らなかった⁽⁹²⁾。さらに8は、当該組織によって、あるいはそれとの関連で維持されていた学校の学生であっただけのために逮捕・拘留された⁽⁹³⁾。実は、学校に通うためにメンバーとなったという教育的理由が、最も多いと推定される。とりわけロシア人労働者同盟は「文化および教育を教えるための組織」とみなされる傾向があった⁽⁹⁴⁾。

アメリカから追放されるかどうかを目前にして、200ケースのうち50が去ることを望んでいたが、45は留まることを望み、そして意外にも21がどちらでもかまわないという無関心を示した⁽⁹⁵⁾。おそらく最後の点と無関係ではないであろうが、彼らの証言の素朴さ、彼らの明白な誠実さ、そして率直さは、大多数がアメリカ政府あるいはアメリカ人に反対する意図を抱いてはいない無邪気な人々（simple-minded folk）であったことを証明する⁽⁹⁶⁾。

以下の結論を避けることは困難である。すなわち、明らかに法の下で国外追放されうる比較的わずかな人物を除いて、これらの外国人は法律的不是な社会的・教育的取り扱いを必要としたし、アメリカ生活の最良の理想について有効に解釈できるようにしてもらうことを期待した⁽⁹⁷⁾。しかし、ここでもまたデイヴィス同様、一ポーランド人が以下のようにアメリカ化への辛辣な供述をしたとの本文途中の紹介を見落とすわけにはいかない⁽⁹⁸⁾。この国に来て自由の女神を見た時、私はそれに帽子をかしげて会釈し、しあわせだったけれども、アメリカ人からいかなる共感も得られず、公の場で「ポーラック」と呼ばれ、妻がやって来た時も、同様だった、と。

以上のパヌンツィオによる分析によって逮捕・国外追放されたロシア人のほとんどは、政治意識がしっかりした運動家であったとは言えないことが明らかとなった。そもそも従来なされてきたロシア人労働者同盟がアナーキストの組織であるとのレッテル張りも一面的すぎたと言わざるを得ない。その同盟の実証的解明が俟たれるところだが、現段階で可能な範囲での説明を章を改めて試みる。

5 ロシア人労働者同盟

ロシア人の社会主義的、アナーキズム的、そして急進的クラブは、この時期、200 を越えていた。これらの中でたぶん最大で最も広範囲にわたるものは、ロシア人労働者同盟（以下、URW と略記）であった。あらゆる産業中心地および多くの小さな鉱山業や製造業のコミュニティに支部をもっており、各支部の構成は 60 名以上ではなかった。URW は加盟の全ロシア人労働者を職業の如何にかかわらず、一つの革命的組織に結束させ、直接行動を支持し、そして全般的にアナキスト理論に共感していた。が、いくつかのアナキスト・グループと友好に提携しているけれども、他のアメリカの組織との関係はまったくもっていなかった⁽⁹⁹⁾。ただし、末尾は言いすぎで、IWW ロシア人部が 1912 年にクリーヴランド、デトロイト、ピッツバーグ、ローレンスで創設されており⁽¹⁰⁰⁾、また後述する URW の「規則」と IWW の「規約前文」との類似性からみても、「無関係」とは言えない。

そもそも URW の創設については諸説があり、一説では、1907 年にニューヨークで反ツァーリズムのロシア人政治亡命者によって創設されたとある⁽¹⁰¹⁾。URW は当初、合州国とロシア双方において国家と資本主義に反対する公然たる武装闘争を志向したが、しかし 1912 年頃にアナルコ-サンディカリズム的組織となったと言われる。(1919 年 3 月 21 日にニューヨーク州上院で、続く 26 日に同下院で設置が決議された⁽¹⁰²⁾ 煽動罪活動を検査する合同議会委員会、議長を務めた同州上院議員ラスク [C.R. Lusk] の名にちなんで通称) ラスク委員会の (1920 年 4 月 24 日に同上院に提出された) 報告書では、URW は、ロシア労働者のより保守的な組織からの分裂として 1914 年に組織され [下記参照]、1919 年春までに約 7,000 名のメンバーに増えた。ラスク委員会による家宅捜査で得られた記録では、70 支部、9,000 名をわずかに越えており、そのうち、17 支部はカナダにあり、また最大級の支部はデトロイト、シカゴ、ボルティモア、フィラデルフィア、ニューヨークにあった、と記されている⁽¹⁰³⁾。

このあたりについては、司法省捜査局ピッツバーグ事務所の特別捜査官スピア (E.D. Speer) の 1919 年 4 月 8 日付報告が、より筋の通った説明をしてくれている⁽¹⁰⁴⁾。すなわち、1908 年のある時、ニューヨークで会議か大会が開かれ、URW の組織の形成および月刊誌 (*Voice of Labor* [『ゴーロス・トゥルダー』 (*Голос Труда*)]) の刊行が決定された⁽¹⁰⁵⁾。1912 年に同大会がフィラデルフィアで開かれ、(フランスのアナルコ-サンディカリズムとの通信および同志のフランス派遣に熱心であった) 同誌の編集長シャトフ (B.C. Шатов) と書記兼会計ローデ-チェルヴィンスキー (A. Роде-Червинский) らによってアナルコ-共産主義 (スピアは上記の武装闘争の志向をそのように規定した) からアナルコ-サンディカリズムへと方針転換がなされた。しかしながら、この方針は 50 ないしそれ以上の支部から十分な許可を得ることなしに採られたのであり、その結果、直ちに内部論争が起こり、組織をほぼ二分した。1914 年 7 月 1-7 日、デトロイトで同盟のたぶん最も重要な大会が開かれ、多くの議案が採択され、組織のための規約 (Constitution) が起草されるに至った (そのことが上記の創設と誤解させたのであろう)。

もう一つの史料、1919 年 11 月 6 日付「[司法長官特別補佐官] フーヴァー氏 [への] 覚書」⁽¹⁰⁶⁾によると、1907 年に URW はニューヨークで組織され、それにシャトフによって指導された 11 名のロシア人アナキストが参加し、そしてこのグループによって『ゴーロス・トゥルダー』が同年刊行された。その定期刊行物は約 6 カ月間続いたあと郵政省によって郵送を禁じられたが、しかしそれが存在する間に必要なプロパガンダに成功し、その結果、1908 年にニューヨークで大会が開催され、大会を前に約 400 名のメンバーをもつ 13 支部から成っていた組織は永続的な形態を取った。

同「覚書」によって、組織化の年としての 1908 年と 1907 年のずれについて補正されるように思える。すなわち、URW は 1907 年に組織され、1908 年に中心組織体を持つに至った、と。

残るは『ゴーロス・トゥルダー』創刊の問題だが、アムステルダム社会史国際研究所（ミネソタ大学移民史研究センターも）所蔵の『ゴーロス・トゥルダー』の創刊号は、1911 年 3 月 1 日に出されており、副題は「在米ロシア人労働者無党派機関誌」で、「ニューヨークにおけるロシア人労働者グループの出版」となっている。そのロシア人労働者グループ（書記はローデ）は、1910 年 10 月に組織され、直ちにロシア人労働者クラブ創設のための煽動をニューヨークのロシア人コロニーの中で着手したとある⁽¹⁰⁷⁾。これとは別の機関誌がすでに 1907 年か 1908 年に出ていたかは確認できない。

なお、1911 年の創刊号の付録にある「『ニューヨークにおけるロシア人労働者グループ』の綱領および規約」をみると、各メンバーの入会金は 1 ドル、毎月の会費は 50 セントで、その上、設立された新聞基金に各メンバーが入会后 6 カ月間に 5 ドル以上を納入することとあり、最盛期 URW の毎月の分担金 10 セント（第 5 章参照）と比べてはるかに物入りで、当時、労働者大衆が容易に入会しうる状況ではなかったであろうことが窺われる。

この創刊号および 1910-11 年の情報を司法省捜査局が得られなかったのは、URW が捜査対象になるのが遅れ、ようやく 1919 年 2 月までに捜査局ニューヨーク事務所が潜入捜査を開始したことが響いていたからであろう⁽¹⁰⁸⁾。

そのあと続く「覚書」の概括的な記述を抜粋しておく、URW の大会がおおよそ 1 年に 1 度開催され、時おり地域大会が招集された。その地域ではさまざまな支部が鉱山、商店、工場、伐採搬出飯場、製材所などのロシア人移民労働者の中で組織され、そしてそのプロパガンダが文献、新聞、講演によって行われ、講演者は中央組織から派遣された。

ニトブルクの研究によれば、URW は、第 1 次世界大戦中に連盟組織（Federation of the Unions of Russian Workers）が形成され、2,500 名のメンバーを数え、1918 年頃までに 10 の州で、14 の部を数えたという⁽¹⁰⁹⁾。その連盟創設も、スパイ報告によれば、デトロイト大会時か、ほぼ同時期かと推定される。なぜならば、その時以降、会員帳⁽¹¹⁰⁾にはデトロイト大会で採択された前文（規約のであろう）などが記載され続けたと報告に記されたあと、以下の順でそれらが引用されている。

最初が前文（preamble）であり、それはロシア語からの英訳であるため若干の異同があるもののデイヴィスが 6 パラグラフから成る連盟の根本方針（Fundamental Principles）として引用したものと同一であり、最初の 1 パラグラフと終わり 2 パラグラフを訳出すると、こうである⁽¹¹¹⁾。

「現代社会は二つの対立する階級に分裂している。すなわち、一方に世界の富を自らの労働によって創造してきているのにそれを供給されていない労働者と農民であり、他方にそれらの富のすべてを自らの手に奪い取った富める人々である」。

「我々の目的に達するために、我々はとりわけ、賃金労働者の広範囲にわたる種類の革命的組織を創造する必要性を証明する。その組織とは、資本と権力のすべての制度との直接的闘争をリードしながら、労働階級に自らの企てのすべてにおいてイニシアティヴと自主的行動を教えなければならず、そしてその階級内でこういうふうに総ストライキ、すなわち社会革命（a Universal Strike – Social Revolution）の不可避性の必要な認識を発展させるものである。

それゆえに、ロシア人労働者同盟へと組織化する時、我々は全世界の賃金労働者の一部として我々の将来の仕事のすべてにおいて、連盟の基礎になっている根本方針が、大量のロシア人移民の組織化の問題において常にロシアおよび人類の最速の解放のための導きの糸になるであろうことに努めるつもりである」。

続いて、以下の4項目から成る「連盟に統一された合州国およびカナダのロシア人労働者同盟の規則（Statutes）」が記載されていた。すなわち、1）連盟の目的、2）組織の相互関係、3）連盟の収入、4）連盟の管理、であり、順に訳出していく。

「連盟の目的

1. 資本と政府に反対する共同闘争のために合州国およびカナダにおけるロシア人労働者の全組織を統一すること。
2. ロシアにおける解放運動を支援すること。
3. アメリカ労働者の革命的行為を支援すること。
4. 連盟の機関紙『ナバート〔警鐘〕』（*Набат*）⁽¹¹²⁾への道徳的および物質的援助。
5. 何もないところで組織を築き上げ、既存の組織を援助すること」。

「組織の相互関係

一同盟のあらゆる会員は、連盟の一部を形成するあらゆる他の同盟において同等の会員資格を同時に持つ権利がある。

連盟に属する全組織は、完全な自治を享受し、互いに最大限に物質的および道徳的に支援し合うべきである」。

「連盟の収入

連盟の収入は、組織メンバーの毎月10セントの分担金と任意の寄付から成る」。

「連盟の管理

連盟の機能の管理のために、連盟は全通信連絡を遂行する書記兼会計が任命される」。

「連盟の目的」だけをみると、確かにそれは極めて急進的な声明であり、当時（ロシアのアナーキストで、1919年にロシア共産党（ボ）に入党していた）ノヴォミルスキーの『アナーキズムとは何か？』とか『アナーキスト-共産主義者宣言』⁽¹¹³⁾とか驚くべき量の急進的文献も配布された。にもかかわらず、URWは（オメリチェンコによれば）現実にはまったく平和的であり、司法長官パーマー（A.M. Palmer）がそれらを非合法的だと宣言するまで妨害なしに組織は「アナルコ-サンディカリズムへの方針転換以来」7年間存在した⁽¹¹⁴⁾。

そのように記した（ただし、オメリチェンコには「まったく平和的」との記述は見あた

らない) デイヴィスがインタビューした多くのロシア人は、そのようなプロパガンダに興味を抱くのではなく、むしろ社交クラブをもち、〔上述のように修学のため〕学級に出席することに興味を抱くようにみえた⁽¹¹⁵⁾。

そのことはまた、4項目から成る「規則」が傍証となる。そこには急進的な、ましてやアナキスト的な主張が強く反映しているわけではまったくない。前文についても、スピア自身が続けて記しているように、〔労働階級と雇主階級との対立、賃金制度の廃止、資本主義を取り除くのは労働階級の歴史的使命、などを説く〕IWWの規約前文⁽¹¹⁶⁾との間にかなりの類似性がある。

スピアの記述を続けると、URWがアナキスト組織であることを知らないメンバーもたぶんいただろう、しかしながら彼らはすぐに教育され、URWによって採用された教育計画によって会員数は着実にふえていった。極めつけは、スピアが紹介する1919年1月10日にニューヨーク市人民の家で開催されたURWの最後の大会での数時間にわたる以下の討論だった。それは、URWの名のままでいるか、それとも公然とアナキストとして宣言するか、についてであり、結局、議長を務めたシュナベル(A. Schnabel)⁽¹¹⁷⁾の発言と〔採択されることになる〕動議で終わった。すなわち、「……もしも我々がロシア人労働者同盟の名のままでいるならば、第一に我々は政府の弾圧から我々自身をかばうことができるだろう。第二に我々は、アナキストになることを今恐れている新メンバーを組織へ導くことができるだろう。さらに私は、我々がロシア人労働者同盟の名にとどまる動議を出す」と。

いかにURWの大多数が(次章でも紹介する)アナキスト指導者と隔たりがあったか、そのことは上述の逮捕・国外追放者の分析とも合致するのである。

実はこの「最後の」大会は最後ではなく第5回大会であり、それ以降のURWの動きは今回初めて私の司法省捜査局およびアメリカ陸軍省軍情報部の史料調査によって具体的に追っていくことが可能となった。

1919年2月26日、URW連盟より機関誌『パンと自由』(*Хлеб и Воля. Еженедельный орган Федерации Союзов Русских Рабочих Соед. Штатов и Канады*; 1903年ジュネーヴで創刊されたロシア・アナキスト運動の最初の雑誌名に因んだ)が創刊された。それは1918年に廃刊された『ナバート〔警鐘〕』の後継誌であり、それまでの間、同連盟員は自らの代弁者としてニューヨーク市で刊行されていた合州国およびカナダ労働者代表ソヴェト(第6章参照)の日刊紙『労働者と農民』(*Рабочий и Крестьянин. Ежедневная газета Советов рабочих депутатов Соединенных Штатов и Канады*; 後述)を利用してきた⁽¹¹⁸⁾。

ラスク委員会報告書にもとづく記述では、『パンと自由』の発行部数は4,500部で、編集者兼マネージャーとして3名が挙げられている。すなわち、ロシア-イタリア系アナキスト指導者のビアンキ(P. Bianki)、編集者を努めたステパヌク(N. Stepanuk)、なんでも屋で編集も兼ねた寄稿者であったクラヴチュク(P. Kravchuk)であり、3名とも1919年12月に「ビュフォード」号で国外追放されることになる⁽¹¹⁹⁾。同誌はそれを待たず、1919年11月上旬か中旬に停刊したようだ⁽¹²⁰⁾。

ニューヨークの捜査官(で直後にラスク委員会の主任調査官となる⁽¹²¹⁾)フィンチ(R.W. Finch)の1919年4月2日付報告によれば、上記第5回大会で採択された決議に則して集会が少なくとも3週間に一度開催されなければならない、そのため4月12日午後4時に地

域会議を開催する、とビアンキの署名で URW 宛通知文が発された。開催地はニューヨーク市人民の家であり、6つの議事日程のうち、1番目、2番目、4番目は、それぞれ「連盟書記局の見直しについて」、「連盟の文献の出版について」、「ボリシェヴィキ大使への
(ママ)
--- --- 〔関係?〕について」であった。

当のビアンキは国外追放のために拘束されており、翌4月13日 URW 連盟主催のブルックリンの集会では、彼のための保釈金 1,000 ドルが集められた〔すぐに保釈金の額は 2,500 ドルに跳ね上がる〕。その時、ビアンキを引き継いで連盟書記を務めていたのは、オハイオ州クリーヴランドで活動し当地へ移って来ていたペルクス (H. Perkus) であり、彼は『パンと自由』の編集者でもあった⁽¹²²⁾。

この 1919 年 4 月まで URW の活動は継続的であり、むしろ拡大傾向にあったことは、入会者の増大で見てとれる。そのことを、司法省捜査局が(おそらく 1920 年初めに)押収した 2 種類(うち 1 つは途中欠落)のニューヨーク市のメンバー・リストで見ていくことにする⁽¹²³⁾。

リストの通し番号は 237 だが、氏名が異なる番号重複が 3、氏名に番号なしが 1、そして別番号で再入会している者が 1 (退会による削除者は当人を含めて 3) で、計 240 名がメンバー数である。けれども、番号のみが 24 で、氏名が記されているのは 217 である。

その 217 名の入会日付をみると、旧メンバーが 18、1917 年入会メンバーが 16、1918 年が 47、1919 年が 112、そして入会時未詳が 24 となっており、1919 年入会が急増していることがわかる。しかも、その 1919 年入会者は、同年 5 月 7 日までの入会者であり、同年 12 月 26 日入会が 1 名記録されているものの、その間の入会記録が見あたらない。

ちなみに、本稿に登場する中心人物の入会日付を見てみると、(シャトフがロシアへ帰国する〔後述〕前に組織化の任務を委ねた) シュナベルは旧メンバー、ビアンキは 1918 年 2 月 6 日、ペルクスは(クリーヴランドから移住して来たからであろう) 1918 年 12 月 4 日である。

当時、URW とは敵対する陣営に属し、『ルースコエ・スローヴォ』の編集者の一人であったヴィリチュルですら、投書の中で次のように記していた⁽¹²⁴⁾。「合州国のロシア人組織の中で、広い影響力を持った一つの強力な組織もない。二、三の例の中で唯一ロシア人は、教育センターとして人気のある名前、いわゆる『人民の家』を設立するのに成功した」。その後、「事実、当地のロシア人は、90 %は労働者であるけれども、さまざまな政治的信条によって広く分断されている」と続くのだが、その成功例が URW であり、「教育センター」にとどまらないことを著者は伏せている。

また、1919 年 5 月 20 日付文書添付資料「米国〔駐米日本〕大使館ニ関係アル某露国人 (A) ノ調査ニ係ル米国ニ於ケル過激派及社会党之支部」には、該当する 76 もの組織が記載されており、そのうちアメリカ社会党ロシア人部が 36、URW が 16、合わせて 52 で、全体の 68 %を占めている⁽¹²⁵⁾。それは全体の中での URW のバランス、およびアメリカ社会党ロシア人部と比べて組織上の劣勢を示しているのだが、オメリチェンコの当時の記述によれば、「自らの影響力と数に関して、社会主義部は URW よりヨリ人氣がな」かったのである⁽¹²⁶⁾。

その人民の家で 1919 年 6 月半ばに URW 連盟の会議が開かれている。司法省捜査官デイヴィス (M.J. Davis) の 1919 年 6 月 19 日付報告によると⁽¹²⁷⁾、ニュージャージー州エリ

ザベスタウンのドゥボフ (E. Duboff) が議長に選出され、ニューヨーク支部はビアンキ、ペルクス、シャッツ (Shotz とあるが、B. Shatz であろう) によって代表され、シュナベルも出席していた。

会議内容を抜粋すると、ミハイロフ (Michajoloff とあるが、Михайлов であろう) を連盟から追放すべきとの発言に対して、ビアンキは自重を求めた。その理由は、もしも我々がそうしつつあることを彼が知るならば、彼は司法省へ駆け込み、連盟全体と我々の活動を当局へ暴露するであろうからだった。

ペルクスはこの会議だけで決定できない多くの重要問題があるので、大会を招集することが必要だと発言した。目下、連盟は危険の中にあり、いかに組織するか、いかにこの組織、ポリシェヴィキ、ソヴェト〔後述〕、そして社会党の間の関係を議論するかについて新しい計画が立てられなければならない、またロシアとのコミュニケーションも確立されなければならない。後者についてペルクスは付言した。「我々は我々の一人をすでに彼地へ送ったが、しかしこれまでのところいかなるニュースも受け取られていない」。この問題を審議する委員会が最後に選出され、構成員はペルクス、ビアンキ、ベルキン (Bielkin とあるが、B. Belkin)、スヴェトロフ (Swietloff とあるが、A. Svetlov)、クシュネレフ (Kushnereff とあるが、F. Kushnarev かもしれない)、シャッツ兄弟であった。

そのような活動を展開していた URW に立ちはだかったのが 1919 年 11 月 7 日夜の司法省による襲撃・大量逮捕であり、一気に組織存亡の危機が訪れた。

ニューヨーク事務所の密偵 D.D. の 1919 年 11 月 27 日付報告によると⁽¹²⁸⁾、IWW ロシア人支部は URW と合併し、URW を（非常に近い将来、おそらくシカゴで開催予定の）自らの大会に出席させようと試みているとのことであった。同密偵には、そのことが成功する可能性はある、なぜならば URW の指導者のすべてが逮捕されており、IWW は URW が再組織化できるまで URW とまとまっているであろう、と見られていた（ただし、以下紹介する再組織化が進んでいったかで、1920 年 3 月時点で URW と IWW ロシア人支部の合同大会がシカゴで開催予定との報告もあるが⁽¹²⁹⁾、その後の進展の報告が続いていない）。

その再組織化の報告は、早くも同密偵の 1920 年 1 月 28、30 日付報告でなされた⁽¹³⁰⁾。すなわち、URW のいく人かのメンバーが粉砕された諸支部を再組織化することを決定し、1 月 30 日午後 8 時に最初の会議を開催することとなった。が、組織名が自己修養協会 (Общество самообразования) とされたように、以後、URW の再建はさまざまな組織名のカムフラージュを伴って試みられていく。

当日、グループ内に潜入していた同密偵は、予定された会場に出向くが空で、〔古参メンバー〕ポニャトフスキー (Ponyatovsky) に連れられてブロンクスの日刊紙『アメリカンスキエ・イズヴェスチヤ』印刷所に行き、誰が URW 組織化の企ての背後にいるのか問うと、ヴィシュロフ (Wyshloff)、ギセンキン (Gisenkin)、ゴロディエンコ (Gorodienko) が主役であり、3 名とも『労働者と農民』の編集スタッフであった。

なお、ゴロディエンコは注 58 に挙げたゴルディエンコと同一人物とみられ、オクンツォフの著作も後者 (Гордиенко) なので、それに従っておく⁽¹³¹⁾。また『アメリカンスキエ・イズヴェスチヤ』が親ポリシェヴィキから親アナキストとなったとの談話の確認が果たされる記述が、1920 年 4 月 17 日で終わる期間の特別報告「大ニューヨーク地区における急進的諸活動」の中の統一ロシア人職業人同盟 (United Russian Professional Unions;

第3章参照)の項にある⁽¹³²⁾。すなわち、そこでは同執行委員会の会議が開催されたことが報じられ、同紙が共産党の日刊紙だとの多くの不満を受け取っており、これらの非難を論駁するため一両日中に同紙が強力に「アナーキスト的」であると主張する論文が載せられることになった、とある。

さらにフィラデルフィアの1920年11月28日付密偵報告では、同紙は「URWのためにカムフラージュされた統一ロシア人職業人同盟の正式機関紙である」とまで報じられるようになっている(第3章参照)⁽¹³³⁾。ただし、翌21年8月7日にニューヨーク市で開催されたロシア人勤労者同盟(Union of Russian Toilers)会議の密偵報告によれば⁽¹³⁴⁾、同紙は組織にとって必要であり、同紙の印刷機械の負債2,000ドルを支払うための資金確保が画策されているものの、同紙がURWの偽装組織の正式機関紙であるべきことがこの時点でもなお論じられていた。

またボルティモアの1921年8月16日付密偵報告によれば⁽¹³⁵⁾、1919年11月の襲撃以来、URWは名前を(当地では労働者救済協会へと)変えたばかりか、メンバーはクリスチャン・ネーム(洗礼名)だけで数字で入会し、いかなる会議においても絶対に受取ないし支出は読み上げられず、二、三の最も信頼されている指導者だけがその財政に通じていたという。

URW再組織化の密偵報告が続く。

ピッツバーグでの1920年6月5日付報告によると⁽¹³⁶⁾、昨年11月のURW襲撃以来、組織は完全に粉砕されたかのようにみえたが、しかし事実はそうではなかった。目下、彼らは実際にあらゆる町で支部をもち、メンバーをうまく増やしている。とくにロシア人市民同盟(Union of Russian Citizen)からメンバーを獲得しようと活動的である。

デトロイトの場合、1919年に7支部を持っていたURWは、1919年11月の襲撃で約100名が拘引され、1920年初め、組織は混沌とした状態にあり、ほんのわずかな文献しか配布されず、集会在個人宅で小グループで開かれるだけだった。1920年8月になってようやく古い集会場が確保され、翌21年7月からは集会を毎週水曜日の夜に定期的にもつこととなる。ただし、表向きはロシア人労働者職業人同盟(Professional Union of Russian Workers)の名で⁽¹³⁷⁾。

ここに至ってURWの中のアナーキスト・グループは、合州国・カナダ・アナーキスト-共産主義諸グループと旗幟を鮮明にし、同連盟(Federation of Anarchist-Communist groups of the United States and Canada)を組織した。

1920年8月15-16日にニューヨーク市で同連盟の第2回大会が開催され、捜査局シカゴ事務所が入手した同大会印刷物によれば⁽¹³⁸⁾、13名の代表および〔下記のように、連盟未加入の〕アメリカ・アナーキスト-共産主義グループ1代表が出席し、重要な議題はURWの清算および組織の資金や他の財産をアナーキスト-共産主義グループの手元に置くことであった。

そして代表たちは、ニューヨークの『アメリカンスキエ・イズヴェスチヤ』を、アナーキズムの根本方針に好意的であるゆえに、すべてのメンバーに説いて支持させることとなった。とともに、自らの連盟機関誌『ヴォルナー〔波〕』(Волна)は財政的にも道徳的にも何が何でも支援されるべきである、と。

その『ヴォルナー』1920年1-2月創刊号は、「アナーキスト-共産主義者月刊雑誌」と

自ら称し『パンと自由』の後継誌としてニューヨークで刊行されていた。刊行地および責任者〔パヴロフ (I. Pavlov) ら〕は秘密にされ、刊行地は号によって変えられた⁽¹³⁹⁾。

1920年11月14日にはフィラデルフィアで地区大会が開催され、密偵報告によれば⁽¹⁴⁰⁾、8つの地区の19グループから10代表が、そして唯一連盟に所属していないニューヨークのアメリカ・アナキスト-共産主義グループの1代表が出席した。15の議題のうち議題2「国際大会の招集」では、アメリカおよびカナダの国際大会をまず招集することが本大会によって推薦された。議題11「第3回全コロニー大会」では、「原則にもとづいて、また実際の配慮ゆえに、第3回全コロニー大会〔後述〕にいかなる参加もしないことが大会によって決議された」と記されるだけだった。議題12「アナキスト-共産主義諸グループ連盟」では、48頁から成る連盟の機関誌『ヴォルナー』が11月20日頃に刊行予定であり、そして連盟財務担当者が目下約500ドルばかりか、URWの古い連盟から残された総額1,800ドルを保持していることが表明された。

ここにURW連盟から合州国・カナダ・アナキスト-共産主義諸グループ連盟への財政的継承が裏付けられる。同諸グループ連盟のその後については、現段階では史料に乏しく、改めての調査が必要だが、URWの後継組織は分裂へと向かっていく。

すなわち、フィラデルフィア地区大会に先だつ1920年10月3日、統一ロシア人職業人同盟会議がニューヨーク市カジノ・ホールで開催された。アメリカ北東部のさまざまな23組織を代表して出席した全員の不満は、『アメリカンスキエ・イズヴェスチヤ』が停刊を余儀なくされた『パンと自由』ほどには急進的でないことにあった。『アメリカンスキエ・イズヴェスチヤ』の累積赤字は242.50ドルにものぼっていたけれども、すべての代議員は同紙をロシア人労働者諸組織ではなくロシア人職業人同盟の機関紙として日刊で刊行することに同意し、資金援助に努めることになった。紙名変更も、‘Russian Colony Herald’とか‘The Bell’とか候補が出されたが、契約の問題などの困難ゆえに変更しないことが決定された。

もう一つの重要な議題は第3回全コロニー大会の招集であり、ロシア人諸分派の統一のために同大会は招集されるべきであり、統一ロシア人職業人同盟執行委員会に案を直ちに作成しはじめることを命じる決定がなされた⁽¹⁴¹⁾。

結局、とくに『ヴォルナー』の刊行に力を注ぎ、第3回全コロニー大会には不参加の立場を取るグループと、『アメリカンスキエ・イズヴェスチヤ』の立て直しに重点を置き、同大会の開催を準備するグループとに大まかに分裂していくことになる（第3回全コロニー大会については、次章第3節で取り上げる）。

6 在米ロシア人コロニー統一の試みとロシア人全コロニー大会

1) 第1回ロシア人全コロニー大会まで

ロシア2月革命勃発は、『HM』と『ゴーロス・トゥルダー』においてともに1917年3月16日号で報じられた⁽¹⁴²⁾。

革命勃発の第一報が在米中で精力的に講演活動等をこなしていたトロツキー、ブハーリンらのもとへ届いた後、直ちに3月27日にトロツキーらの帰国第一陣が発ち、4月5日にはブハーリン、ヴォロダルスキーらの第二陣が続いた⁽¹⁴³⁾。

革命勃発の報道以前、在米ロシア人移民にとってアメリカにおけるツァーリ政府機関との関係は最も疎遠なものであった。しかし、革命後事態は急変した。ロシア人移民は(総)領事館をアメリカにおけるロシア人警察部門とみることをやめ⁽¹⁴⁴⁾、帰国のためのヴィザ(場合によっては政治亡命ゆえにパスポート自体)の取得のためにそこへ殺到することになった。

そのきっかけを与えたのは、1917年3月19(6)日に採択されたロシア臨時政府による政治的監禁者・亡命者の恩赦に関する法律であった。それはロシア外務省の回状によって合州国およびカナダのすべての総領事(ニューヨーク、ピッツバーグ、シカゴ、サンフランシスコ、シアトル、ヴァンクーヴァー、モントリオール)に伝えられ、政治亡命者の帰還への協力(時には金銭的援助までも)が命じられた⁽¹⁴⁵⁾。これによりニューヨークを中心に総領事館のある各都市でロシアへの政治亡命者の送り出しに関する委員会設立の動きが加速する。

なお、上記帰国第一陣のトロツキーら6名のロシア人はトロツキーの妻子3名を含めて、1917年4月3日にカナダ・ハリファックス港のイギリス海軍当局によって敵国ドイツ人の嫌疑でアマーストに拘留された。直ちに4月6日、モントリオールのロシア総領事は長文電報を送り、ニューヨークのロシア総領事によって発行されたパスポートの所持者である彼らの拘留に抗議し、そしてトロツキーらは4月29日に再び帰国の途につくことになった⁽¹⁴⁶⁾。このエピソードからわかることは、ロシア総領事による政治亡命者へのパスポート発行がいち早くトロツキーらになされたことであり、そして即座の抗議の中にロシア臨時政府の姿勢の本気度がこの時窺われたことである。

『ゴーロス・トゥルダー』1917年4月6日号によれば、ニューヨークではすでに22の組織が加わる会議(続く報道によれば、ニューヨーク市ロシア人革命的諸組織会議)が形成され、その目的はロシアへ出発しつつある亡命者の調整と管理であった。すでに同会議によって34名から成る第一陣が送り出され、4月12日にヴァンクーヴァーを離れ、横浜経由でウラジヴォストークへ向かう予定であった。同会議は上記総領事のいるすべての都市で同種の会議形成に速やかに着手するよう呼びかけた。そしてニューヨーク会議に関する情報を同書記が提供できるその問い合わせ先を記していたのだが、それは『HM』と『ゴーロス・トゥルダー』であった⁽¹⁴⁷⁾。両紙の共同がこの帰還運動によって始まっていたの

である。

『ゴーロス・トゥルダー』の方は 1917 年 3 月 23 日号掲載の「すべてのロシア人労働者へ」の中で、「現時点で我々の努力は、ロシア国内でその〔同誌の〕ような機関紙の創刊と維持に向けられなければならない」と表明し、直ちに 2,000 ドル以上の基金を 2、3 週間で集めるために寄付を呼びかけた⁽¹⁴⁸⁾。

ニューヨーク市ロシア人革命的諸組織会議（加盟組織は 24 に増加）が準備した 97 名から成る第二陣が、1917 年 4 月 23 日にシアトルへ向けて出発した。ニューヨークからウラジヴォストークまでの経費は一人あたり約 180 ドルであった。同会議は委員会組織を持つようになり、同書記をコトゥリャレンコ（Д. Котляренко）が務めた。ニューヨーク会議委員会書記宛の問い合わせは、ここでも『ゴーロス・トゥルダー』と『HM』気付であった。

同会議委員会が発行する証明書があれば政治亡命者は、いかなる証明書の提示もなしに障害なく通行証明書を領事館から得ることができた。そのため受付窓口が日曜を除く毎日午前 10 時から午後 3 時まで開設され、午後 6 時から 8 時までは委員会メンバーによる当直が土曜と日曜を除く毎晩配されていた⁽¹⁴⁹⁾。

『ゴーロス・トゥルダー』1917 年 5 月 11 日号では、同誌の清算が表明された。すなわち、「刊行グループ」の最近の実務会議においてアメリカでの刊行停止を方向づけ、ロシアでの機関紙刊行（できれば日刊）に着手することが決定された。そのため予約購読者には、ロシアからの新聞を受け取るか、『HM』など他の新聞を受け取るか、各自の選択をできるだけ速やかに通知してもらうことが呼びかけられた。なお、同号には上記基金のその時点での総額が記されており、それによると 5,406.18 ドルと 125 ルーブリ兌換紙幣であり、当初の予想をはるかに超えるものであった⁽¹⁵⁰⁾。

同誌編集スタッフの帰国についてだが、タニーの証言によれば、シャトフ夫人ら 21 名の一行は 1917 年 5 月 26 日にホーボーケンから「オスカル 2 世」号で東へ向かって出帆したのに対して、シャトフとヴォーリン（Волин [В.М. Эйхенбаум]）は全国から一群が集まるまで待ち、それから姿をくらました。彼らの帰国ルートを誰も知らず、シアトルにいるとの消息があった。全体で約 600 名のアナーキストが出発したが、ロシアへ辿り着けなかった者もいた⁽¹⁵¹⁾。シャトフらは西回りで 7 月（露暦）にペトログラートに到着し、8 月 24（11）日に『ゴーロス・トゥルダー』を復刊することになる⁽¹⁵²⁾。

このような帰国ラッシュと入れ替わるように 1917 年 6 月 19 日、ロシア臨時政府により駐米ロシア大使に任命されたボリス・バフメチェフ（Б.А. Бахметев）ら約 40 名から成る特別使節団がウラジヴォストーク、日本、シアトル経由でワシントンに到着した。翌 20 日、バフメチェフは公式にウィルソン大統領に拝謁した。このあと使節団は 7 月 5 日に常設の駐米ロシア大使館となり、バフメチェフは特命全権大使としての信任状をウィルソンに捧呈することになる⁽¹⁵³⁾。

その使節団の中で産業・貿易を担当していたオメリチェンコは、1920 年に元ニューヨーク・ロシア総領事館副領事コルフ（О.А. Корф）とともに『ロシア-アメリカ便覧』を編集・刊行し、それは両国・両民族の相互利害に関するデータと情報を集めた本格的試みであった。編者たちは約 1,100 にものぼる合州国とカナダにおけるロシア人、ウクライナ人、リトアニア人、ユダヤ人等の組織の詳細なリストを載せているが⁽¹⁵⁴⁾、そこにはアメリカ

共産党、アメリカ共産主義労働党ないし URW のいかなるロシア人支部もないと言い、その理由として以下のように記している。1920 年初め、これらの組織へ多くの襲撃があり、連邦や州当局によって多くが逮捕されたゆえに、それらの以前の住所はいかなる価値もないからだ、と⁽¹⁵⁵⁾。反ソヴェト政権の立場を取った編者たちにとっては好都合な理由づけと言わなければならないが、それでは在米ロシア人労働者の一方の面がごっそり抜け落ちてしまう。

反ソないし親ソ的立場からだけの考察では在米ロシア人の全体像は捉えられない。両立場がせめぎ合う現場から、在米ロシア人組織統一の試みを手がかりに在米ロシア人移民労働運動の中へと入って行くことにする。

なお、バフメチェフ一行が到着する直前、1917 年 6 月 2-3 日にアメリカ社会党ロシア人部はバッファローで第 2 回同ロシア人部連盟会議を開催した。それは「事実上、現時点でアメリカ社会党内のすべてのロシア人部の最初の統一会議となるであろう」と謳われたが、実際、1915 年 5 月の 18 部、250 ～ 300 名の会員を抱えて第 1 回会議が開催されたあと 2 年ぶりに開催されたその時、組織は 27 部、400 ～ 500 名の会員へと急増しつつあった⁽¹⁵⁶⁾。そこでは、ロシア革命によって提起された問題やロシア人全コロニーに対して自分たちが取るべき態度等が論じられたが⁽¹⁵⁷⁾、本稿では、アメリカ社会党（のちにアメリカ共産党またはアメリカ共産主義労働党）ロシア人部連盟に焦点を合わせることはせず、可能な限り労働運動に近寄って考察することにする。

バフメチェフの前任大使ユリー・バフメチェフ (Ю.П. Бахметев) は、すでに 1917 年 3 月 26 日に駐米ロシア各総領事へ、帰国費用について必要な範囲で弁償、前貸しとかの便宜を図るように、ただし貸付申請に際して請願者が政治亡命者の疑いがある場合は照会のために連絡せよ、との通達を出していた⁽¹⁵⁸⁾。

ヴィザ発給条件の緩和ばかりか、そのような便宜が、結果的に政治亡命者の帰国を許す可能性を高めた。しかし 7 月攻勢敗北後、今度はそれを制限する対応策として出された政治亡命者への通行証明書交付の新しい規則が、1917 年 8 月 8 日唐突にバフメチェフ新大使によって公表された。すべての政治亡命者の問い合わせはペトログラートへ送られ、そこから同意の回答があった場合に限り証明書が交付されることになった⁽¹⁵⁹⁾。その帰国制限は憤慨と不満を引き起こした。

ボリス・バフメチェフの外務大臣宛 8 月 25 日付報告によれば⁽¹⁶⁰⁾、当地で開催された政治亡命者代表大会で以下のような決議がなされた。

- 1) この指令は政治亡命者が恩赦を利用する可能性を奪う。
- 2) 政治亡命者の帰国の問題は、他のロシア市民と同一の条件で提起されえないし、されるべきではない。
- 3) ……/ 4) 政治亡命者には、帰国して新しい国のための闘いに参加すること以上に考慮に値する理由はありえない。

以上を考慮に入れて、さらに大会は 8 月 4 日の新しい規則に反対して抗議し、規則が変更されるためにあらゆる処置を講じる。返答がない場合、ペトログラートに特別な派遣団を送ることを決議した、と。

これに対するバフメチェフの論評は、彼らは祖国の深刻な状況を全く理解していない、

あらゆる政治亡命者の送り出しを一時停止することが時宜にかなうというものだった。

帰国をめぐって明らかにバフメチェフと在米ロシア人政治亡命者との間に隔たりがある。が、この時期、在米ロシア人移民にとってもう一つの問題が立ちはだかっていた。アメリカ参戦の翌月、1917 年 5 月に選抜徴兵法が議会を通り、ロシア人市民に対しても不法な形でアメリカ軍徴募が行われはじめた。そのことが、ロシア人市民の権利を守る目的をもつ組織を生み出すきっかけを与えた。在米ロシア人コロニー統一の試みともなるその動きを、まずオメリチェンコが上記の現職にあった 1917 年 10 月に刊行した『ロシア人コロニーの組織化に関する問題によせて』でみていくことにする⁽¹⁶¹⁾。

1917 年 8 月 12-14 日に政治亡命者の出発に関する革命的諸組織代表者大会が開催され、以下が決議された。1) ロシア人コロニーの状態は革命後少ししか変わらなかったこと、2) ロシア人コロニーの現状が政府代表の特別な注意を求めていることを考慮に入れて、大会は、この状態へロシア政府の注意を向けながら、同会議にロシア人亡命者の利益擁護のため全般的ロシア人機関のその場での創設に自らのイニシャティヴを取ることを推薦する、と⁽¹⁶²⁾。

大会参加者はその決議実行を果たそうとしはじめ、各地でさまざまな運動があった。以下、それらを抜粋する。

1) デトロイトにおいてロシア人市民擁護のための会議デトロイト支部が組織単位の加盟で設立された。実際の活動は、ロシア人市民の不法なアメリカ軍徴募に反対するいくつかの抗議集会開催に現れた。

2) 1917 年 8 月 2 日、ピッツバーグでロシア人市民同盟が形成された。同市民同盟には（デトロイト会議に反対して）組織ではなく個々のロシア人市民が（月会費 25 セントで）入会することとした。

3) だいぶ以前からボストンにロシア人労働者相互援助協会が存在した。同協会の綱領はロシア革命までにすでに出来上がっていたが、すべての協会を一つの連盟に統一することには成功しなかった。それはある程度までロシア革命が在米ロシア人労働者組織に分裂をもたらしたことによっていた。

4) ニューヨークにおいてロシア人社会团体中央委員会（Центральный Комитет Русских Общественных Организаций）が設立された。30 以上ものさまざまな種類の組織が統一されたものである同中央委員会は当時、在米ロシア人諸組織代表大会招集についての考えを強力に練り上げていた⁽¹⁶³⁾。

同中央委員会とアメリカ社会党ロシア人部は、ほとんど同時にそのような大会の招集とプログラムに関する見解をまとめた。対比しやすいように以下、左側に社会党ニューヨーク・ロシア人部によって作成された大会の議事日程を、右側に 1917 年 9 月 17 日の会議で同中央委員会によって採択された大会プログラム案をそれぞれ掲げる⁽¹⁶⁴⁾。

A. アメリカ社会党ニューヨーク・ロシア人部

- 1) ロシア人コロニーの統一
- 2) ロシア人コロニーとロシア大使館・領事館
- 3) アメリカ軍隊へのロシア人市民の引き込み
に関する問題への関係

B. ロシア人社会团体中央委員会

- 1) ロシア人コロニーの世界大戦への関係
- 2) ロシアへの関係
- 3) アメリカへの関係
- 4) 兵役義務への関係

- | | |
|--|--|
| <ul style="list-style-type: none"> 4) ロシア人コロニーの要求 <ul style="list-style-type: none"> a) 文化-啓蒙的〔援助〕 b) 法律的援助 5) ロシア人の自主的活動 <ul style="list-style-type: none"> a) 労働組合<small>ユニオン</small>ロシア人部 b) 相互援助協会 c) ロシア人非政党組織 d) 〔アメリカ〕社会党ロシア人部 e) 協同組合 6) ロシア人コロニーとアメリカ労働運動 7) 政治的および非政治的亡命者の祖国への大量出発 8) 熟練労働者の祖国への大量出発 9) ロシア人コロニーのロシア革命権力機関との直接的関係 | <ul style="list-style-type: none"> 5) パスポートについて 6) 駐米ロシア正式代表について 7) 専門家も一般ロシア人もロシアへの出発について 8) アメリカにおけるロシア調達委員会について 9) 政治的なものについて 10) ロシア人コロニーの教会-教区的、宗教-共同体的生活について 11) ロシアへの代表派遣について 12) 啓蒙的活動について 13) 相互援助について 14) 報道機関<small>プレス</small>について 15) 恒常的な中央組織の組織化について |
|--|--|

両者を比較すると、共通する項目は1) アメリカ軍への徴募、2) ロシアへの出発、3) 駐米ロシア代表（大使館）との関係ぐらいであるが、A. では、2) に関して亡命者および熟練労働者の強調があり、またロシア革命機関との直接的関係など、ロシア革命への能動的姿勢が顕著である。他方、B. の世界大戦およびアメリカとの関係をみると、以下のバフメチェフらの試みに相通じやすい側面をもつ。

1917 年 9 月 29 日～ 10 月 1 日、ロシア臨時政府駐米大使館によって招集されていたロシア大使バフメチェフとそのスタッフ、アメリカ各地のロシア（総）領事、そして広範囲にわたるロシア人社会団体各代表の協議会（ロシア（総）領事およびロシア人コロニー代表協議会）がニューヨークで開催された。そこで可能ならばさまざまな政治的傾向にかかわらず在米ロシア人コロニーに存在するすべての社会団体の代表者大会を招請することが不可避であるとの合意が得られ、そして大会招集案を練ることが委任される委員が選出され、統一組織委員会（Объединенный Организационный Комитет; United Russian Convention Committee）が形成されることになった⁽¹⁶⁵⁾。

同 10 月中に刊行された報告書『ロシア（総）領事およびロシア人コロニー代表協議会』にもとづいて、以下その中身について紹介する。ただし、3 名の編者、つまりドゥィモフ（О. Дымов）、オメリチェンコ、ブランク（П. Бланк）は、それぞれロシアの友協会議長で個人としての招待者、大使館からの 4 番目の代表、ロシア民主主義の友协会会员で在米ロシア人コロニー（シカゴ）からの代表であり、大使館サイドに片寄った人選であり、その上わずか 15 頁しかない小冊子で、信頼できる議事録とまではいえないことは注意を要する⁽¹⁶⁶⁾。

出席者は、以下の通りである。

1. 大使館から 4 名（バフメチェフ、オメリチェンコら）
2. （総）領事館から 8 名
3. （総）領事館附属の為替取引（業務）から 7 名

4. ロシア調達委員会から 19 名（ただし投票権の総数は 6 名に限定）
5. ギリシア正教宣教師団から 1 名
6. ロシア人社会団体から 4 名
7. 在米ロシア人コロニー代表
- 1) ニューヨークから 11 名（7～9 番目はヴァインシチェイン（Г. Вайнштейн）、シュナベル、スハレフスキー（М. Сухаревский）であるが、彼らはいずれも政治亡命者の送り出しに関するニューヨーク会議〔Нью-йоркская Конференция по отправке политических эмигрантов; 既述のニューヨーク市ロシア人革命的諸組織と重なるものとみられる〕からの派遣代表となっている）
- 2) フィラデルフィアから 6 名（当地の大衆集会での選出者あり; 他の都市でもあり）
- 3) ピッツバーグから 1 名／4) シカゴから 2 名／5) デトロイトから 3 名／6) ボルチモアから 1 名／7) ボストンから 3 名／8) クリーヴランドから 1 名／9) サンフランシスコから 1 名
8. 招待された個人 3 名（サック〔A.J. Sack; ロシア情報局 (Russian Information Bureau)〕、ドゥイモフ、インゲルマン博士〔Д-р А. Ингерман; ロシア社会民主主義者ニューヨーク・グループ〕⁽¹⁶⁷⁾)

協議会の目的は、「時局の焦眉のニーズに関するロシア人コロニーの要求の調査」および「在米ロシア人移民の利益を守るために着手しなければならない手段の明確化」であり、以下が協議会のプログラムであった。

- 1) ロシア人コロニーの組織化に関する対策
- 2) ロシアへの〔為替による〕送金について
- 3) パスポート規則に関してロシア市民への帰国〔手続等〕の簡易化について
- 4) 兵役義務について
- 5) 副領事および領事館員について
- 6) ロシア人コロニー全アメリカ（общеамериканского）民主主義大会の招集について
- 7) 法律的援助の組織化について
- 8) 医療援助の組織化について⁽¹⁶⁸⁾

1917 年 9 月 29 日午後 2 時半、特命〔全権〕大使バフメチェフによる開会演説で初日の協議が始まった。バフメチェフによる演説内容は、こうである。

本集会は、コロニーのために社会団体とロシア正式代表との共同作業という焦眉の要求を念頭に招集された全く協力的なものである。ロシア市民のアメリカ軍への召集に関する物騒なコロニーの問題について、現在〔アメリカ〕連邦政府との交渉が行われている。

続いて、ロシア人コロニーの組織化への構成、ニーズ、程度について報告し、その目標は合州国に居住するロシア市民大衆の文化的小および経済的レベルでの向上であり、その実現へ向かう作業のため、とりわけ以下を方針とする予定である。

- 1) 基礎的な啓蒙（ロシア語の読み書き能力など）
- 2) 英語と合州国の学習
- 3) 地域の法律を知らないこととの闘い、ロシア市民への法律的援助など
- 4) ロシア人住民へしかるべき医療援助を与えることなど
- 5) 種々の日常生活援助（相互援助、労働書記局、職業安定所など）

6) 領事館、大使館および中央政府に対してロシア人コロニーの全般的利益を代表することなど

統一の形態に関して、報告者の意見によれば、統一の二つのタイプ、つまり組織単位加盟と個人単位加盟がありうる、と（このことの説明は、1918 年 2 月に実現することになるロシア人全市民大会のあとでまとめて後述する）。

このバフメチェフによる報告は、活発な意見交換を引き起こし、協議の結果、以下を援助する必要性が明らかとなった。すなわち、ロシア人コロニーの自発的組織を基礎として、①文化-啓蒙的援助、②医療援助、③法律的援助。

初日の閉会を前に、資格審査委員会委員としてヴァインシチェイン、オメリチェンコら 8 名が選出され、協議会参加への代表委任状の審査が委任された⁽¹⁶⁹⁾。

9 月 30 日の二日目協議の冒頭、ロシア国立貯金局監査官によってロシアへの送金に関する領事の活動についての報告がなされた。最近 12 カ月で取扱業務は 300 万ドル以上にも達したとのことであり、多くの発言者が、送金への可能な改善（休日および夜間の開設など）を要望した。続いて、資格審査委員会の報告があり、在米コロニー代表 29 名のうち 3 名が認定されなかった。

大いに活発な意見交換がなされたのは、パスポートとロシアへの旅の困難についてであり、大使館代表、つまりバフメチェフは、困難はもっぱらロシアの全般的状況によって引き起こされているという現況説明にとどまった（上記バフメチェフの外務大臣宛 1918 年 8 月 25 日付報告参照）⁽¹⁷⁰⁾。

10 月 1 日の三日目協議の冒頭、兵役義務についての問題が審議され、特別な注意が地域の兵役免除活動に払われた。大使館代表の応答は、問題が生じた場合、上級審に事件を控訴し、あわてずにその結果を待つべきであるという程度のものではあった。それゆえ大使館の干渉は、事件が上級審で負けた後にのみ意味をなすことになるのだが、果たして大使館が「干渉」を実行するかは、下記 1918 年 1 月 31 日会議で論じるように、はなはだ疑問である。ともかく、協議会で推奨されたのは、将来のありうる誤解を避けるために全ロシア市民が前もって自らの身分証明書を携行することであった。

ロシア軍へのアメリカ人およびアメリカ軍へのロシア人の相互召集に関する合州国との協定の可能性について、コロニー代表は、ロシア市民にはロシア軍への兵役義務を果たすために出動する可能性が提供されていると表明し、他の側からは、アメリカ軍の隊列に認められたロシア市民からのロシア部隊を形成する希望も示された。けれども、いずれも現実味を帯びる議論とはなりえなかったろう。

続いて、副領事および領事館員についての問題に関して、大多数の発言者によって州におけるロシア領事館のネットワークの拡大が要求された。とくにデトロイト代表チェルノフ（А. Чернов）ら 3 名は、彼らが選出された大衆集会で採択された、デトロイトに副領事館設立を求める決議を表明した⁽¹⁷¹⁾。

喫緊のロシア人コロニー民主主義的大会の招集に関して、社会団体代表たちは、大使館からの代表も参加するような大会招集組織委員会を本協議会が選出する希望を表明した。それに対して、バフメチェフは、大会招集に全く同感だが、しかしそのような組織化は全く社会団体のイニシャティヴにまかせられなければならないと主張した。そのため、協議を中断して、関係代表だけで話し合いがもたれ、ロシア人コロニー大会招集組織委員会〔統

一組織委員会]のメンバーとして以下の7名が選出された。ブラギンスキー（Брагинский; フィラデルフィア・コロニー）、ヴァインシチェイン、ムジチェンコ（М.Ф. Музыченко; ニューヨーク・コロニー）、ルビノフ（Д.М. Рубинов; 同上）、サフノフスキー（А.Н. Сахновский; ロシア人社会団体）、チェルノフ、シュナベル。

住民の法律的援助の組織化の問題について、①あらゆる領事館に法律顧問のポストの創設、②ロシア人移民の最も重要なセンターでの良心的法律家との関係確立などの構想が大使館代表によって発表されたが、時間遅れのため法律および医療援助についての詳細な審議が、議事日程から取り下げられた。そして夕方6時、議長を務めたバフメチェフが参加者へ謝意を表し、閉会を宣した⁽¹⁷²⁾。

『HM』1917年10月25日号によれば、統一組織委員会によって予め決められた議題は、次の通りであった。

- 1) 法律的援助／2) 医療援助／3) 文化-啓蒙的援助
- 4) アメリカにおける兵役義務の遂行
- 5) ロシア市民への祖国帰還〔手続等〕の簡易化
- 6) ロシア人コロニーの代表的機関の創設およびこの機関と駐米ロシア正式代表との相互関係

それら諸問題に対する関係組織からの回答は、1917年11月15日までとし、12月末に大会開催が予定された。

掲載末尾には統一組織委員会の8名の名が挙げられていた⁽¹⁷³⁾。同じく10月25日の『ルースコエ・スローヴォ』にも掲載された⁽¹⁷⁴⁾この8名と最初の7名の顔ぶれを照合すると、以下のような移動があった。ブラギンスキーとチェルノフが抜け、代わりにグールヴィチ（Н. Гурвич）、ストクリツキー（А. Стоклицкий）、スハレフスキーが入り、『HM』グループが優勢となっていた。この構成メンバーの不釣り合いにもかかわらず、この時まだ、両陣営とバフメチェフ支持グループとの共同が模索されていた。

このあたりの事情については、グールヴィチの『HM』掲載論文が詳しく説明してくれている⁽¹⁷⁵⁾。すなわち、『HM』の最近の号から読者はすでに在米ロシア人大会招集に向けてそれぞれ別々にイニシャティヴを取った二つのグループの統一について知っている。つまり、1) クリーヴランド・グループ（それにアメリカ社会党ニューヨーク・ロシア人部の下で組織された組織委員会が隣接する）、2) 大使館によって招集された会議（上記）で社会団体から選出された代表グループの〔統一〕組織委員会。後者の7名（ニューヨークから5名、その他から2名）から成る〔統一〕組織委員会が、大会招集の準備作業を委任された。

前者のクリーヴランド・グループは当初、地元で10月27日に大会招集を考えていたが、アメリカ社会党ニューヨーク・ロシア人部の下での組織委員会からクリーヴランド〔社会主義・労働者組織〕会議（書記であるペルクスも既述のようにやがてニューヨークへ移って来る）へ宛てられた書簡で統一を呼びかけられたことにより、大会を延期した上で両者が統一した。そして1)のクリーヴランド-ニューヨーク・グループと2)の組織委員会との交渉により、改めて在米ロシア人大会招集に関する統一組織委員会が創設され、同委員会は両グループ同数の計14代表から構成され、地域配分としてはニューヨークから10名、他から4名となった、と。

クリーヴランド・グループに先陣を切られたものの、ニューヨークのアメリカ社会党ロシア人部メンバーが主導していったのである。

1917 年 11 月には、統一組織委員会に紳士・子供服組合ロシア人支部およびエスエル・ニューヨーク組織から各代表 1 名が補充され、大会参加を表明した各都市のアメリカ社会党ロシア人部、アナーキスト・グループ、URW、そしてロシア社会民主党メンシェヴィキ・グループが組織リストに加わった。さらに開かれたばかりの総領事たちと若干のロシア人コロニー代表の会議で大会組織のため 6 名からの委員会が選出され、その中に極左グループは入ったが、ヨリ多くの右派分子を代表する統一ロシア人組織中央委員会の参加は認められなかった⁽¹⁷⁶⁾。

ここで、統一ロシア人組織中央委員会について触れておくと、オクンツォフの記述によれば、1917 年 8 月に『ルースキー・ゴロス』がロシア人全コロニー (обще-колонийного) 大会招集のための宣伝を開始した時期に、旧い組織が変化し、ヨリ進歩的となり、そしてロシア人コロニーを急進主義へと引きつける新しい組織が現れ、それが同中央委員会であり、40 組織が加盟し、メンバー総数は 15,000 名にのぼっていたという⁽¹⁷⁷⁾。またヴィリチュルは、1917 年 8 月 29 日の論評の中で統一ロシア人組織中央委員会を「そこから……ロシア人移民大衆を一つの強力な組織へと実際に統一することができるものの細胞」であると期待していた⁽¹⁷⁸⁾。

実は、統一ロシア人組織中央委員会は、オメリチェンコによって紹介されたロシア人社会団体中央委員会 (第 6 章参照) と重なっていたものとみてよい。なぜならば、1917 年 9 月 17 日会議でロシア人社会団体中央委員会によって大会プログラム案が採択されたことは既述したが、『ルースコエ・スローヴォ』1917 年 9 月 20 日号掲載の「目前に差し迫っている在米ロシア人大会に寄せて」をみると、同案は在米統一ロシア人組織中央委員会が全コロニーおよびロシア人組織代表大会の招集を決定した際、掲げられた問題解決事項と (2 箇所ほど順番が入れ替わっているが) 同一であることがわかるからである⁽¹⁷⁹⁾。

翌 12 月に入って、統一組織委員会会議によって大会作業への援助を、ロシア共和国のメンバーに入っているリトアニア、ウクライナ、ラトヴィヤ、ポーランド、ユダヤ等各民族へ呼びかけることが書記局へ委任された⁽¹⁸⁰⁾ (が、他の民族諸組織との共同どころではなく、ロシア人の運動自体が分裂していく)。

1917 年 12 月 30 日、大会招集に関する統一組織委員会の臨時集会が開かれ、以下が決議された。

- 1) 統一大会招集に関する問題について、統一組織委員会は統一〔ロシア人〕組織中央委員会となんらかの合意に達する程度に必要なすべてを受け入れることとして、中央委員会代表との交渉のために特別委員会が選出された。
- 2) 在米ロシア人全コロニー大会はニューヨーク市で 1918 年 2 月 1-3 日に招集され、大会参加の権利は在米の宗教・政治的信条の如何にかかわらずすべてのロシア人組織に提供されることとなった。
- 3) 代議員選出に関して、50 名までの組織は 1 代議員を選ぶ権利をもち、以下、100 名で 2 代議員、200 名で 3 代議員、300 名で 4 代議員、400 名以上で 5 代議員とした。
- 4) 大会組織化と招集についての全経費 (代議員旅費も含む) は、代議員数に応じてすべての組織間で比例して割り当てられることとした。

5) 議事日程は以下の通りとするが、補充する権利は各組織に与えられ、最終的な議事日程は大会で確定されることとした。

①法律的援助／②文化-啓蒙的援助／③医療援助

④ロシア市民への祖国帰還〔手続等〕の簡易化

⑤ロシア人コロニーの代表的機関の創設およびこの機関と駐米ロシア正式代表との相互関係

⑥ロシア市民をアメリカ軍に引き込むことについて⁽¹⁸¹⁾

この決議は翌月に統一組織委員会のストクリツキーら3名の連名で公表されたが、そこには以下のような細部の変更があった。

1) 10名以上の組織で、1917年12月1日以前に組織されたすべてのロシア人組織が参加できる。

2) 10～50名までの組織から1代議員；50～100名で2代議員；100～200名で3代議員；200～300名で4代議員；400名までとそれ以上でも5代議員；10名未満の組織は代議員派遣のために互いに合併することができる。

3) 各代議員の経費は概算で約25ドルとなる。それには大会組織経費と旅費（切符だけ）も含まれる、等々⁽¹⁸²⁾。

結局、めざす大会は分裂大会となった。その間の経緯を、以下で紹介する第1回在米ロシア人全コロニー大会二日目のストクリツキーによる統一組織委員会報告によってみておく。すなわち、全コロニー大会招集の不可避性の考え方は、さまざまな（とくにニューヨークとクリーヴランドの）組織で同時に起こった。問題は大使のイニシャティヴで招集された（総）領事の大会、もっと正確に言えば、協議会であった。のちに、この協議会で選出された大会招集のための委員会にニューヨークとクリーヴランドの組織が合体し、統一組織委員会が組織された。この統一組織委員会は、〔上記の〕「統一〔ロシア人〕組織中央委員会」との苛烈な闘争を頑張り通した。「共通の大会」をめざして交渉が行われたが、しかし「統一組織中央委員会」は自分たちだけの大会を招集することを決定した、と⁽¹⁸³⁾。

1918年1月26日夕方6時、ニューヨーク、ブルックリン、その他郊外の例外なくすべてのロシア人組織の代表による緊急会議が、唯一の大会招集に関する緊急の方策および一つのコロニーの二つの大会への会議の関係を審議するためにニューヨーク市カジノ・ホールで開会された。

予定された議事日程は以下の通りであった。

1) 会議参加者の委任状の点検

2) Ц.К.〔統一ロシア人組織中央委員会〕と O.O.K.〔統一組織委員会〕の二つの委員会の行動の調整への歩を進めることに関する統一同盟（Союз Единства; 下記）の小報告

3) 会議の議長および書記の選出

4) 討議と決議

そして会議の決定は、Ц.К.と O.O.K.の全組織へ電報、書信、印刷物で通知される予定になっていた⁽¹⁸⁴⁾。

要するに、ニューヨークおよびその近郊のロシア人諸組織会議が、2月1日と2月9日にそれぞれ招集が計画されている双方の大会の統一問題に関して開催されたのであり、緊

急の招集にもかかわらず 32 名の代議員が出席し、会議の組織者として統一同盟⁽¹⁸⁵⁾ 議長セメノフスキー (А.Д. Семеновский) によって開会の辞が述べられた。つまり、いずれ〔上記の二つ〕の委員会も非難するのではなく、状況を研究し、出口を見つけ、誰がコロニーの名で話す権利をもつかを決するために会議が招集された、と。そして彼が議長に選ばれ、以下の議事日程が満場一致で採択された。1) 我々は一つの会議だけを望むか? ; 2) 唯一の会議の可能性 ; 3) 諸手段と諸決議

討議後 18 票の多数決で、在米ロシア人の唯一の大会を要求することとなり、Ц.К.と [O.]O.K.が 2 月 7-9 日の唯一の全体大会招集のために統一するよう提案することが採択された。けれども、[O.]O.K.に加わっている組織の代議員が、2 月 1 日の大会への合併についての彼らの議案を提出し、それが否決されるや騒いで会議を去った、とのことであり、大会一元化の試みは失敗に終わった⁽¹⁸⁶⁾。

同会議は引き続き 1918 年 1 月 31 日に同所で開かれ、その招集は (バフメチェフ駐米大使の「秘密広報管理者」と MID 報告で報じられた) セメノフスキーによって、在米ロシア人が信頼を置いていない大使が、実際は彼らを支援しようとしていることを彼らに示す意図をもっていた。しかし、同報告によると、さまざまなロシア人諸組織からの代議員はほんのわずかな例外を除いて大使に好意的である団体の人々だけから成っており、全体の会議は茶番狂言以外のなにものでもなかった。出席者の一人が問うた、なぜバフメチェフはロシア国籍保持者をせかしてアメリカ軍に入らせることを防ぐための手段を講じないのか? それに対して、バフメチェフは合州国軍の計画へ干渉することを公式に否定した、つまり軍へ選抜徴兵されるいかなるロシア人市民のためにいかなる手段も講じないであろうことを意味した、と⁽¹⁸⁷⁾。

この MID 報告は、ウィルソン政権からの信任を得ていたバフメチェフ側の運動の報告としては手厳しい。ということは、かなり実相に近いとみてよいであろう。ロシアの法律によれば、ロシア市民はロシア政府の特別な許可なしには他国へ帰化することはできないとのことであり⁽¹⁸⁸⁾、なおさら、アメリカで兵役を勤め上げることへの反撥があった。

バフメチェフが在米ロシア人移民労働者の支持を得られなかった原因は、ロシア市民のアメリカ軍徴兵に対して決然とした態度を示せなかった一方で、ウィルソン政権による支援あつての「大使」としての存続であり、その財政支援による旧ツァーリ勢力を含むボリシェヴィキ政権打倒運動への加担にあった⁽¹⁸⁹⁾。

そのバフメチェフの政治的立場を (約 1 年半後の史料だが) ここで確認しておくことにする。

1919 年 10 月 9 日のバフメチェフとアメリカ国務長官ランシング (R. Lansing) との会談の中で、ランシングが追加軍隊を派遣することは不可能であろうと強調したのに対して、バフメチェフは、シベリアではアメリカ軍の存在に反対するいかなる広汎な公の抗議もみられない、と反論した。これに対してランシングは、反対はバフメチェフが考えている以上にヨリ広汎に広がっている、合州国が追加兵を送ることは絶対に不可能だ、と述べた⁽¹⁹⁰⁾。ひと半月後 (11 月 24 日) にも、(ロシア臨時政府期にモスクワ総領事館の副領事を務め、当時国務省のロシア部門の長に就いていた) プール (D.C. Poole) との会談でバフメチェフは、「アメリカの中立」に関して軍需品を供給する用意を含めることの必要性を主張した。武器を送ることは、ロシア人同士が殺し合うためにそれが使われるであろうから、ア

メロカでは不人気だとのプールの懸念に対して、バフメチェフは断乎として反対した⁽¹⁹¹⁾。いづれの非公式発言でも、バフメチェフの強硬姿勢が顕著であった。

なお、バフメチェフ自身が自らの在米中の活動を、外交面を中心に以下のような6つの時期区分のもとに簡潔に概観した原稿が残っている。

- 1) ペトログラートからの出発時から大使職就任まで
- 2) 大使職就任からボリシェヴィキ革命まで
- 3) ボリシェヴィキ革命から世界大戦休戦まで
- 4) 休戦からパリでの講和会議を経て1919年7月ワシントンへの復帰まで
- 5) 1919年7月27日から1921年3月4日、つまりハーディング大統領就任時まで
- 6) [1921年] 3月4日から大使館閉鎖、つまり1922年6月30日まで⁽¹⁹²⁾

その中で「主要問題であったのは、もちろんアメリカ政府との関係であった」と記されているように、バフメチェフの関心が奈辺にあったかは明らかであり、バフメチェフ文庫の膨大な文書類の中には、在米ロシア人コロニー、ましてやその統一の試みに関するものは一切残されていない。

1918年6月25日、ニューヨーク市で1,200名以上が集まったバフメチェフ糾弾集会が、第1回ロシア人全コロニー大会執行委員会（下記）のイニシャティヴで開かれた。最後に登壇したヴァインシチェインは、コロニーの利益擁護の点でのバフメチェフの無活動、大使でありながら自らが果たしている反革命的役割を非難した。集会は、いまやバフメチェフの周りに旧ツァーリ勢力など反革命分子が集まっていること、大使の地位に居直っていること、正式大使でないことをアメリカ政府に訴えることなどの決議の採択で終わった⁽¹⁹³⁾。

ここで、ロシア市民のアメリカ軍徴兵問題について2点ほど付記しておけば、1点目はシカゴの抗議運動であり、それは以下のコレクションによって垣間見ることができる。すなわち、世界大恐慌後、1860年代から1930年代にかけてシカゴで配布されていた22の民族新聞に掲載された約5万もの記事の英訳事業によって集められたコレクション（Chicago Foreign Language Press Survey）によってであり、それは目下、ニューベリイ図書館（Newberry Library）を通じてインターネット上で公開されている。

例えば、1917年8月24日の『ルースカヤ・ポーチュタ [ロシア郵便]』（*Русская Почта*）掲載記事によれば、ロシア革命支援のためのロシア人社会主義者諸組織会議が「アメリカ軍のためのロシア市民の動員に抗議する」電報を3名の上・下院議員に送ったとある。4日後、同会議は大衆集会を開催し、同趣旨の決議をし、ワシントンのバフメチェフ大使、数人の上・下院議員、さらにペトログラート労兵ソヴェトへ打電することになった。その中で、「彼らは戦時中は〔アメリカ〕軍に加わることを強いられ、しかるに一方、平時には市民の権利を奪われている」ことに強く抗議した⁽¹⁹⁴⁾。

「ロシア人移民は……アメリカの世論、社会、プレスおよび主にアメリカ政府をしてロシア人コロニーに注意を払わせることのできる一つの強力な組織さえ持たせよう？ 否である。……今、我々是一个の強力な組織の創造を本気で企てなければならない」⁽¹⁹⁵⁾。ここに、在米ロシア人統一の試みがシカゴでも始まったのである。

もう1点は、当時マスコミでも取り上げられたことであり、例えば『ニューヨーク・トリビューン』1918年7月20日号では、選抜徴兵法は外国人（aliens）の徴兵を明確に排

除しており、軍に今いる多くのロシア人市民は非合法的に誘導されてきている、と指摘された⁽¹⁹⁶⁾。そして同紙9月23日号では、ロシア人市民がアメリカ軍へ徴兵されていることが本日、軍当局によって否定され、外国人は第一帰化書類を取得し、それからアメリカ市民になる希望が再確認されない限り、この国によって徴兵されない旨が報じられた⁽¹⁹⁷⁾。

1919年1月2日付でボリシェヴィキ政権より「アメリカ合州国における外務人民委員部代表」に任命されたマルテンス（Л.К. Мартенс）は、その信任状を3月19日付でアメリカ国務省へ送った⁽¹⁹⁸⁾。引き続き4月10日、マルテンスはワシントンのバフメチェフ宛に、あなたのロシア大使の地位は臨時政府の崩壊によって合法的に終わったので、すべての資金と財産を自分へ委譲すべきである、と書き送ることになる（が、当然のように返事は得られない）⁽¹⁹⁹⁾。

ちなみに、3月18日から任務を遂行しはじめたマルテンスは、ひと月後の時点で毎日の業務の始まりである郵便物整理を次のように記していた。それら郵便物の「最大のグループは、我々との商業関係をしきりに確立したいさまざまな会社からの申し出である。もう一つの非常に大きなグループは、ロシアへ戻ることについての可能性に関する在米ロシア人市民からの問い合わせを含み、これらの中には少なくとも数百の問い合わせがすでにあった」⁽²⁰⁰⁾。いかに在米ロシア人の帰国への関心が高く、マルテンスへの期待が大きかったかが垣間見られる。

1918-19年、ロシア人移民コロニーは、ニトブルクの表現によれば、「荒れ狂っていた」⁽²⁰¹⁾。すでに1917年末、アメリカ社会党ロシア人部連盟とニューヨーク・ロシア人社会団体全国委員会との間で、ロシア人移民コロニー代表大会の招集について話し合いがついた。がしかし、政治的対立がその実現の妨げとなった。結局、すべてのロシア人組織を統一する試みはまとまらず、1918年2月にニューヨークで二つの大会が別々に開催されることになった。

一つは、2月1-4日の「全コロニー」（общеколонияльный）大会であり、赤旗とアメリカ国旗の下で、220の社会主義諸派のさまざまな組織（4万人を有する）から170名の代議員が出席した。

もう一つは、2月9-11日にニューヨーク市アーリントン・ホールで開催されたロシア人「全市民」（общегражданский）大会であり、ロシア〔帝政の国旗を臨時政府が共和制の国旗として流用した〕三色旗とアメリカ国旗の下で、37の「中道」組織（3万200ないし3万500人を有する）の78代議員が出席した。出席者の基本的立場は、ロシアの権力を憲法制定会議へ引き渡すことに賛成し、アメリカ国民および政府への忠誠を示すことであった。大会は在米ロシア人諸組織連盟（Federation of Russian Organizations in America）を創った⁽²⁰²⁾。

これら二つの大会説明は、とりあえず主にニトブルクによったものであり、各数字の根拠は示されていない。「全コロニー」大会については、すぐ後で可能な限り第一次史料にもとづいて第1回在米ロシア人全コロニー大会としてより具体的な説明を試みることにし、「全市民」大会およびその後の展開については、叙述の煩雑さを避ける意味でも次章で取り扱うことにする。

かかる分裂大会開催という対立状況下で、後者の在米ロシア人諸組織連盟に属することに

なるオメリチェンコによる『ロシア人コロニーの組織化に関する問題によせて』の残り3分の1には、その組織統一をめざし試案として提起された綱領が掲げられている。それは短命に終わるというよりは変質していくことになる（後述）同連盟と運命をともにするのだが、その紹介をしておく。

ロシア人コロニーをなんらかの政治的基盤の上に組織しようと努力すべきか？ もしもこの問題を駐米ロシア正式代表の活動と結びつけるならば、その答えは否定的なだけである。なぜならばロシア人コロニーにおいては、なんらかの一つの政治的綱領の上に統一が不可能なほどあまりに多くの種々の傾向が存在しているからである。その上、アメリカとの難しい関係がある。つまり、ロシア正式代表は合州国における内政闘争へ干渉することはできない。また、ロシア代表は〔国と国との関係を前提としているので〕いずれかのアメリカの政党をも後援することはできない。それゆえ大使と（総）領事は、アメリカの内的生活においていかなる目的であれ、政治的目的を自らに据えるロシア人組織を後援することはできない⁽²⁰³⁾。

現在最も緊急の課題は、他の民族ではある程度すでに組織されている〔のに、ロシア革命勃発によって生じている政治的対立による分裂ゆえにそうでない〕生粋のロシア人移住者の統一である。統一の形態について言えば、二つの型の統一がここでは可能である。すなわち、一方は、一組織メンバーとして他の組織全体の列に入るであろう組織の創設であり、他方は、個々の個人から成る団体の創設であるが、結局のところ、個々の組織メンバーおよび個々人として組み入れるところの混合型の機関が想像されうる。

二つの対立する例がある。一つは、ロシア人市民擁護のためのデトロイト会議であり、他の一つは、ピッツバーグ・ロシア人市民同盟である。唯一可能性のあるセンターは〔上記のように、組織ではなく個々の市民参加の〕ピッツバーグ型である。統一のセンターは（総）領事滞在地にあるべきであり、ロシア人コロニーのすべての重要拠点である以下に掲げる都市で、最初に類似の統一を作り出すことが不可欠と思われる。ニューヨーク、シカゴ、フィラデルフィア、ボストン、ピッツバーグ、クリーヴランド、デトロイト、ロサンゼルス、サンフランシスコ、シアトル。

続いて、資金についてだが、金銭問題は開始早々活動を損ねるので、メンバーの自発的拠金、コンサート開催等々が大事であって、組織の外部から援助をあてにしていけない。またロシア正式代表との関係について、センター創設へ向かう運動はロシア大使と（総）領事側からの最も友好的な態度を歓迎しなければならない⁽²⁰⁴⁾。

最後に、以下のテーゼが示された。

- 1) ロシア人コロニーの現状は、緊急の課題として自らの目的（つまり、啓蒙的活動；法律的援助；医療援助；さまざまな形の日常生活の援助）を据えながら組織の創設を提起する。
- 2) 自己組織化と自発的拠金が、類似の団体の創設に際しての根本原理であらねばならない。その際、統一の形態は地方の条件次第で極めて多様でありうる。
- 3) 合州国のロシア代表は、上述の目的のために彼らのすべての統一の試みにおいてロシア人市民に協力と援助を与える義務がある⁽²⁰⁵⁾。

かかる提案では、既述の在米ロシア人の出国および兵役の喫緊の課題の解決へ向けてなんらの方向性すら示されておらず、在米ロシア人労働者の支持を期待するのは無理であっ

たろう。

この統一ロシア人組織中央委員会が主導するグループとの合流は実現しないまま、ついに 1918 年 2 月 1-4 日、第 1 回在米ロシア人全コロニー大会がニューヨーク市ベーターヴェン・ホールで開催された。それは「在米ロシア人移民の歴史において初めて」のものであった⁽²⁰⁶⁾。合州国とカナダのグループと組織を代表する 185 名が出席した。上述の代議員選出基数から推定して、大会は（上記の 4 万人は無理としても最低）約 1 万人の背景をもっていたことになる。

そこでは、以下抜粋する 7 つの議案が採択されるのだが、第一番目からして彼らの姿勢は決然としていた。

- 1) ロシア政府の合州国に対するすべての代表は、合州国におけるロシア労働者から選ばれ、彼らは労働者だけの要求を満たし、合州国や他の政府のいかなる影響からも独立しているべきである。
- 2) 合州国に住み、ロシアへ戻ることを願うロシア人は、煩わされず負担なしにそうすることを許されるべきである。
- 3) 合州国に住み、市民権証書を持たないロシア国籍保持者は軍務に入ることを強いられず、今軍務にあるところの人々は即刻解放されるべきである⁽²⁰⁷⁾。

2 月 1 日夕方、統一組織委員会からヴァインシチェインが挨拶演説を行い、開会を宣言し、統一の不可欠性を強調した。そして彼が議長に、ストクリツキーが副議長に、シュナベルとスハレフスキーが書記にそれぞれ選出された⁽²⁰⁸⁾。

早々と初日の会議で、内部対立が明らかとなった。会議を主導したアメリカ社会党ロシア人部連盟が左派を、さらに極左を〔アナーキスト系の〕URW が占め、逆に〔メンシェヴィキ派であろう〕社会民主主義者ニューヨーク・グループ代議員が右派を、そして労働組合運動家と無党派組織代議員が中央派を占めた。

バークマン (A. Berkman)、エマ・ゴールドマン (E. Goldman) らの逮捕に反対する抗議決議案ならびに両者の帰国を要求する修正案も提出され、両案とも多数決で採択された。当の両人がゲストとして発言を求められ、ゴールドマンの「私の挨拶をロシアへ伝えて下さい」との結語に応えるかのように、URW を代表してペルクスが、ロシアの革命的人民へ歓迎電報を打つことを提案した。それに対して、ソヴェト人民委員会議へ送るべきとのグルヴィチらの提案が出され、投票の結果、102 対 50 (棄権 14) で後者が採択された⁽²⁰⁹⁾。

そして閉会を待たず 2 月 3 日に、大会執行委員会を代表してヴァインシチェインが人民委員会議のレーニンとトロツキー宛に打電し、「人民委員会議によって代表されるような革命的ロシア」へ挨拶を送った。その電報には以下の文が続いていた。「我々は全身全霊あなたがたとともにある。我々はロシアのために革命的軍団を組織する準備がある。返答せよ」。

この時期、アメリカ・レフトウィングをも巻き込んでアメリカ赤衛軍 (Red Guard) 創設運動が起こり、ロシア革命への積極的な支援策としてその計画が練られ、実践に移されつつあった。時を同じくして打電されたアメリカ・ボリシェヴィキ情報局を代表してフレイナ (L.C. Fraina) による、社会主義宣伝同盟を代表してフレイナ、リュトヘルス (S.J. Rutgers)、ロヴィチ夫人 (J.C. Rovitch) の連名による、さらに『HM』を代表してメニショイ (А.Г. Меньшой) の署名による、各人民委員会議宛電報においても赤衛軍創設とそ

れへの指示要請が主題であった⁽²¹⁰⁾。

このアメリカ赤衛軍運動は、選抜徴兵法によるロシア市民のアメリカ軍徴募への言わば対抗運動であった。1918年2月28日、フレイナが議長を務める大衆集会がニューヨーク市で開催され、2,000名以上がドアまで埋まり、同数以上の外の人々が野外集会を開いた。両方ともドイツ専制に反対するロシア革命の大義へ「道徳的、精神的、そして物質的な」支持を誓った。閉会を前に、義勇兵志願の求めに応じて参加者が壇場に押し寄せ、約500名が登録し、会議後その数は増した。基金も553.98ドル集まった。会議後、社会主義宣伝同盟を代表してフレイナがウィルソン大統領へ打電した。「大衆集会に集まった2,000名の労働者と社会主義者は、ドイツ帝国主義に対してロシアで兵役につくため選抜徴兵法下の兵役によらぬアメリカ赤衛軍の徴募をあなたが許可することを求める」と⁽²¹¹⁾。

あとはアメリカ政府の許可を待つだけだったが、その許可願は、翌3月半ばブレスト-リトフスク条約の全ロシア・ソヴェト大会での批准を機に、アメリカ陸軍省によって拒否される。3月25日のフレイナの反論、すなわち「ユダヤ人の歩兵大隊がこの地でパレスティナにおける兵役のために、またポーランド人の軍団が明らかに〔アメリカ〕政府の許可を得てフランスにおける兵役のために組織された。なぜロシアのためのアメリカ赤衛軍はそうでないのか」にもかかわらず、同運動は弾圧強化をめざす政府の断乎たる拒絶の態度に対して変更を迫りえず、どうにも前進できずに終わる。ただし、当の人民委員会議からの応答が得られなかったのは、それらの電報が遮断されたからであった⁽²¹²⁾。

話を在米ロシア人全コロニー大会に戻して、2月3日朝の会議でも、ロシア人コロニー組織の在米ロシア正式代表への関係についてヴァインシチェインが、ロシアでの政権交代により現在いかなる公式の駐米ロシア代表もいない、ロシアから新大使が到着したとき落ち着く、アメリカ政府はロシア新政府を承認すべきだ、と報告した。それに対して、社会民主主義者ニューヨーク・グループが、現在のボリシェヴィキ政府は革命家を逮捕し、社会主義新聞を閉刊に追いやっていると反論し、会議は紛糾し中断した⁽²¹³⁾。

最終日にロシア人コロニー中央委員会が選出され、翌2月5日に19名の名が報じられているが⁽²¹⁴⁾、それは統一組織委員会メンバーから2名だけが抜け、新たに13名が加わった顔ぶれであり、曲がりなりにも「大会はロシア人コロニーを統一した」。「これは合州国とカナダのあらゆる方面に分離され、分散させられているロシア人組織の団結の始まりであ」った⁽²¹⁵⁾。

さらにロシア人労働者コロニー組織形態についても、在米ロシア人全コロニー大会で以下の計画が採択された⁽²¹⁶⁾。

- 1) 地域でロシア人住民とともに労働者代表ソヴェトが創設される。
- 2) 諸ソヴェトは合州国およびカナダ・ロシア人労働者コロニー代表ソヴェト連盟 (Федерация Советов — депутатов рос. рабоч. колонии С.Ш. и Канады) [すぐあとの表記では、ロシア人コロニー労働者代表ソヴェト連盟] に合同する。
- 4) 連盟の最高機関であるのはソヴェト大会である。
- 5) そこで選ばれた委員会がソヴェト執行機関であり、連盟執行機関であるのはソヴェト大会で選ばれた委員会である。
- 6) この組織計画の実現およびそれにもとづいてソヴェトが創設されるであろうところの原理原則の詳しい仕上げは、第1回在米ロシア人全コロニー大会で選出された執行

委員会に委任される。

その執行委員は、上記の 19 名から成り、焦眉の仕事の遂行のために 5 名からの書記局が選抜され、そしてロシア人労働者コロニーの利益擁護のため非政党的公式機関紙を創刊することなどが決められた。

本大会の評価に関して、司法省は本大会の目的がいわゆるロシア-ソヴェト共和国およびその根本方針と戦術を是認し、堅持し、あるいは支持するところの在米ロシア人組織および党のより密接な同盟を確保することであったと捉えたが⁽²¹⁷⁾、それはあまりにボリシェヴィキ政権との関係に注意が向けられすぎて、コロニー統一の試みというより広範囲にわたる運動であったことへの認識が浅い把握であった。

同様に、否、それ以上に『ニューヨーク・タイムズ』1918 年 2 月 5 日号は「ボリシェヴィキは当地の労働者を管理することを決める」という見出しの小記事で「アメリカはいまやボリシェヴィキ・ブロックを持つ」ことになった、との偏向報道を行った⁽²¹⁸⁾。

この在米ロシア人移民の歴史において初めて団結の始まりであるロシア人全コロニー大会および労働者代表ソヴェト創設の試みの中に、「国境を越えて成立する多様な関係性のネットワークの中で自らの生活や理念の『集合性』を時には創造しうる主体的・能動的存在」(注 1 参照)の可能性をみることはできないであろうか？

2) 第 2 回ロシア人全コロニー大会まで

その労働者代表ソヴェトは直ちに創設されなかったが、ニューヨークのロシア人労働者コロニー代表ソヴェト招集に関する臨時委員会が 1918 年 4 月初めに発表した声明によれば、こうである⁽²¹⁹⁾。第 1 回在米ロシア人全コロニー大会は、在米ロシア人労働者の組織形成期の最も適切でしかるべき要求および課題として「ロシア人労働者コロニー代表ソヴェト」を提起した。この大会決定の実現において、3 月 21 日に大会執行委員会書記局によって招集されたニューヨーク労働者代表会議が開かれた(22 組織から 14 代議員が出席)。討議後、ニューヨーク市とその近郊のソヴェトの組織形態が採択され、上記臨時委員会が選出され、そしてニューヨーク・ソヴェトの最初の創設集会が 4 月 11 日午後 8 時に開催されることになった。

1918 年 7 月 1 日に公表された第 1 回ロシア人全コロニー大会執行委員会書記による全労働者代表ソヴェトおよびソヴェトに未だ組織されていない個々の組織への書簡によって、以下の問題の討議が呼びかけられた。1) いつ大会を招集するか？／2) この大会はあなたがたの考えでは、どこで行われるべきか？／……／10) ……。そして第 1 回全コロニー大会執行委員会総会が 7 月後半に行われるので、回答の期限が 7 月 15 日までとされた⁽²²⁰⁾。

しかし、この運動の進展には困難が立ちほだかり、それは 1918 年 9 月 9 日の『HM』に載ったグールヴィチ論文「ニューヨークにおけるロシア人労働者コロニー内の分裂によせて(二つのソヴェトの形成)」に垣間見られる(ただし、編注が最初にあり、筆者自身が同紙書記であったにもかかわらず、編集部はこの問題への見解を控える旨が記されてお

り、微妙な問題があった)⁽²²¹⁾。すなわち、ニューヨークの労働者コロニーで起こっている分裂は、今ロシアで起こっている勢力範囲を決める類似のプロセスの反映にすぎない。このプロセスは一方にボリシェヴィキが、他方に「動揺している」分子がいる。〔第1回ロシア人全コロニー〕大会はロシア人コロニーに最小限で妥協的な政綱を与えたが、しかし、勢力範囲を決めるプロセス（процесс размежевания）は止まることができず、止まらなかった。ロシアで始まったこのプロセスは、在米ロシア人労働者コロニーの中でどんどん進化した。ニューヨークでは二つのソヴェトが形成され、それがこのプロセスの始まりである。このプロセスは、ロシア労働者コロニーの頑丈な政治的成長、階級的自覚と自決の成長の指標にすぎないからである、と。

要するに、ロシア10月革命による社会主義陣営内の政権交代で、新政権を支持するか、前臨時政権を支持するか、あるいは（とくにブレスト-リトフスク講和条約交渉・締結・批准以来、新政権との対立を露わにしつつあった）ロシア・アナキスト陣営をどうみるかなど、ロシア国内の対立が、在米ロシア人労働者運動に直に影響を及ぼしたのである。

ほぼ同時期に発された第1回ロシア人全コロニー大会委員会による日付のない文書に、「革命的ロシアは危機に瀕している。……国際プロレタリアートの支援だけがロシア社会主義共和国を救うことができる。……アメリカに存在するあらゆるロシア人革命的組織をして力強い方法で抗議を表明させよ」とあったように、在米ロシア人労働者にとってロシア革命の帰趨は他人事ではなかった⁽²²²⁾。

MIDの1918年9月23日付覚書によれば⁽²²³⁾、合州国およびカナダ労働者コロニー代表ソヴェトは、まずニューヨーク市で労働者・農民ソヴェトとして組織され、組織の長はブライロフスキー（А. Браиловский）、ビアンキ、ヴァインシチェインとなり、そして機関紙『労働者と農民』1918年6月26日号が英語〔ロシア語の誤り〕で出たという。MIDは、1918年5月末以来ブライロフスキーとヴァインシチェインがかなりの金額を自由に使えることは全く明かだったとみて、ボリシェヴィキ〔政権〕からの資金提供があったのではないかと推定している。確かに1918年5月12日付密偵報告には、『HM』が「突然ある知らない源から財政援助を受けたとの噂」が記されていたが⁽²²⁴⁾、しかし少なくともブライロフスキーについてはあてはまらない。

ブライロフスキーがMIDに自ら語り、1919年1月20日に作成された報告によれば、彼は1905年革命後ロシアを逃れ、数年間フランスに住み、大戦中に合州国に到着し、『HM』で推定月額200ドルという高給で働き、そのほかに原稿料も支払われた。〔同紙編集委員会は徐々にメンシェヴィキからボリシェヴィキ共鳴者へと多数派が交代し〕1918年〔5月か6月〕に高給取りでもある彼は去ることとなり、『労働者と農民』の創刊に加わり、同編集者となった⁽²²⁵⁾。

このブライロフスキーの略歴からも垣間見られるように、労働者・農民ソヴェトおよび同機関紙『労働者と農民』は、『HM』スタッフとそこからの離脱者、そしてURWメンバーの三者間の対立を孕んでいた。早速、半年の間に以下で述べる労働者代表ソヴェトの分裂を引き起こすのだが、先に発行部数が4,000部であった『労働者と農民』の編集スタッフの変遷にアメリカ官憲史料に拠って触れておく。

1919年5月までにブライロフスキーは編集者から降り、経営責任者ユムシャノフ（S.A. Youmshanoff）、編集者マヌセヴィチ（A. Manusevich）らに交代した。その後、編集スタ

ップにコルネエフ (M. Korneev) やオクンツォフまでも名を連ねている⁽²²⁶⁾。

1919 年 11 月 7 月夜に司法省による襲撃を受けた URW の本拠地、人民の家を発行所としていた同紙は、翌 8 日から一時停刊させられた⁽²²⁷⁾。が、1920 年 1 月末時点で一新された 3 名の編集スタッフの官憲報告がある (第 5 章参照)。

『HM』1918 年 10 月 10 日号に載ったアメリカ社会党ロシア人部連盟大会の決議の一つに以下があった⁽²²⁸⁾。在米ロシア人労働者代表ソヴェトとの関わりについて、「大会はロシア社会主義支部に、その中で社会主義者がそのようなソヴェトをうまく社会主義組織へ転化することを自らの最終目的としながら多数派であるところの、そのソヴェトにおいて自らの活動を続けることを勧める。しかし、社会主義者が少数派であり、社会主義的活動が可能でないところのソヴェトの隊列から去ることを勧める」と。同連盟にとって、同ソヴェトはあくまで政争の具としてしかみられていなかった。

ニューヨーク州政府の 1918 年 12 月 5 日付報告をみると、『HM』の指導者、つまりヴァインシチェイン、グールヴィチらと、ブライロフスキー、ニューヨーク・ソヴェト指導者らの「二つのグループが知られない理由で大衆に対して協力して働かないのは公然たる事実であり、ブライロフスキーが旧ロシア政府を代表する或る人物のために働いていると疑われているので信用されえないことについて公然と語る者さえいる、とある⁽²²⁹⁾。

シカゴでのソヴェトの動きも二つの MID 報告に記されていた。一つは、シカゴのソヴェトが機関紙『ラボーチー』(Рабочий)を刊行しはじめ、それはニューヨークの『HM』と似た中西部におけるボリシェヴィキ党の公式機関紙として認められている、との 1918 年 10 月 30 日付報告である⁽²³⁰⁾。もう一つは、1918 年 11 月 10 日にソヴェト主催でロシア・ソヴェト政府創立 1 周年を記念して開かれ、約 1 万人がホールにあふれかえった大規模な大衆集会の報告である。5 名の演説者の中にはストクリツキーもあり、目下防諜法違反で起訴されていたエングダール (J.F. Engdahl) は、ドイツ革命勃発の報を受けて次のように結んだ。「近い将来、我々は合州国のソヴェト共和国を見るであろうことを希望しよう」と⁽²³¹⁾。

ニューヨーク労働者代表ソヴェトは、機関紙『労働者と農民』24 号 (1918 年 12 月 6 日) に大会問題についての声明を出し、1919 年 1 月 6-9 日に〔第 2 回〕全コロニー大会を招集するために動きはじめた。

この動きは、『HM』1918 年 12 月 14 日号に載った「アメリカにおけるロシア人労働者コロニーによせて (ニューヨーク・ソヴェトによる『全コロニー』大会の招集に関して)」で次のように批判的に論評された⁽²³²⁾。『労働者と農民』24 号の中で第 1 回大会執行委員会との交渉の「歴史」、つまり、ソヴェトに「執行委員会と絶交する」よう駆り立て、第 2 回大会招集に関する活動を独自に行わせるに至る経緯が述べられている。第 1 回大会執行委員会のイニシャティヴで 1918 年 4 月に形成されたニューヨーク・ソヴェトの多数を占めたのは、URW および非政党組合組織の代表であり、つまりアナルコ-メンシェヴィキ的分子からなる多数派は、ボリシェヴィキ-社会主義少数派との闘争を導いた。その結果、ソヴェトの社会主義少数派はそこから去り、社会主義者の会議を形成した。ニューヨーク・ソヴェトは、これで安心せず、執行委員会から第 2 回全コロニー大会の招集権を剥がしはじめた、と。

ニューヨーク・ソヴェトへの 1 回大会執行委員会の約半数メンバーによる批判声明が続

いた⁽²³³⁾。それは第2回大会への招集権を同執行委員会が同ソヴェトへ委任したことを否定し、『労働者と農民』がソヴェトの機関紙であることへの疑念も表明した。同紙数号の政治的内容や掲載された情報を注意してみると、ほとんど専ら URW の諸要求を取り扱っているにすぎないとして。

両陣営が激突した 1918 年 12 月 27 日の大衆集会の詳しい密偵報告には、こうあった⁽²³⁴⁾。私〔共産主義陣営に潜入していた密偵 N-100〕は『HM』から電話で呼び出された。ヴァインシチェインは私に大衆集会が今晚ロシア・アナーキストによって開かれるであろうことを語った。そこで彼らの指導者ビアンキが、ロシア・ソヴェト共和国に対する自分たちの態度表明案を作り上げるため、またこの国における革命的プロパガンダの永続的な形態を確立するため、在米全ロシア人急進的諸組織国際会議を招集する必要性について語るであろう。そしてビアンキは、上述の会議に参加することを拒否しているアメリカのロシア・ボリシェヴィキ連盟〔ロシア人部連盟〕を攻撃するつもりだ。それゆえヴァインシチェインは言った。我々はその会議に行き、大衆の前に我々の政綱と計画を口授しなければならない。そのような会議は在米ロシア人全コロニーによってではなく、3,000 名以上ではないメンバーをもつアナーキスト系の URW によってのみ代表されるであろう、と。

私はヴァインシチェインとともに〔会場である〕人民の家に出向いた。ヴァインシチェイン、次いで私がビアンキに反対した。討論は双方の側に対していかなる成果もなしに翌日午前2時まで続いた。

1919 年 1 月 6-9 日、第2回全州国およびカナダ・ロシア人全コロニー代表者大会はニューヨーク市マンハッタン公会堂で開かれた。1 月 6 日午後 3 時、『労働者と農民』編集者であり、MID 報告が「大会の主導者 (the moving spirit) であった」と評した⁽²³⁵⁾ ブライロフスキーの演説で開会した。

会議の中身は今のところほとんど『HM』の紙面でしか知りえないが、同紙は議事内容を詳細に報じる中で、組織によって代議員選出の基数が大幅に異なるという不公正や、反ソヴェト・ロシア政府感情の一部表出などを批判した⁽²³⁶⁾。

同紙が報ずる報告者の一人の表明によれば、大会は 33,777 名（ただし、以下の内訳を合計すると 33,787 名となる）のロシア人労働者を代表する 118 名の代議員が集まり、その内訳はこうだった（ただし、既述のスピアの報告ではわずかな違いがあり、36,975 名を代表する 123 名の代議員とあり、以下の丸括弧内の数字がスピア報告によるものである）。

- 1) 58 (60) 名が 25,425 名の非政党的労働組合を代表して〔438 名で 1 代議員選出〕
- 2) 48 (49) 名が 7,738 名の URW を代表して〔161 名で 1 代議員選出〕
- 3) 7 (9) 名が 495 名の「社会主義者」を代表して〔71 名で 1 代議員選出〕
- 4) 2 (2) 名が 85 名の IWW 員を代表して〔43 名で 1 代議員選出〕
- 5) 3 (3) 名が 44 名の生粋のアナーキストを代表して〔15 名で 1 代議員選出〕⁽²³⁷⁾

各末尾の角括弧内は、『HM』のデータで代議員の各選出単位を出してみたものだが、『HM』が批判するように、代議員選出の基数のバランスがなぜこうも違いすぎるのだろうか。しかもアナーキストがもっとも有利な選出となっている。

「先年、〔第1回全コロニー大会で〕ボリシェヴィキが勝利した。この大会において（…）あなたがたボリシェヴィキは、破局を恐れた。……たとえ革命的組織が政治に関心をもつとしても、コロニーは全体としてこれに興味をもたない」。この発言に対して、『HM』

は次のように論評した。もちろんペルクスは、ロシア社会主義連盟の真のボリシェヴィキがこの大会へ参加することを拒否したことについて沈黙している、と⁽²³⁸⁾。

ペルクスの方も、「我々をアナルコ-メンシェヴィキと呼ぶことをやめる要求を『HM』に送ることを提案し」たが⁽²³⁹⁾、この問題に関する限り、同紙に分はない（同紙による大会報道は「アナルコ-メンシェヴィキ大会において」という不適切なシリーズ・タイトルの下でなされた）。両者の対立は激しくなるばかりであった。

大会から去った左翼エスエルの2代議員からの「なぜ我々は大会を去ったか？」の声明文が『HM』に載った。すなわち、全コロニー大会は、合州国およびカナダのコロニーの気分と願望を代表していないし、表していない。我々が大会による社会主義ソヴェト政府への全般的関係の明確化を要求したのに対して、大会はソヴェト政府への敵対関係を露わにする恐怖心から回答を拒絶した、と⁽²⁴⁰⁾。

確かに、ビアンキらは「ソヴェト政府の承認に関する問題の投票を棄権した」。「我々はいかなる政府も認めないし、あらゆる権力および国家の形態も否定」しているからとの理由をビアンキは挙げているが⁽²⁴¹⁾、それだとソヴェト政府承認への反対投票があってもよさそうだ。左翼エスエル代議員の判断の方がより説得力があるものの、むしろ回答拒絶の中に「共同」の可能性が残されていたとみられないか。スピアの報告では（おそらく警戒心も働いたからであろうが）、「URW はボリシェヴィキをその反革命との闘争において支持することは可能であることを知っている。なぜならばボリシェヴィキは疑いなくロシア社会民主党の最も革命的な部分であるから」と判断されていた⁽²⁴²⁾。

なお、本大会は第2回執行委員会の名で数日遅れの1月13日にウィルソン大統領宛電報を打った。それは長文だったが、「ロシア人民の獲得物を無にするための」連合国軍によるロシア武力干渉への抗議に絞ったものであった⁽²⁴³⁾。

この第2回大会における鋭い意見の対立は、モスクワのコミンテルン本部にも深刻な波紋を引き起こした。コミンテルン執行委員会を代表してメニショイとバールジン（Я.К. Берзин）による以下の内容の書簡が、密使によってモスクワから合州国へ届けられることになった⁽²⁴⁴⁾。

『HM』がボイコットした第2回ロシア人全コロニー大会についてのあなたがたの口論と誤解について我々は聞いたばかりだ。コミンテルン〔執行委員会〕ビューローは、あなたがたの闘争が原則の問題にもとづいていないことを知っており、すべての口論と闘争の即時終結、両誌〔『HM』と『労働者と農民』〕を一つに即時接合すること、そしてソヴェトと党活動の即時共同をあなたがたに要求する。

あなたがたはソヴェト政綱にもとづいて多数の移民労働者の共同をめざし、アメリカの世論へ影響を及ぼすこと（情報活動）とアメリカ労働運動へ影響を及ぼすこと（煽動活動）を試みなければならない。これらの目的はあなたがたの中に口論と誤解がある限り不可能だ。コミンテルン・ビューローは、ソヴェト政綱にもとづくすべてのグループの合流を主張する。ソヴェトと共同する希望を表明するアナーキスト、かつてのメンシェヴィキ、インテリゲンチヤは拒絶されてはならない。

末尾に挙げた諸グループに対してコミンテルン本部自体が共同どころかほとんど敵対していくのだから、本書簡は説得力をもちようがなかったろう。

この後の史料は見つけがたく、一つはロシアへ送られたか、持ち込まれた第2回ロシア

人全コロニー大会執行委員会署名の声明文（日付なし）があるが、それはモルダヴィア・ソヴェト社会主義共和国ロシア 10 月革命および社会主義建設国立中央文書館で発見され、1957 年に公表された⁽²⁴⁵⁾。それはアメリカ政府による在米ロシア人市民への迫害等の現状が記され、以下の（いささか事の単純化が窺われる）パラグラフで結ばれたものであった。「我々は血の革命も、『陰謀』の実行も、自由なアメリカの民主主義も欲してはいない。我々が欲しているのは一つ、すなわち、国境の開放とロシへの拘束のない出発である。…我々に国境を開放せよ！ 我々はこれを要求する！」

もう一つは、1919 年 8 月 24 日ニューヨーク市で開かれた統一ロシア人諸政党会議に関するラスク委員会への密偵報告がある。すなわち、午後 1 時に開場し、午後 2 時半には約 250 名が集まり、その大多数は急進主義者、とりわけアナーキスト系と IWW であった。午後 3 時にグリクスタス（L. Grikstas）とロシア・ソヴェト評議会〔マ〕からのユムシャノフがホールに入って来て、会議を招集することが決定された。代議員が前方へ移り、信任状が集められ、記録された。大半を URW の支部が占め、その他に共産党〔正式にはこの時まで共産党は創立されていない〕ブルックリンから 3 代議員とか、第 2 回ロシア人全コロニー大会執行委員会から 3 代議員とかがいた。

グリクスタスが登壇して次のように語った。同志たちよ、会議の目的は我々の政府にソヴェト・ロシアの封鎖を解除させることである、この国には 1,400 万人〔マ〕以上のロシア人がいて帰国を欲している、と。そして彼が議長に選ばれた。

ペデリスキー（Pedelsky）が、我々は在米ロシア人コロニーを統一するであろう一評議会を組織しなければならない、など 4 項目のプランを示した。が、これにグリクスタスが反撥し、議長を一端は降りたが、再選され、それでも議長を放棄し、ロシア人水兵同盟のホルネエフが議長となった。その後、19 人委員会が選出され、翌日集まって更なるプランを立てることとなって、午後 7 時に閉会した。

密偵報告のまとめは、以下のように誇張されていた。この運動は非常に深刻なものであり、それは遅滞なく果たされるにちがいない、というのはこの国とカナダのすべての産業に重大な効果を及ぼすであろうから。急進主義者は力を獲得し、それによって重大な危機を引き起こすであろう、と⁽²⁴⁶⁾。

第 2 回全コロニー大会のわずか 7 カ月半後の会議であるが、アナーキスト指導者の顔ぶれは一変しており、密偵の予想に反して、在米ロシア人コロニーの統一はますます遠ざかりつつあった。

3) 第 3 回ロシア人全コロニー大会まで

1919 年 11 月の URW 弾圧後、1920 年の URW 再組織化の動きについては、すでに第 5 章で考察した。そして 1921 年に入って合州国・カナダ・アナーキスト-共産主義諸グループ連盟とは立場を異にするグループによって、3 月 6-9 日にニューヨーク市アストリアル・ホールで第 3 回ロシア人全コロニー大会が開催されることになった。その議事内容については、詳しい（と言っても網羅的ではない）密偵報告および同決議報告があるので、

それらによって以下紹介していく（ただし両報告には、既述の同大会を準備した統一ロシア人職業人同盟執行委員会の議長や書記の名は見当たらず、むしろ目立つのは 1919 年 6 月段階で URW 連盟の会議で批判されていた既述のミハイロフである）⁽²⁴⁷⁾。

大会には 1 万人〔誇張であろう〕を代表する 37 組織から 34 代議員が集まり、各自 40 ドルを預け金としたため、収入は 1,360 ドルとなり、そのうち 512.24 ドルが開会時に使われていた。3 月 6 日正午の開催にあたって「パーマーの密偵がロシア人急進主義者を一斉検挙するのになお非常に活動的であり、討議中いかなる革命的な演説もしないように」との注意が予め促されたが、後述するように、それは守られなかった。

最初に議長団、書記団が選出されたが、顔ぶれは一新されていた。続いて、14 の議事日程が採択され、おおよそそれに沿ってみていくと、まず議題 2 「第 2 回全コロニー執行委員会報告」について。同委員会のコルネエフ、ユムシャノフら 4 名は、この第 3 回大会が規則に則って招集されず、合州国とカナダの大多数のロシア人組織を代表していないとの理由で、同委員会の活動報告を出すことを拒んだ。そこで、かつて同委員会メンバーであったミハイロフがその活動報告をし、その中でいかなるほんとうの活動もなされなかったと述べた。決議の中の第一項目でも「第 2 回全コロニー大会執行委員会は、その機能を停止しなければならない」と表明されたが、明らかに開催手続上の問題があった。

議題 3 「ロシア人職業人同盟および教育協会執行委員会報告」では、URW 襲撃後、1920 年 2 月 1 日にカジノ・ホールで招集された会議で同職業人同盟・教育協会が組織されたが、自ら認めるように、司法省によって粉砕された組織を未だ再組織化することができていなかった。また同報告によれば、『アメリカンスキエ・イズヴェスチヤ』は同組織の管理へと引き継がれたとのことだが、停刊を経験し、財政逼迫の状態であった。

議題 4 「ロシア人およびアメリカに残っているロシア市民孤児のロシアへの移送」は、本大会の「主要問題」と位置づけられていた。「移送委員会は、もしも彼らが 1,500 人をロシアへ移送するすべての費用を賄うであろう 10 万ドルが調達できるならば、1 隻の船を借り上げることが可能だとわかった。また 1,000 人が各々 100 ドル支払う用意をするならば、あと 500 人無料で連れて行くことができるだろう」との報告があったが、決議では具体的提案は盛り込まれなかった。

引き続き関連して、政治囚および国外追放者の擁護のための委員会報告があり、それによると、同委員会はこの 14 カ月の間 700 以上の事例を取り扱い、費用は 13,987 ドルかかり、3,000 ドルの赤字であり、その赤字の清算が求められた。

議題 7 「労働者新聞」においてミハイロフが、いかに『労働者と農民』および『パンと自由』が刊行されたかを説明した。すなわち、「あまりに知的すぎたこと」が両紙の衰退の原因であり、最終的に司法省によって停刊に追いやられた。第 2 回全コロニー執行委員会のいく人かのメンバーが、もう一つの労働者新聞を開始することが緊急であると決定し、『アメリカンスキエ・イズヴェスチヤ』を組織した。創刊号のあと司法省に襲撃され、編集者がたたかれ、2、3 日停刊を強いられたが、のちに同紙は他の同志によって組織され、定期的に発送されている、と。

続いて、いかなる政策が将来、同紙によって採られるであろうかについて全体討論があり、再びミハイロフが、「同志諸君、あなたがたすべては我々がアナーキストであることを知っている。なぜ我々は学校やさまざまな教育的協会を組織することによって我々の信

念や教義を、しかも『アメリカンスキエ・イズヴェスチヤ』に適用されるそれを包み隠すべきであろうか。きっぱりと我々は、それはアナーキストの新聞であると明瞭に言うべきであり、その真の性格と目的を明確に確立すべきである」と主張した。

早速、議長が「革命的表現を控えるよう」命じたけれども、今度は共産主義者から唯一出席していたデトロイトのシヴコ (E. Sivko) が「あなたはアナーキストだ、それじゃあ私は共産主義者だ。もしもあなたがアナーキズムの政策を要求するならば、私は共産主義のそれを要求し、そしてアナーキズムのプロパガンダが『アメリカンスキエ・イズヴェスチヤ』を通じて教えられることに決して同意しないつもりだ」。同様に議長から注意されたにもかかわらず、シヴコは、もしも同紙にアナーキズムのプロパガンダを公表するならば、共産主義の理論家を招いて自らのプロパガンダを同紙に書かせなければならない、と提案した。

結局、あらゆる代議員が同紙を非政治的に取り扱う案に満足したわけではないとの了解をもって、議案作成を委員会に委ね、決議では、組織を代表することは控えさせるが、同紙へより多くの寄稿者を請い、内容を改善しながら継続することを推薦することとなった(ミハイロフはその決定に不服で、同紙の編集者を辞任することを公言した)。

このやり取りをみる限り、アナーキストと共産主義者との溝はもはや埋まりそうもない。かかる政治路線をめぐる対立は、議題 10「ソヴェト・ロシアに対する我々の関係」でも表面化し、キン (Kin) によるボリシェヴィキ非難に対して、シヴコが反論の機会を求めたが、その機会を代議員たちは彼に与えず、大会はほとんど分裂寸前となった。が、議長が秩序を保つのに成功した。議案作成委員会に、ソヴェト・ロシアを歓迎するが、いかなる独裁の形態をも非難する議案作成が指示された。

議題 12「合州国およびカナダのロシア人コロニーの統一」については、なんらの言及もない。たとえ討議があったとしても、話が進展しなかったのではなかろうか。

同大会は 11 名から成る執行委員会を選出することになり、同委員会は月間報告を印刷して出し、また 3 カ月毎に招集される地区の革命的諸組織会議によって管理されることになった。ロシア人の移送問題に関しても、「出発するつもりであるところの人々の政党やグループの組織化を企てるであろう地方における委員会の形成を推薦する」とか、「地方の急進的・革新的組織を管理する委員会を合州国のニューヨークに一つとカナダに一つ創る」とか決議しているが、上述のような政治的対立や政府による弾圧下での困難な運動の中で、掛け声倒れに終わらざるをえなかったろう。

本章のまとめをしておこう。

ロシア 2 月革命勃発後、在米ロシア人政治亡命者ないし移民は、帰国準備および革命政権支援のため、ロシア人市民のアメリカ軍選抜徴兵の動きへの対処のため、そして駐米新ロシア大使バフメチェフとの関係をどのように結ぶかの検討などのため、アメリカ国内での組織統一、つまり在米ロシア人コロニー統一を求める運動を急激に展開していった。その試みは当初、①(口火を切ったクリーヴランド社会主義・労働者組織と合同した) ニューヨークのアメリカ社会党ロシア人部、② URW の指導部を占めたアナーキスト・グループ、③バフメチェフを支持する市民グループの間で試行錯誤された。三者によって統一組織委員会が設立されたが、すぐに③は独自に統一ロシア人組織中央委員会を設立した。出

発支援および選抜徴兵に対するロシア大使の対処の生ぬるさを批判する①と②は、ロシア人全コロニー大会の共催を模索して③の中央委員会と折衝したが、最終的に③の参加を断り、1918年2月に第1回ロシア人全コロニー大会を開催することになった。

大会はロシア国籍保持者の徴兵不可などの決議とともに、ロシア人労働者コロニーの組織形態として労働者代表ソヴェトの創設、諸ソヴェトの連盟形成およびソヴェト大会の計画をも採択した。大会は「在米ロシア人移民の歴史において初めて」曲がりなりにも「ロシア人コロニーを統一し」、「これは合州国とカナダのあらゆる方面に分離され、分散させられているロシア人組織の団結の始まりである」とした。一度は「工場街の煙の中へと消えた」民族的アイデンティティが、主体的・能動的なアイデンティティとして復活しつつあったと言えるのではないかな。

しかし今度は、第1回大会で主導権を握った①社会党ロシア人と、② URW アナーキスト・グループとが、同ソヴェト創設の試みの中で対立した。ニューヨークで率先して創設された同ソヴェトは、今度はアナーキスト・グループに主導されることになり、1919年1月に同グループによって第2回ロシア人全コロニー大会が開催されることになった。この対立は、今ロシアで起こっている「勢力範囲を決めるプロセス」の反映であった。

大会をボイコットした①は、アメリカ共産主義政党創設へ注力していった。他方、②は大会で新執行委員会を選出したが、その中でも対立が生じ、2年2カ月の間をあけて（再組織化された URW を財政的に継承した）合州国およびカナダ・アナーキスト-共産主義諸グループ連盟とは敵対するグループだけが強引に第3回ロシア人全コロニー大会を1921年3月に開催した。そこでも一方で自分たちと共産主義者との政治的対立・分裂を繰り返し、他方でコロニー統一どころか帰国工作も実質的に進められなかった。これ以後、在米ロシア人コロニーの統一運動は終熄していったものとみられる。

第3章のロシア語新聞の紙面分析で明らかにされたように、1921年初めの段階では在米ロシア人移民のソヴェト・ロシア政権への支持ないし中立的関心の高さは依然保たれていた。一般読者以上にロシア人移民労働者にとって、ロシア革命の帰趨は他人事ではなく、重大な関心事であった。良くも悪しくも革命ロシアでの対立関係が彼らの運動に大きな影響を及ぼさざるをえなかった。在米ロシア人コロニー統一の試み自体がその対立関係の波をもろにかぶり、アメリカ政府による弾圧下で四分五裂していった。

結局のところ、在米ロシア人コロニーの統一をめざしたロシア人移民労働者の中に、（ロシア革命を機にその可能性が高まった）トランスナショナル・アイデンティティの形成をみるには、（これまた革命が引き金となって生じた）多くの内的・外的阻害要因がありすぎたと言えよう。

7 ロシア人コロニー全市民大会と在米ロシア人諸組織連盟

1918 年 2 月 9-11 日開催の在米ロシア人全市民大会について私が利用しえた史料は『ルースコエ・スローヴォ』とオクンツォフの後年の著作であり、しかも前者のコピーに一部不鮮明のところもあり、以下の説明は暫定的である旨、予め断っておきたい。

同大会のプログラムは、以下であった。戦争、ロシア、そしてアメリカへのロシア人の関係；兵役義務；パスポート；ロシア人亡命者からの代表選出；ロシアへの出発；政治的なもの；教会-教区の生活；ロシアへの代表派遣；啓蒙と相互援助；報道機関；組織化⁽²⁴⁸⁾。

初日の会議冒頭で、ブベシュコ（Бубешко）、オクンツォフ、セメノフスキーの 3 名が議長候補に指名され、多数決でセメノフスキーが議長に選出された⁽²⁴⁹⁾。二日目の会議で、自らをボリシェヴィキの戦術および「ソヴェト」のテロルからきっぱりと切り離し、憲法制定会議の即座の召集を要求することとなった⁽²⁵⁰⁾。

そして三日目の会議では、アメリカ労働総同盟（AFL）会長ゴムパース（S. Gompers）からの歓迎書簡が届き、また駐米ロシア大使館からの祝電も届いた。ただし、後者はバフメチェフではなく、書記名（В. Карпович）であったところに関心の低さを推測できるのではなかろうか⁽²⁵¹⁾。大会の方からは、ウィルソン大統領へ打電することとなった。その中で強調されたのは、ロシア人コロニーに直接関わる問題ではなく、ロシア民主共和国の主権回復のために唯一可能な憲法制定会議の実現要求、および同盟国との部分講和反対の態度表明であった⁽²⁵²⁾。

上記の盛りだくさんのプログラムが、どれほど議論の俎上にのせられたかは不明だが、以下の三日目の議論に関する MID 報告をみれば、深刻な対立があったことが窺われる⁽²⁵³⁾。すなわち、多くのロシア人市民が不法にアメリカ軍にとられている問題で、アメリカ政府は誰も不法に選抜徴兵することを望んでおらず、すべてのトラブルはロシア人が免除される権利を主張する法律を知らないという事実にある、との一発言があるやいなや、「彼は嘘つきだ」との声が会場から上がり、紛糾した（『ニューヨーク・タイムズ』の報道によれば⁽²⁵⁴⁾、議長を務めたセメノフスキーは警察官導入をも要請し、事態を収拾した）。オクンツォフもロシア大使と（総）領事を、彼らがロシア人コロニーの利害を守らず不活動ゆえに痛烈に批判した。この問題にヨリ注意深く取り組むべきだとの発言もあるものの、わずか 1 枚強しか報告されていない文章の中で批判のトーンが優勢であった。

1918 年 3 月半ばにブレスト-リトフスク条約が全ロシア・ソヴェト大会で批准された後、ボリシェヴィキ新政権は条約を拒否するであろうとの希望的観測が裏切られたアメリカ政界および言論界において、新政権批判が公然化していた。その時期、『ニューヨーク・タイムズ』1918 年 5 月 23 日号の記事「当地の 20 万人のスラヴ人、カイザーと戦う用意あり」によれば、ニューヨークで新たに結成されたロシア人義勇軍組織を代表してセメノフスキー、ローゼンターリ（Е. Розенталь）ら 4 名の代表団が請願のため首都へ向かった。彼らがウィルソン大統領に求めたのは、直ちに義勇軍をアメリカ西海岸に集め、そこ

からシベリア経由でロシアの最前線に送る計画案の実施許可であった。ここで問題にしたいのは、以下のローゼンターリの発言であった。「我々が企てている計画は、この国とカナダにおけるすべての評判のよい (reputable) ロシア人協会を包含しているアメリカのロシア人諸組織連盟のよく考えられた判断を代表している。それはこの都市のアーリントン・ホールで先の冬早々開催された5日間の全ロシア人大会の結論である」⁽²⁵⁵⁾。開催期間に下駄を履かせていることは論外として、当該大会を主導したセメノフスキーらが、いかに大会を自分たちの立場に引き寄せ利用しようとしていたかの思惑が、ここに垣間見られる。その会見にはアメリカ大統領も陸軍長官ベイカー (N.D. Baker) は応じなかった。

この代表団は、オクンツォフの評価によれば、ロシア人全市民大会を代表してのものであったが、その派遣は「ロシア人コロニーを犠牲にしてより大事なことを台無しにする」行動であった⁽²⁵⁶⁾。

ロシア人コロニー全市民大会で創設されることになった在米ロシア人諸組織連盟に関して、ニューヨーク公共図書館には1箱(7フォルダー)だけだが当該史料が残されている。ただし、同連盟執行中央委員会関係文書は散発的にしかなく、同連盟の有力なフィラデルフィア地区(支部)委員会関係文書(1918年3月2日の地区(支部)委員会第1回会議からほぼ1週間おきに開催され、4月14日の第7回会議までの手書き議事録など)が主である。以下、それらの史料によって連盟の活動状況の一端を明らかにする。

最初に、10条から成る在米ロシア人諸組織連盟の規約(Устав (Конституция) Федерации Русских Организации в Америке)を抜粋しておく。

第3条 連盟の目的

- 1) 無党派の原則での在米ロシア人コロニーの広汎な統一
- 2) 啓蒙活動
- 3) 在米ロシア人市民の保護
- 4) ロシア人とアメリカ人との間の友好関係の発展への協力
- 5) ロシアにおける共和主義-民主主義的体制への全面協力

第4条 1) 連盟はアメリカ全州で自らの地区委員会を開設し、既存の組織を自らのメンバーに受け入れ、そして新組織を創設する権利を持つ。／……

第5条 1) ……／2) 執行中央委員会は15名のメンバーと5名の同候補者の数で諸組織代表者全市民大会によって1年間、すなわち来たる大会まで選出される。
3) 執行中央委員会の15名のメンバーは自らの仲間から連盟の職務上の顔、すなわち会長、副会長、出納係、書記を選出する。／……⁽²⁵⁷⁾

ロシア人コロニー全市民大会の最終日(1918年2月11日)に選出された中央執行委員15名のうち10名が出席して、2月18日に第1回会議がニューヨークで開催された。そこで以下の役員が選出され、同4名のうち3名の署名をもって同委員会のすべての小切手は有効とした。すなわち、議長にセムコフスキー、副議長にズヴォリコ (M. Zworyko (Zworiko))、出納係にヴィトネイ (В. Витней-Вишневецкий; William C. Witney)、そして書記にマルティノヴィチ (Л. Мартынович; L.G. Martinowitz; L. Martin) が⁽²⁵⁸⁾。

散発的に残されている連盟執行中央委員会文書類のうち、1918年8月13日付文書で連盟はバフメチェフ大使へ、誤ってアメリカ軍へ編入された2名のロシア市民の兵役解除に関して取りなしを頼んでいる⁽²⁵⁹⁾。果たしてバフメチェフが取りなしたかどうか詳らかで

はないが、既述の立場からすれば、その可能性は低いとみられる。

1918 年 10 月 28 日の連盟執行中央委員会は、第 2 回在米ロシア人コロニー全市民大会を 12 月 13-15 日に招集することを決定し、10 月 30 日付で執行中央委員会各メンバーへ通知し⁽²⁶⁰⁾、そして活字印刷による在米全ロシア人組織への招請状も配布した。その中で、以下に摘記要約する 13 項目から成る規則に則っての開催であることが記された。

1) 大会にはすべてのロシア人組織（ボリシェヴィキ的および君主主義的組織を除いて）が参加できる。

3) 組織からの代表選出

10 ～ 15 メンバーの各組織から 1 代表

15 ～ 50 メンバーの各組織から 2 代表

50 ～ 100 メンバーの各組織から 3 代表

100 メンバー以上の場合 50 名毎に 1 代表プラスだが、1 組織から 5 代表を越えてはいけない。

5) 各組織は各代表毎に大会経費を賄うため 50 ドルを大会金庫に納入する。

6) 非組織コロニーからの代表選出

75 ないし 100 名の選挙人で 1 代表

100 名以上ならば 2 代表（これを越えてはいけない）⁽²⁶¹⁾

第 1 条の除外規定は、非政治的立場というスタート時の原則を逸脱している。組織からの代表選出のうち最初の 1 代表選出の基礎メンバー数が少なすぎる。また、各代表の参加費用が 50 ドルは、高すぎる（第 6 章第 1 節参照）。このことに関連して、第 2 回大会開催目前の 1918 年 12 月 2 日に連盟は、バフメチェフ大使宛に 3,000 ドル規模の資金援助を拒絶しないよう依頼した。翌 12 月 3 日にバフメチェフによってその金額を請け負うとの返事がなされた⁽²⁶²⁾。その財源はアメリカ政府からのものでしかありえないであろうことから考えて、ロシア人コロニー全市民大会の自立性が根本から疑われてもしかたがないであろう。

すでに連盟は第 2 回大会前に政治的立場の旗幟を鮮明にして変質していたのであり、その一端を連盟フィラデルフィア支部の活動の中で明らかにし、その上で、第 2 回大会の考察に移ることとする。

1918 年 2 月 24 日、フィラデルフィア地区（支部）委員会の選挙のためにロシア人移住者の組織集会在約 600 名の出席者をもって開かれた。議長にアリストアルホフ（П.Н. Аристархов）が選ばれ、350 名で支部が組織されることになった。直近の問題として、医療援助、法律的援助、共済組合、労働事務所、英語の夜間学校、フィラデルフィア領事館の再組織化等々に着手することになり、翌 2 月 25 日から活動を開始した⁽²⁶³⁾。

1918 年 3 月 1 日には連盟支部によって警察署長宛に日曜日毎の三つの集会開催許可が求められた。一つ目は 3 月 3 日の集会で、演者はケレンスキー臨時政府期の議員ブブリコフ（А.А. Бубликов）で、彼はロシアにおける恐ろしい状態を語り、真のロシア人すべてはドイツやボリシェヴィキと闘わなければならないことを訴える予定であると許可申請書に記された。もう一人の演者はニューヨークから駆けつけた連盟議長のセメノフスキーであり、同趣旨の内容を話すであろうとあった⁽²⁶⁴⁾。

当日午後 2 時に開会された集会には 1,000 人以上が参加し、満場一致で採択した決議を

支部長名で大統領に送ることになった。翌日送付されたその中で、日本軍によるロシア領土上陸およびロシア国内問題への干渉に対して抗議すること、およびロシアをチュートンの隷属から救うあらゆる努力をすることを請願した⁽²⁶⁵⁾。

同集会は無党派ロシア人集会を標榜していたにもかかわらず、明らかにアメリカ政府の立場に呼応する政治的立場を取っており、その立場は続く集会でも顕著であった。

二つ目は3月10日の集会で、パターソンのロシア正教会の司祭コズボフ(B.K. Козыбов)が講演し、在米ロシア人農民が自らの生産力を増し、対独戦争に勝利するために適用される方法について語る予定であり、当日は午後4時半に開演した⁽²⁶⁶⁾。

三つ目は3月17日の集会で、連盟支部長アリストルホフの講演で、「いかにこの国のロシア人がロシアをして対独戦争に勝利するよう手助けしたか」が演目であった。

許可申請書の末尾で、これらの講演は秩序あるやり方で行われ、いかなる暴力もないか、もしくは法に違反しないであろう、と記されたが、英訳の組織名が“Philadelphia Branch of the Russian Loyal Organizations of America”と、いつの間にか保守回帰を臭わせかねない“Loyal”が付されていた⁽²⁶⁷⁾。

1918年4月14日午後4時より地区(支部)委員会による大衆集会が開催され、同委員会が自らの全権を解除して、新委員会の選挙が行われることになった⁽²⁶⁸⁾。上述のように同日の第7回会議議事録までしか残されていないところからみて、実際に役員の総入れ替えがあった模様だが、なぜわずかにひと月半しか経たない組織が役員改選を余儀なくされたのか、そのあたりの事情は詳らかでない。

第2回在米ロシア人コロニー全市民大会は、1918年12月13日午後2時にニューヨーク市ベートヴェン・ホールで開会した。本大会の内容については、上記の保存史料にも言及したものは一切なく、またオクンツォフの著作でも言及すらなく、なかなか手がかりを得ることができなかったが、『ルースコエ・スローヴォ』に紹介連載記事を見つけることができた。ただし、入手したコピーに不鮮明の箇所が多く、その上、網羅的な紹介になっていないように見受けられ、同紙による以下の紹介は、暫定的なものにとどまる。

同紙1918年12月13日号では、以下の予定プログラムが掲げられて開会予告がなされた。

- 1) ①ロシアとの、②合州国との、③連合国との、④講和会議との我々の関係における当面の政治的局面
- 2) 連盟執行中央委員会活動についての報告
- 3) ニューヨークでの人民大学およびロシア人民の家に関連して、ロシア人コロニーにおける文化-啓蒙的活動
- 4) ロシア人コロニーの医療援助およびニューヨークにおけるロシア人病院の設置
- 5) ロシア人移民局の設置に関して出国移民と入国移民の問題
- 6) 組織されていないコロニーの組織化
- 7) 相互援助
- 8) ロシア人コロニーへの法律的援助および常設の法律事務所の設置
- 9) 領事機関の民主化
- 10) 大会の執行機関の財務
- 11) ロシア人志願部隊について

12) 窮乏しているロシア住民の経済的援助

13) 「[1 語不鮮明]」および前線から帰還しているロシア人兵士への援助⁽²⁶⁹⁾

同日午後 3 時にロシア人諸組織連盟執行中央委員会議長セメノフスキーが開会を宣した。約 200 名の代議員が登録されたとのことだが、その数は第 1 回大会の 2 倍を越えた。開会早々、パリ講和会議のため渡仏したウィルソン大統領への挨拶電報を送ることとなり、満場一致でその電文が採択された。そこには、上述と同様、親連合国、反ボリシェヴィキ政権という政治的立場が鮮明にされていた⁽²⁷⁰⁾。

二日目（12 月 14 日）の記事の冒頭、「燃え上がる熱情が有益な仕事の妨げとなる時、これは最も悲しむべき、最も成果なき大会の会議であった」との表現があり⁽²⁷¹⁾、大会終了後 12 月 18 日の『ルースコエ・スローヴォ』第 1 面の見出しは、こうであった。「第 2 回全市民大会、非成立とみなされる／社会主義的、急進主義的、進歩主義的組織からの 10 名の代議員、大会を去った、その作業能力の無さとそれを支配している反動的な傾向への抗議のしるしとして」。彼らの発言が本文で以下のように抜粋されている。「目下の大会は実りある仕事をする状態にはない」、「大会は仕事をする事ができない」、「大会は成立しておらず、新たな大会を招集することが必要だ」⁽²⁷²⁾。

最初の発言は、事ある毎にボリショヴィキと対立してきたロシア社会民主主義者ニューヨーク・グループ（メンシェヴィキ）に属し、大会への招待代議員でもあった⁽²⁷³⁾ インゲルマン博士によるものであった。

肝心のその中身については、上述の理由できちんと紹介できないけれども、その後の運動が確認しがたいところからみても、ロシア人コロニーを巻き込んだ「全市民大会」運動はもはや展開しえなくなったのであろう。第 2 回大会前にすでに上記のように政治的立場を鮮明にしたことによって運動自体が変質してしまっていたと言ってよい。

8 在米ロシア人移民労働者の帰国規模 ― 結びにかえて ―

最後に、在米ロシア人コロニー統一の眼目の一つであった在米ロシア人移民労働者の帰国の規模について考察しておく。

ロシア2月革命勃発後1921年にかけて、どれほどの在米ロシア人移民労働者が帰国したかについて、以下のデータがある。その移民局長年次報告書にもとづいて再計算されたロシア人のアメリカ合州国への／からの入国／出国移民数のうち、1917～1921会計年度分を抜粋する⁽²⁷⁴⁾。

ロシア人のアメリカ合州国への／からの入国／出国移民数（1917～1921会計年度）

	1917	1918	1919	1920	1921	1917～1921
入国移民	3,711	1,513	1,532	2,378	2,887	12,021
出国移民	6,393	4,926	1,717	1,151	11,085	25,272
増減	-2,682	-3,413	-185	1,227	-8,198	-13,251

[*The Immigration Problem in the United States* (National Industrial Conference Board, Research Report No. 58) (New York, 1923), pp. 123-130.]

当該年度のロシア人出国移民の累計数は25,272人である（ただし、当時の会計年度は7月1日から始まり、ロシア2月革命直後の数字は含まれていない）。この「ロシア人」にはユダヤ人を含むなどの注記がなく、別項にヘブライ〔ユダヤ〕人があり、期間中のその入国移民数は157,397人であるのに対して出国移民数は2,230人と少なすぎる。本来ユダヤ人はボグロムから逃れて来たとかでアメリカからの再出国者数の割合は入国者数に比べて1908～1922年度全体で5.7%と極端に少なく、「ロシア人」の52.8%と対照をなす。たとえ「ロシア人」の中にロシア語を話すユダヤ人が含まれている可能性があるとしても、それは社会運動家を除けば少なかったのではないだろうか。

ここで受入側からタルレの調査によって関係データをみていくことにする。労働人民委員部の情報によれば、1920年9月から1921年9月までのアメリカからの移民は、10,130人である⁽²⁷⁵⁾。が、その数は限定されたものであろう。というのは、駐米非公式ソヴェト・ロシア代表マルテンスの把握では、1920年末〔厳密に訳すと、最後の複数月〕から1921年初め〔最初の複数月〕にラトヴィヤのリャパーヤ（リバウ）を経由して入露したアメリカからの移民は、16,000人以上であり、別史料でも、1921年2-3月も同様に16,000人であった⁽²⁷⁶⁾。さらにマルテンスは、「労働者のロシアへの流入が、いかなる割合にまで達しているかを見積もることは困難だが、しかし1年間にアメリカからロシアへ引き寄せられた100,000人という数は、アメリカの状況に通じる人々にとっては誇張されているとは思えない」と表明した⁽²⁷⁷⁾。

1921 年 9 月までにモスクワとペトログラートで登録されたアメリカからの移民労働者は、10,130 人であった。そのうち、企業に派遣された熟練工が 26 %、企業・国営農場に派遣された農民・労務者が 17 %、そして故郷に戻った農民・労務者が 51 %であった⁽²⁷⁸⁾。

データが断片的で、民族別データでないけれども、1920 年から 1921 年にかけて 10 万という数字は、アメリカからの移民労働者として必ずしも誇張された数字ではないのではないか。ロシア 2 月革命報道直後の 1917 年 5 月だけで約 2,000 人の移民がロシアへ向けて出発したというし⁽²⁷⁹⁾、また 1920 年 11 月までにアメリカにおいて出発のために申請・登録した者が 6 万人いた、との同じくタルレの調査からみても、そうであろう⁽²⁸⁰⁾。

1920 年の人口調査にもとづくカーペンターの研究によれば、その年外国生まれの白人のうちロシア人は 1,400,489 人で、それを出生国で見れば、ロシアはドイツ、イタリアに次いで第 3 位である。そのうちロシア語を母語とするのが 361,843 人 (25.8 %) である。また外国生まれの白人のうちロシア語を母語とするのが 392,049 人ともある⁽²⁸¹⁾。いずれの人数にもかなりのユダヤ人が含まれると注記がある、といっても上記 1,400,489 人のうち 56.5 %にあたる 791,181 人がイディッシュ語・ヘブライ語を母語とするとの別区分もあるので、30 万台がロシア人の最大数と推定される。

ロシア人の帰化を取り上げれば、既述 (第 2 章) のように、1920 年の人口調査でそれは 40.2 %まで急上昇した。あくまでも目安としての試算だが、その年のロシア人が実質 30 万人として約 12 万人が帰化したことになる。もしも上記約 2.5 万 (1920 年までだと、約 1.4 万) のロシア人が帰国しなかったならば、その帰化率は 12 万人を 32.5 万人 (1920 年までだと、31.4 万) で割るので、36.9 % (38.2 %) となり、3.3 ポイント (2.0 ポイント) 減少するだろう。それでもロシア人の帰化率が 1920 年の「新」移民の平均帰化率 26.6 %⁽²⁸²⁾ よりなお 10.3 ポイント (11.6 ポイント) 高いのだが、その中には、合州国政府による弾圧下で「レッド」の嫌疑を晴らす一策として (第 2 章参照)、あるいは政府、報道機関等による反ボリシェヴィキ・キャンペーンが功を奏した場合もあれば、そうでない場合もあるだろうが、誕生したボリシェヴィキ政権への反撥としての帰化もあったろう。いずれにせよ、残された、または留まったロシア人は、分断された社会体制下で、アメリカ国籍の中で自らのアイデンティティを確立していく方向へ困難な道を歩んでいくことになる。

注

- (1) 「トランスマイグランツ」概念とトランスナショナル・アイデンティティ・アプローチの提唱は、ファン・デア・リンデンの『トランスナショナルな労働史』(M. van der Linden, *Transnational Labour History: Explorations* [Aldershot/Burlington, 2003]) に大いによっている。彼はアメリカ労働史のトランスナショナルな再解釈を提起した。それによれば、アメリカ労働史の考えられるすべての側面は、トランスナショナルな再解釈の余地があり、人・資本・情報および思想の国境を越えた移動が重く考慮されたとき初めて合州国の労働階級および運動の展開は理解される。その際、労働組合など制度的側面ばかりではなく、移民労働者に見られる文化的特質にも分析対象を拡大する必要がある。そのためには、1990年代に社会学・人類学で提起された「トランスマイグランツ」、つまり「その日常生活が国境を越えた複合的かつ恒常的な相互関係に依存し、その公的アイデンティティが一国以上の国民国家との関係において形づくられるところの移民」という概念が有効であり、それは社会学で提起されてきた複合アイデンティティを前提とした概念である。かくして、トランスナショナル・アイデンティティ・アプローチによるアメリカ移民労働史の再解釈は、移民を、国境を越えて成立する多様な関係性のネットワークの中で自らの生活や理念の「集合性」を時には創造しうる主体的・能動的存在＝「トランスマイグランツ」として再定義することを可能にし、その再解釈は今後急速に発展しうるものと考えられる。
- (2) 山内昭人『リュトヘルスとインタナショナル史研究 ― 片山潜・ポリシェヴィキ・アメリカレフトウィング ― 』（ミネルヴァ書房, 1996）。
- (3) Cf. A. Shmelev, “Russians in the Repositories,” id., *Tracking a Diaspora: Émigrés from Russia and Eastern Europe in the Repositories* (Binghamton, 2006), 1-8.
- (4) J. Davis, *The Russian Immigrant* (New York, 1922).
- (5) P.R. Magosci, *The Shaping of a National Identity Subcarpathian Rus', 1848-1948* (Cambridge/London, 1978); P.R. Magosci/S. Stotsky, General Editor, *The Russian Americans* (New York/Philadelphia, 1996).
- (6) C.M. Panunzio, *The Deportation Cases of 1919-1920. A Study* (New York, 1921).
- (7) Records of the Federal Bureau of Investigation [1908-1922], RG 65 [hereafter cited as Records of FBI], OG341761, National Archives and Records Administration, Washington, D.C.; Correspondence of the Military Intelligence Division of the War Department General Staff, 1917-1941, RG 165 [hereafter cited as Correspondence of MID], 10110-1683-24, *ibid.*
- (8) Е.И. Омельченко, *К вопросу об организации российской колонии* (New York, 1917); И.К. Окунцов, *Русская Эмиграция в Северной и Южной Америке* (Buenos Aires, 1967).

- (9) New York (State); Legislature; Joint Legislative Committee to Investigate Seditious Activities [hereafter cited as Lusk Committee records], New York State Archives and Records Administration, Albany, New York; Federation of Russian Organizations in America 1918-1924, Box 1 [hereafter cited as FROA], Manuscripts and Archives Division, New York Public Library, New York; Boris Alexandrovich Bakhmeteff Papers [hereafter cited as Bakhmeteff Papers], Bakhmeteff Archive, Rare Book & Manuscript Library, Columbia University, New York; *Revolutionary Radicalism. Report of the Joint Legislative Committee Investigating Seditious Activities, Filed April 24, 1920, in the Senate of the State of New York*, Part 1, Vols. 1-2 (Albany, 1920).
- (10) Э.Л. Нитобург, *Русские в США. История и судьбы 1870-1970. Этноисторический очерк* (Москва, 2005); А.Б. Ручкин, *Русская диаспора в Соединенных Штатах Америки в первой половине XX века. Работа выполнена на общеуниверситетской кафедре истории Московского гуманитарного университета* (Москва, 2007).
- (11) Г.Я. Тарле, *Друзья страны Советов. Участие зарубежных трудящихся в восстановлении народного хозяйства СССР в 1920-1925 гг.* (Москва, 1968), 67.
- (12) Davis, viii.
- (13) Ibid., 8; cf. J. Powell, *Encyclopedia of North American Immigration* (New York, 2005), 258.
- (14) M.S. Cook, "Former Soviet Union," J. Climent (ed.), *Encyclopedia of American Immigration*, Vol. 4 (Armonk, NY, 2001), 1247.
- (15) S. Benson, *U. S. Immigration and Migration: Almanac*, Vol. 2 (Detroit et al., 2004), 510.
- (16) Magosci, *The Russian Americans*, 46; cf. Benson, 510.
- (17) J. Davis, *The Russians and Ruthenians in America. Bolsheviks or Brothers?* (New York, 1922), 22; cf. Davis, *The Russian Immigrant*, 12.
- (18) Davis, *The Russian Immigrant*, 15.
- (19) 1919 年 1 月 16 日にアメリカニズムを樹立する目的でニューヨーク市で開催された集会で創設された、産業界、労働界および様々な人種グループからの代表から成る組織。Cf. *The New York Times* (New York), Vol.68, No.22273, 17.I.1919, 8; No. 22423, 16.VI.1919, 11.
- (20) Davis, *The Russian Immigrant*, 13.
- (21) Magosci, *The Russian Americans*, 46-47.
- (22) Benson, 504, 510-511.
- (23) Magosci, *The Russian Americans*, 14, 69; cf. Benson, 511-512.
- (24) Magosci, *The Russian Americans*, 46.
- (25) Ibid., 41.
- (26) Powell, 257.
- (27) Magosci, *The Russian Americans*, 66.
- (28) Ibid., 68.
- (29) Davis, *The Russian Immigrant*, 77-78. 1899 ~ 1910 年では、83,574 名のロシア移民の 85 %が男性で、女性は 15 %だった。 *Abstracts of Reports of the Immigration*

- Commission with Conclusions and Recommendations and Views of the Minority*
[Presented by W.P. Dillingham to the Senate, 61st Congress, 3d Session, December 5, 1910] (Washington, 1911), Vol.1 (Washington, 1911), 97.
- (30) *Abstracts of Reports of the Immigration Commission*, 331; Davis, *The Russian Immigrant*, 16-17; Davis, *The Russians and Ruthenians*, 27-28.
 - (31) *Abstracts of Reports of the Immigration Commission*, 375, 379-380; Davis, *The Russian Immigrant*, 43; Davis, *The Russians and Ruthenians*, 32.
 - (32) Davis, *The Russian Immigrant*, 54.
 - (33) *Ibid.*, 24-25.
 - (34) *Ibid.*, 150-151.
 - (35) *Ibid.*, 164.
 - (36) *Ibid.*, 172.
 - (37) *Ibid.*, 173-174.
 - (38) L. Sokoloff, "The Russians in Los Angeles," *Studies in Sociology* (Los Angeles), Vol.3, No.3 (Sociological Monograph No.11), March 1918, 12.
 - (39) *Ibid.*, 9.
 - (40) *Ibid.*, 16.
 - (41) *Abstracts of Reports of the Immigration Commission*, 484.
 - (42) Davis, *The Russians and Ruthenians*, 71-72.
 - (43) R.L. Garis, *Immigration Restriction. A Study of the Opposition to and Regulation of Immigration into the United States* (New York, 1927), 225-227.
 - (44) Davis, *The Russian Immigrant*, 178.
 - (45) *Ibid.*, 180.
 - (46) *Ibid.*, 129.
 - (47) *Ibid.*, 186.
 - (48) *Ibid.*, 196.
 - (49) D. Hoerder (ed.), *The Immigrant Labor Press in North America, 1840s-1970s. An Annotated Bibliography*. Vol.2: Migrants from Eastern and Southeastern Europe (New York/Westport, Conn./London, 1987), 111, 114.
 - (50) R.E. Park, *The Immigrant Press and Its Control* (New York/London, 1922), 79.
 - (51) *Ibid.*, 318a. オクンツォフによれば、ロシア語の定期刊行物は（前半部は省略して）1907年に8、1917年に24、1927年に16、そして1935年に22となっている。1918年は記されていないが、ロシア革命期がピークであることには変わらない。
Окунцов, 311.
 - (52) Е.И. Омельченко/О.А. Корф (chief eds.), *Русско-американский справочник/Russian-American Register* (New York, 1920), 233.
 - (53) Davis, *The Russian Immigrant*, 123-125. 『ノーヴィ・ミール』の停刊は1920年初めと言われているが（Омельченко/Корф, 140）、正確な月日は不明で、1919年7月31日号まで私は実見し、1920年4月から月刊で復刊されている。
 - (54) Davis, *The Russian Immigrant*, 126.

- (55) Ibid.; Омельченко/Корф, 140; *Revolutionary Radicalism*, Part 1, Vol.2, 1225. ヘルダー編の書誌目録では『ルースキー・ゴーロス』は 1919 年時で 27,826 部とある。Hoerder, 128.
- (56) Нитобург, 251, 256-257.
- (57) Ibid., 251-252, 256; Окунцов, 312-315.
- (58) Омельченко/Корф, 140; K. Maichel (comp.), *Soviet and Russian Newspapers at the Hoover Institution: A Catalog* (Stanford, 1966), 1-2; Hoerder, 117; Окунцов, 420. 創刊日の 2 月 3 日はヘルダーによったが、オクンツォフはその 2 週間前創刊と記している。後述するように (第 6 章第 3 節)、ロシア人職業人同盟は 1920 年 2 月 1 日のニューヨーク市カジノ・ホールでの会議で組織され、同紙は同組織の管理へ引き継がれたという。組織化後の創刊が通例であろうが、「引き継がれた」との表現を額面通りに受け取れば、その 2 週間前創刊の可能性は残る。なお、アヴリッチ (P. Avrich) がインタビューした古参ロシア人アナキスト、リン (V. Lynn) の談によれば、同紙は最初、ボリシェヴィキのドゥマシュキン (Dumashkin) によって編集され、ゴルディエンコ (K.F. Gordienko) が引き継いだ時、良きアナキスト紙になったという。P. Avrich, *Anarchist Voices. An Oral History of Anarchism in America* (Edinburgh/Oakland/West Virginia, 2005), 368. 同紙がロシア人労働者同盟と関係することは、第 5 章参照。
- (59) Cf. “To Our Readers,” *Svobodnaya Rossiya*, 8.XI.1923; “Support Your Paper,” *ibid.*, 10.XI.1923; Hoerder, 128, 131; М. Вильчур, *Русские в Америке* (New York, n.d.), 116; Омельченко/Корф, 141. 最初の 2 点は、第 6 章第 1 節で説明する Chicago Foreign Language Press Survey の中の英訳版に拠っている。
- (60) Davis, *The Russian Immigrant*, 127.
- (61) Ibid., 128.
- (62) Ibid., 129.
- (63) Ibid.
- (64) Ibid., 133.
- (65) Ibid., 132.
- (66) Ibid., 132-133.
- (67) Ibid., 143.
- (68) Ibid., 134-140.
- (69) Ibid., 141.
- (70) Ibid., 142.
- (71) Ibid., 130.
- (72) Panunzio, 99-100; cf. *Immigrant Laws. Act of February 5, 1917; and Acts approved October 16, 1918.....* Seventh Edition, August, 1922 (Washington, 1922), 3-8, 20-21, 37-38.
- (73) Panunzio, 16.
- (74) Records of FBI, OG341761; Correspondence of MID, 10110-1683-24.
- (75) Cf. R. Schmidt, *Red Scare. FBI and the Origins of Anticommunism in the United States*,

- 1919-1943 (Copenhagen, 2000), 301-303; L.F. Post, *The Deportations Delirium of Nineteen-twenty. A Personal Narrative of an Historic Official Experience* (Chicago, 1923).
- (76) Schmidt, 20, 299.
 - (77) Panunzio, 16.
 - (78) Ibid., 17, 101.
 - (79) Ibid., 17-18, 101.
 - (80) Ibid., 18.
 - (81) Ibid., 18, 101-102.
 - (82) Ibid., 102.
 - (83) Ibid., 19-20, 93.
 - (84) *The New York Call* (New York), Vol.12, No.313, 8.XI.1919, 5.
 - (85) *Новый Мун* [hereafter cited as *НМ*] (New York), No.1122, 16.X.1917, 3; No.1207, 14.I. 1918, 4; No.1930, 4.X.1918, 1; Омельченко/Корф, 232; 山内, 192, 233, 236-237.
 - (86) Records of FBI, OG360364.
 - (87) Panunzio, 24-25. 彼らは寄り合い、英語やタイピング・速記などを習っていた。Lusk Committee records], Roll # L0027-2. また、別の会議室には 200 名もの男女が居合わせた、それはロシア人労働者諸同盟連盟の実務会議出席のためであった。*The New York Call*, Vol.12, No.313, 8.XI.1919, 1. 人民の家襲撃の様子は、以下で活写されている。K.D. Ackerman, *Young J. Edgar. Hoover, the Red Scare, and the Assault on Civil Liberties* (New York, 2007), 113-118.
 - (88) Panunzio, 27.
 - (89) Ibid., 48, 95.
 - (90) Ibid., 34; *The New York Times*, Vol.69, No.22624, 3.I.1920, 1-2.
 - (91) Panunzio, 41-42.
 - (92) Ibid., 55-56.
 - (93) Ibid., 60.
 - (94) Ibid., 66, 68.
 - (95) Ibid., 72.
 - (96) Ibid., 93-94.
 - (97) Ibid., 97.
 - (98) Ibid., 75.
 - (99) Davis, *The Russian Immigrant*, 114-115; Омельченко, 6.
 - (100) Нитобург, 80.
 - (101) Ch.H. McCormick, *Seeing Reds. Federal Surveillance of Radicals in the Pittsburgh Mill District, 1917-1921* (Pittsburgh, 1997), 145.
 - (102) T.J. Pfannestiel, *Rethinking the Red Scare. The Lusk Committee and New York's Crusade against Radicalism, 1919-1923* (New York/London, 2003), 20-23.
 - (103) *Revolutionary Radicalism*, Part 1, Vol.1, 861.
 - (104) E.D. Speer's Report, "The Russian Workingmen's Association, sometimes called the

- Union of Russian Workers (What It Is and How It Operates),” 8.IV.1919, Records of FBI, OG325570/BS202600-184; Reprinted in: <http://www.marxisthistory.org> (edited by T. Davenport). シュミットによれば、その報告は URW の歴史と活動についての包括的な報告であり、捜査局の URW に関する知識の基礎となった。Schmidt, 250.
- (105) ただし、スピア自身のあとの方の記述では、1907 年に同盟は 1 ダースほどの急進主義者でスタートしたともある。
- (106) Records of FBI, BS202600-184.
- (107) *Голос Труда. Безпартийный орган русских рабочих в Америке* (New York), No.1, 1.III.1911, 1, 4. 本誌のコピーは田中ひかる氏より提供を受けた。
- (108) Schmidt, 249.
- (109) Нитобург, 80, 83.
- (110) メンバーカードは青色カードと赤色カードの 2 種類があり、前者には名前と支部名が記され、会員領収印欄があった。後者がここでいう会員帳である。*Revolutionary Radicalism*, Part 1, Vol.1, 861-862.
- (111) Davis, *The Russian Immigrant*, 115-116. ただし、スピアの引用では最後の第 6 番目のパラグラフがなく、ロシア語原物で確かめる必要がある。
- (112) 同紙はスピアがあとの方で記しているところでは、1918 年 1 月にニューヨークで創刊され、同年 3 月までしか続かなかった。なお、ラスク委員会報告書の引用では、この機関紙名だけが欠けている。
- (113) Д.И. Новомирский, *Что такое анархизм* (n.d., 1919), 126 стр.; id., *Манифест анархистов-коммунистов* (n.p., n.d. [New York, 1919]), 32 стр.
- (114) Davis, *The Russian Immigrant*, 116-117.
- (115) Ibid., 118.
- (116) P.F. Brissenden, *The I. W. W. A Study of American Syndicalism*. Second Edition (New York, 1920), 351-353; *Revolutionary Radicalism*, Part 1, Vol.1, 885-886.
- (117) テキストでは、“A. Sanabel” と誤記されている。『ナバート』の編集局長であり、「ビュフォード」号で追放されることになる。Cf. Avrich, 367, 519.
- (118) Records of FBI, BS202600-184.
- (119) *Revolutionary Radicalism*, Part 1, Vol.1, 862, 865; Vol.2, 1185, 1448, 2005.
- (120) ヘルダーは 1919 年 11 月 6 日の 37 号をもって停刊したと記しているが、オクンツォフは翌週 11 月 13 日の 38 号に言及している。Hoerder, 121; Окунцов, 334.
- (121) Cf. Schmidt, 123.
- (122) Records of FBI, BS202600-184.
- (123) Records of FBI, OG360364.
- (124) M. Villchur, “Bolshevism and Russian Here,” *The New York Times*, Vol.68, No.22422, 15.VI.1919, Section 3, 2.
- (125) 外務省外交史料館, 4.3.2.1-4-4 (2).
- (126) Омельченко, 6-7.
- (127) Records of FBI, BS202600-184.
- (128) Records of FBI, BS202600-184.

- (129) Correspondence of MID, 10110-1683-14; cf. 10110-1683-15.
- (130) Records of FBI, BS202600-184.
- (131) Окунцов, 261.
- (132) Records of FBI, OG208369.
- (133) Records of FBI, BS202600-184-10.
- (134) Records of FBI, BS202600-2433.
- (135) Records of FBI, BS202600-2126-44.
- (136) Records of FBI, BS202600-184.
- (137) “Union of Russian Workers/Anarchist Activities” by J.S. Apelman, Detroit, 17.X.1921, Records of FBI, BS202600-345-184.
- (138) “General Summary of Radical Activities in Chicago and vicinity for Week Ending December 25, 1920,” Records of FBI, BS202600-14-26. ただし史料の 2 枚目（ないしそれ以降）は欠落している。
- (139) “Volna” Resume by M.J. Davis, New York City, 9.VI.1921, Records of FBI, BS 202600-345-150.
- (140) Records of FBI, BS202600-184-12; cf. Correspondence of MID, 10110-1683-55.
- (141) General Intelligence Bulletin, No.32, 9.X.1920, Correspondence of MID, 10110-1683-48; No.34, 23.X.1920, Correspondence of MID, 10110-1683-50.
- (142) *НМ*, No.937, 16.III.1917, 1; А.М. Черненко, *Российская революционная эмиграция в Америке (конец XIX в. — 1917 г.)* (Киев, 1989), 180.
- (143) Cf. 山内, 154-155, 160.
- (144) Вильчур, 98.
- (145) *Голос Труда. Орган Федерации союзов русских рабочих Соед. Штатов и Канады*, No.132, 6.IV.1917, 1; Черненко, 181; Нитобург, 86.
- (146) The Director, Internment Operations to The Chief of the General Staff, Dept. of Militia & Defence, Ottawa, 7.IV.1917, Records of the Department of National Defence, RG 24, Vol.2543, File H.Q.C.2051, Vol.1, Library and Archives Canada, Ottawa; cf. RG 24, Vol.4545, MD6, 73-T-9, *ibid*.
- (147) *Голос Труда*, No.132, 6.IV.1917, 1; Черненко, 180. ニューヨーク市警察署の爆弾対策班長であったタニー (Th.J. Tunney) の証言によれば、34 名の第一陣がニューヨークのペンシルヴェニア駅からシカゴへ向かって発ったのは、4 月 3 日であった。Th. Tunney, *Throttled! The Detection of the German and Anarchist Bomb Plotters* (Boston, 1919), 268.
- (148) *Голос Труда*, No.130, 23.III.1917, 1, cf. 3.
- (149) *Голос Труда*, No.133, 13.IV.1917, 1; No.135, 27.IV.1917, 1; *НМ*, No.992, 17.V.1917, 3.
- (150) *Голос Труда*, No.137, 11.V.1917, 1, 4.
- (151) Tunney, 269.
- (152) P. Avrich, *The Russian Anarchists* (Princeton, 1967), 138, 139; В.Д. Ермаков/П.И. Талеров, *Анархизм в истории России. От истоков к современности. Библиографический словарь-справочник* (Санкт-Петербург, 2007), 698.

- (153) Address by Boris A. Bakhmeteff to the President of the United States When Presenting Credentials July 5, 1917, Bakhmeteff Papers, Box 38; *Current History. A Monthly Magazine of The New York Times*, Vol.6, Part 2, No.2, VIII.1917, 266, 269-270, cf. 207-208; Окунцов, 98-99.
- (154) Омельченко/Корф, 95-135.
- (155) Ibid., 95.
- (156) *HM*, No.1207, 14.I.1918, 4.
- (157) *HM*, No.998, 24.V.1917, 3; No.1005, 1.VI.1917, 4; No.1010, 7.VI.1917, 1; cf. No.1207, 14.I.1918, 4.
- (158) *Россия и США: дипломатические отношения 1900-1917* (Москва, 1999), 486.
- (159) Окунцов, 394.
- (160) Ibid., 494-495.
- (161) 同書は社友団『ノーヴィ・ミール』印刷所で印刷され、その序文の日付は 1917 年 10 月 22 日となっている。なお、「コロニー」は当事者たちが使用した用語だが、その統一の試みは主として地域ごとの諸社会団体の構成員およびそれらから選出された代議員によって担われていく。
- (162) Омельченко, 13-14.
- (163) Ibid., 14-21.
- (164) Ibid., 21-23. ロシア人社会団体中央委員会のは、以下でも掲載されたが、2 箇所ほど順番が入れ替わっている。*Русское Слово* (New York), Vol.7, No.1700, 20.IX.1917, 4.
- (165) Ручкин, Глава 3, 20-22/87. 本博士論文はインターネットから入手したもので、頁数が印刷によって変わるため、第 3 章が 87 頁あるうちの 20-22 頁目という表記にする。以下同様。
- (166) *Совещание Российских Консулов и представителей русской колонии 29-30 сентября и 1 октября 1917 г. в Нью-Йорке*. Краткий отчет, составленный редакционной комиссией, в которую входили участники совещания О. Дымов, Е. Омельченко и П. Бланк (New York, 1917).
- (167) Ibid., 1-5.
- (168) Ibid., 6.
- (169) Ibid., 7-9.
- (170) Ibid., 10-11.
- (171) Ibid., 12-13.
- (172) Ibid., 14-15.
- (173) *HM*, No.1130, 25.X.1917, 4.
- (174) *Русское Слово*, Vol.7, No.1735, 25.X.1917, 5.
- (175) Н.И. Гурвич, “К созыву съезда российской колонии в Америке,” *HM*, No.1130, 25.X.1917, 4; No.1131, 26.X.1917, 3.
- (176) *HM*, No.1161, 24.XI.1917, 3; No.1163, 27.XI.1917, 3.
- (177) Окунцов, 404.
- (178) М. Вильчур, “Объединение руссой колонии,” *Русское Слово*, Vol.7, No.1678, 29.VIII.

- 1917, 5. 強調は原著者による。
- (179) “К предстоящему съезду русских в Америке,” *Русское Слово*, Vol.7, No.1700, 20.IX.1917, 4.
 - (180) *HM*, No.1177, 10.XII.1917, 3.
 - (181) *HM*, No.1198, 3.I.1918, 3.
 - (182) *HM*, No.1214, 22.I.1918, 3.
 - (183) *HM*, No.1226, 5.II.1918, 3.
 - (184) “Конференция Организаций по созыву Единого съезда,” *Русское Слово*, Vol.8, No.1827, 25.I.1918, 5.
 - (185) オクンツォフによれば、1919 年〔日付は誤りであろう〕セメノフスキーとバフメチェフによって在米「ロシア市民統一」同盟が「革命支援とロシアの民主主義擁護」のために創設されたが、それは自らの真価をなんら発揮しなかった、とある。Окунцов, 304.
 - (186) “Конференция орган. по объединению съездов,” *Русское Слово*, Vol.8, No.1830, 28.I.1918, 1; Correspondence of MID, 10058-69-1 (『ルースコエ・スローヴォ』1918 年 1 月 31 日号よりの英訳).
 - (187) Report on 10.IX.1918, Correspondence of MID, 10058-69.
 - (188) Cf. *HM*, No.1227, 6.II.1918, 4.
 - (189) Cf. D.S. Foglesong, *America's Secret War against Bolshevism: U.S. Intervention in the Russian Civil War, 1917-1920* (Chapel Hill/London, 1995), Chapter 3; О.В. Будницкий (ред.), «Совершенно лично и доверительно!» Б.А. Бахметев — В.А. Маклаков переписка 1919 — 1951, Т.1 (Москва, 2001), 51-83.
 - (190) Diary, October 9, 1919, Bakhmeteff Papers, Box 36.
 - (191) Diary, November 24, 1919, Bakhmeteff Papers, Box 36.
 - (192) Материалы по деятельности Российской Чрезвычайной Миссии в Северо-Американских Соединенных Штатах, Bakhmeteff Papers, Box 37.
 - (193) *HM*, No.1347, 27.VI.1918, 2.
 - (194) “The Telegram of the Socialist Conference for Aid to the Russian Revolution,” *Russkaya Pochta*, 24.VIII.1917, from: The Chicago Foreign Language Press Survey through the Newberry Library's website; “A Resolution of Protest,” *ibid.*, 7.IX.1917.
 - (195) “Our Organizations and Conscription,” *ibid.*, 21.IX.1917.
 - (196) *New York Tribune*, 20.VII.1918, 9.
 - (197) *Ibid.*, 25.IX.1918, 4.
 - (198) Lusk Committee records, L0032, Folder 14; *Papers Relating to the Foreign Relations of the United States. 1919. Russia* (Washington, 1937), 133-141.
 - (199) Cf. Letter of L.A. Martens to Boris Bakhmetieff, n.d., Lusk Committee records, L0032, Folder 14; Correspondence of MID, 10110-1194-331.
 - (200) Manuscript for answering the question from *New York Tribune* [?], dated 21.IV.1919, Lusk Committee records, L0032, Folder 14.
 - (201) Нитобург, 87.

- (202) Ibid., 88; cf. Окунцов, 404-406; Ручкин, Глава 3, 22-24/87; Y.J. Chyz/J.S. Rousek, "The Russians in the United States," *The Slavonic Review*, Vol.17, No.51, 1939, 652.
- (203) Омельченко, 25-26.
- (204) Ibid., 29-31.
- (205) Ibid., 32.
- (206) *HM*, No.1223, 1.II.1918, 3; cf. 山内, 192-193.
- (207) Correspondence of MID, 10058-91-f/w.
- (208) *HM*, No.1224, 2.II.1918, 1.
- (209) *HM*, No.1225, 4.II.1918, 3.
- (210) Correspondence of MID, 10058-114-1.
- (211) Correspondence of MID, 10058-86-1; 山内, 184-185.
- (212) Correspondence of MID, 10058-114-1; 山内, 184-187.
- (213) *HM*, No.1227, 6.II.1918, 4.
- (214) *HM*, No.1226, 5.II.1918, 1.
- (215) *HM*, No.1226, 5.II.1918, 3.
- (216) *HM*, No.1232, 12.II.1918, 3.
- (217) Brief of Department of Justice upon the status of Gdaly Gregory Weinstein under the Act of Congress, approved October 16, 1918, Records of FBI, BS202600-70.
- (218) "Bolsheviki Decide to Run Labor Here," *The New York Times*, Vol.67, No.21927, 5.II.1918, 5.
- (219) "Ко всем русским революционным и профессиональным рабочим организациям города Нью-Йорка," *HM*, No.1278, 6.IV.1918, 4.
- (220) *HM*, No.1350, 1.VII.1918, 3.
- (221) Н. Гурвич, "К расколу в Российской рабочей колоний в Нью-Йорке. (Образование двух Советов). Статья первая," *HM*, No.1908 [同紙は 1918 年 8 月 29 日の 1399 号の「3」を「8」と見誤ったかで、次号は一気に 1900 号へ飛んで訂正されないままとなる], 9.IX.1918, 3.
- (222) Correspondence of MID, 10058-248.
- (223) Correspondence of MID, 10058-232-2.
- (224) Correspondence of MID, 10058-96.
- (225) Correspondence of MID, 10058-238; cf. 10110-1683-8.
- (226) Correspondence of MID, 10058-260-14; *Revolutionary Radicalism*, Part 1, Vol.1, 865; Vol.2, 1355, 2004. 唯一実見できた 1919 年 7 月 31 日号 (Vol.2, No.57; このとき週刊誌となっていた) では、ユムシャノフの他に書記としてコンスタンティノヴィチ (W. Konstantinowich) の名がある。
- (227) Records of FBI, BS202600-184, Окунцов, 334, 419-420; cf. Омельченко/Корф, 140. なおヘルダー編の書誌目録では、終刊を 1919 年 7 月 31 日と誤記されている。Hoerder, 125.
- (228) *HM*, No.1938, 10.X.1918, 3.
- (229) Lusk Committee records, Roll # L0027-1.

- (230) Correspondence of MID, 10110-853-41.
- (231) Correspondence of MID, 10110-853-42.
- (232) “К Российской Рабочий Колонии в Америке. (О созыве нью-йоркским Советом «общеколонииального» съезда),” *HM*, No.2000, 14.XII.1918, 3.
- (233) *HM*, No.2009, 25.XII.1918, 4.
- (234) Correspondence of MID, 10058-241. 密偵 N-100 とは、1920 年夏のコミンテルン第 2 回大会出席のためアメリカ共産党国際書記となっていたフレイナが訪ソすることになり、また途中アムステルダム・サブビューロー招集の同年 2 月開催の国際会議に出席するため、彼の密航を手引きすることになるノソヴィツキー (J.H. Nosovitsky) である。Cf. Th. Draper, *The Roots of American Communism* (New York, 1957), 227-232.
- (235) Correspondence of MID, 10058-260-14.
- (236) 山内, 233-234.
- (237) *HM*, No.2017, 8.I.1919, 4; Speer’s Report, Records of FBI, OG325570/BS202600-184.
- (238) *HM*, No.2019, 10.I.1919, 3.
- (239) *HM*, No.2021, 13.I.1919, 2.
- (240) Л. Зубнов/Н. Козик, “Почем мы покинули съезд? (Заявление делегатов от левых с.-р.-ов),” *HM*, No.2020, 11.I.1919, 3.
- (241) *HM*, No.2018, 9.I.1919, 3.
- (242) Speer’s Report, Records of FBI, OG325570/BS202600-184.
- (243) Correspondence of MID, 10058-248-9; cf. 10058-248-10 & 13.
- (244) *Revolutionary Radicalism*, Part 1, Vol.1, 653.
- (245) “Документ о положении российских граждан в США после победы Октябрьской революции,” *Исторический Архив*, 1957, No.5, 269-272.
- (246) Lusk Committee records, Roll # L0038 (Reel 3, Box 3, file 5, Duplicate Microfilm of the Tamiment Library, New York).
- (247) Report of P-132 (New York City) on “Third Russian All-Colonial Convention of United States and Canada. Russian Professional Unions, and Association of Russian Trade Unions and Educational Societies,” Records of FBI, BS202600-1217-23; “Resolutions of the Third All-Colonial Convention held march 6-9, 1921, in New York,” *ibid.*, BS202600-1217-5; cf. Correspondence of MID, 10110-1683-60.
- (248) Окунцов, 405.
- (249) “Заседания русского общегражданского съезда,” *Русское Слово*, Vol.8, No.1844, 11. II.1918, 1.
- (250) *Русское Слово*, Vol.8, No.1845, 12.II.1918, 4.
- (251) *Русское Слово*, Vol.8, No.1846, 13.II.1918, 1.
- (252) Окунцов, 406.
- (253) Correspondence of MID, 10058-79.
- (254) *The New York Times*, Vol.67, No.21934, 12.II.1918, 18.
- (255) “200,000 Slavs Here Ready to Fight Kaiser,” *The New York Times*, Vol.78, No.26121, 23.V.1918, 14.

- (256) Окунцов, 406.
- (257) FROA, Folder 1, N=6Д.
- (258) FROA, Folder 3; cf. Folder 1, N=1. のちに議長以外は以下に交代する。副議長はマルティノヴィチ、出納係はコンスタンティノフ (Б. Константинов)、そして書記はチェルノフ (А. Чернов) に。Ibid., Folder 3.
- (259) FROA, Folder 2.
- (260) FROA, Folder 2; cf. Ко всем русским организациям Соед. Штатов и Канады, ibid., Folder 6.
- (261) FROA, Folder 2.
- (262) FROA, Folder 2.
- (263) FROA, Folder 1, No.7A; N6; N4.
- (264) FROA, Folder 1, No.8A; cf. No.2A; No.3A.
- (265) FROA, Folder 1, No.2Б.
- (266) FROA, Folder 1, No.8A; No.5.
- (267) FROA, Folder 1, No.8A.
- (268) FROA, Folder 1, No.6.
- (269) “Сегодня открывается 2-ой обще-гражданский съезд,” *Русское Слово*, Vol.8, No. 2149, 13.XII.1918, 1.
- (270) *Русское Слово*, Vol.8, No.2150, 14.XII.1918, 1.
- (271) *Русское Слово*, Vol.8, No.2153, 17.XII.1918, 1.
- (272) *Русское Слово*, Vol.8, No.2154, 18.XII.1918, 1.
- (273) FROA, Folder 3 (1918 年 11 月 25 日付招請状).
- (274) *The Immigration Problem in the United States* (National Industrial Conference Board, Research Report No. 58) (New York, 1923), 123-130.
- (275) Тарле, 67.
- (276) Ibid., 66; Л.К. Мартенс, “Воспоминания о В.И. Ленине,” *Исторический архив*, 1958, No.5, 148.
- (277) Л.К. Мартенс, “Иммиграция русских рабочих из зарубежных стран и наша промышленность,” *Экономическая жизнь* (Москва), No.157, 20.VII.1921, 1. 判読困難な箇所があり、以下の英訳を参照した (同英訳はタイトルを変更しているものの全訳である。ただし、転載に際して原掲載誌の日付が「1921 年 6 月 22 日」と誤記された)。L.A. Martens, “Russian Workers from America,” *Soviet Russia*, Vol.5, No.4, X. 1921, 156-158.
- (278) Тарле, 66-67.
- (279) Г.Я. Тарле, *Российское зарубежье и родина* (Москва, 1993), 17 (ただし本書は未見で、Ручкин, Глава 3, 20/87 から再引用)。
- (280) Тарле, *Друзья страны Советов*, 61.
- (281) N. Carpenter, *Immigrants and Their Children 1920. A Study Based on Census Statistics Relative to the Foreign Born and the Native White of Foreign or Mixed Parentage* (Washington, 1927), 74-75, 97, 342.

(282) Garis, 227.

文献目録 (Selected Bibliography)

1 文書館史料 (Archival Sources)

National Archives and Records Administration (NARA) (Washington, D.C.)

Records of the Federal Bureau of Investigation [1908-1922], RG 65

Correspondence of the Military Intelligence Division of the War Department General Staff,
1917-1941, RG 165

New York State Archives and Records Administration (Albany, NY)

New York (State); Legislature; Joint Legislative Committee to Investigate Seditious
Activities

L0027 (Mass Meetings Investigation Files, 1918-1920)

L0032 (Russian Soviet Bureau Seized Files, 1918-1919)

L0038 (Investigations Files, 1918-1920)

Manuscripts and Archives Division, New York Public Library (New York)

Federation of Russian Organizations in America 1918-1924

Bakhmeteff Archive, Rare Book & Manuscript Library, Columbia University (New York)

Boris Alexandrovich Bakhmeteff Papers

Boxes 36-38 (Arranged Manuscripts)

Library and Archives Canada (Ottawa)

Records of the Department of National Defence

RG 24, Vol.2543, File H.Q.C.2051, Vol.1

RG 24, Vol.4545, MD6, 73-T-9

外務省外交史料館 (東京)

4.3.2.1-4-4 (過激派其他危険主義者取締関係雑件 社会運動状況 米国) 第2分冊

2 公刊史料 (Printed Documentary Sources)

Abstracts of Reports of the Immigration Commission with Conclusions and Recommendations and Views of the Minority [Presented by W.P. Dillingham to the Senate, 61st Congress, 3d Session, December 5, 1910] (Washington, 1911), Vol.1 (Washington, 1911).

Immigrant Laws. Act of February 5, 1917; and Acts approved October 16, 1918..... Seventh Edition, August, 1922 (Washington, 1922).

The Immigration Problem in the United States (National Industrial Conference Board, Research Report No. 58) (New York, 1923).

Papers Relating to the Foreign Relations of the United States. 1919. Russia (Washington, 1937).

Revolutionary Radicalism. Report of the Joint Legislative Committee Investigating Seditious

Activities, Filed April 24, 1920, in the Senate of the State of New York, Part 1, Vols.1-2 (Albany, 1920).

Будницкий, О.В. (ред.), «Совершенно лично и доверительно!» *Б.А. Бахметев — В.А. Маклаков переписка 1919 — 1951*, Т.1 (Москва, 2001).

“Документ о положении российских граждан в США после победы Октябрьской революции,” *Исторический Архив*, 1957, No.5, 269-272.

Россия и США: дипломатические отношения 1900-1917 (Москва, 1999).

Совещание Российских Консулов и представителей русской колонии 29-30 сентября и 1 октября 1917 г. в Нью-Йорке. Краткий отчет, составленный редакционной комиссией, в которую входили участники совещания О. Дымов, Е. Омельченко и П. Бланк (New York, 1917).

3 同時代新聞・雑誌 (Contemporary Newspapers and Periodicals)

Current History. A Monthly Magazine of The New York Times (New York), 1917.

The New York Call (New York), 1919.

The New York Times (New York), 1919-1920.

New York Tribune (New York), 1918.

Soviet Russia (New York), 1921.

Голос Труда (New York), 1911, 1917.

Новый Мир (New York), 1917-1919.

Русское Слово (New York), 1918.

4 同時代文献 (Contemporary Literature)

Post, L.F., *The Deportations Delirium of Nineteen-twenty. A Personal Narrative of an Historic Official Experience* (Chicago, 1923).

Tunney, Th., *Throttled! The Detection of the German and Anarchist Bomb Plotters* (Boston, 1919).

Вильчур, М., *Русские в Америке* (New York, n.d.).

Мартенс, Л.К., “Иммиграция русских рабочих из зарубежных стран и наша промышленность,” *Экономическая жизнь* (Москва), No.157, 20.VII.1921, 1.

Мартенс, Л.К., “Воспоминания о В.И. Ленине,” *Исторический архив*, 1958, No.5, 146-150.

Окунцов, И.К., *Русская Эмиграция в Северной и Южной Америке* (Buenos Aires, 1967).

Омельченко, Е.И., *К вопросу об организации российской колонии* (New York, 1917).

Омельченко, Е.И./О.А. Корф (Omeltchenko, E.I./O.A. Korff) (chief editors), *Русско-американский справочник/Russian-American Register* (New York, 1920).

5 研究文献 (Secondary Literature)

- Ackerman, K.D., *Young J. Edgar. Hoover, the Red Scare, and the Assault on Civil Liberties* (New York, 2007).
- Avrich, P., *The Russian Anarchists* (Princeton, 1967).
- Avrich, P., *Anarchist Voices. An Oral History of Anarchism in America* (Edinburgh/Oakland/West Virginia, 2005).
- Benson, S., *U. S. Immigration and Migration: Almanac*, Vol. 2 (Detroit et al., 2004).
- Brissenden, P.F., *The I. W. W. A Study of American Syndicalism*. Second Edition (New York, 1920).
- Carpenter, N., *Immigrants and Their Children 1920. A Study Based on Census Statistics Relative to the Foreign Born and the Native White of Foreign or Mixed Parentage* (Washington, 1927).
- Chyz, Y.J./J.S. Roucek, "The Russians in the United States," *The Slavonic Review*, Vol.17, No.51, 1939, 638-658.
- Cook, M.S., "Former Soviet Union," J. Climent (ed.), *Encyclopedia of American Immigration*, Vol. 4 (Armonk, NY, 2001), 1245-1252.
- Davis, J., *The Russian Immigrant* (New York, 1922).
- Davis, J., *The Russians and Ruthenians in America. Bolsheviks or Brothers?* (New York, 1922).
- Draper, Th., *The Roots of American Communism* (New York, 1957).
- Foglesong, D.S., *America's Secret War against Bolshevism: U.S. Intervention in the Russian Civil War, 1917-1920* (Chapel Hill/London, 1995).
- Garis, R.L., *Immigration Restriction. A Study of the Opposition to and Regulation of Immigration into the United States* (New York, 1927).
- Hoerder, D. (ed.), *The Immigrant Labor Press in North America, 1840s-1970s. An Annotated Bibliography*. Vol.2: Migrants from Easter and Southeastern Europe (New York/Westport, Conn./London, 1987).
- Linden, M. van der, *Transnational Labour History: Explorations* (Aldershot/Burlington, 2003).
- McCormick, Ch.H., *Seeing Reds. Federal Surveillance of Radicals in the Pittsburgh Mill District, 1917-1921* (Pittsburgh, 1997).
- Magosci, P.R./S. Stotsky, General Editor, *The Russian Americans* (New York/Philadelphia, 1996).
- Maichel, K. (comp.), *Soviet and Russian Newspapers at the Hoover Institution: A Catalog* (Stanford, 1966).
- Panunzio, C.M., *The Deportation Cases of 1919-1920. A Study* (New York, 1921).
- Park, R.E., *The Immigrant Press and Its Control* (New York/London, 1922).
- Pfannestiel, T.J., *Rethinking the Red Scare. The Lusk Committee and New York's Crusade against Radicalism, 1919-1923* (New York/London, 2003).
- Powell, J., *Encyclopedia of North American Immigration* (New York, 2005).
- Schmidt, R., *Red Scare. FBI and the Origins of Anticommunism in the United States, 1919-1943* (Copenhagen, 2000).

- Shmelev, A., "Russians in the Repositories," id., *Tracking a Diaspora: Émigrés from Russia and Eastern Europe in the Repositories* (Binghamton, 2006), 1-8.
- Sokoloff, L., "The Russians in Los Angeles," *Studies in Sociology* (Los Angeles), Vol.3, No.3 (Sociological Monograph No.11), March 1918, 1-16.
- Ермаков, В.Д./П.И. Талеров, *Анархизм в истории России. От истоков к современности. Библиографический словарь-справочник* (Санкт-Петербург, 2007).
- Нитобург, Э.Л., *Русские в США. История и судьбы 1870-1970. Этноисторический очерк* (Москва, 2005).
- Ручкин, А.Б., *Русская диаспора в Соединенных Штатах Америки в первой половине XX века. Работа выполнена на общеуниверситетской кафедре истории Московского гуманитарного университета* (Москва, 2007).
- Тарле, Г.Я., *Друзья страны Советов. Участие зарубежных трудящихся в восстановлении народного хозяйства СССР в 1920-1925 гг.* (Москва, 1968).
- Черненко, А.М., *Российская революционная эмиграция в Америке (конец XIX в. — 1917 г.)* (Киев, 1989).
- 山内昭人『リユトヘルスとインタナショナル史研究 — 片山潜・ボリシェヴィキ・アメリカレフトウィング — 』（ミネルヴァ書房, 1996）.

付録 1

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

2012年5月15日現在

機関番号：17102

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011年度

課題番号：21520749

研究課題名（和文） アメリカ移民労働史の再検討ートランスナショナル・
アイデンティティ・アプローチ

研究課題名（英文） A Reexamination of American Immigrant Labor History:
Through the Transnational Identities Approach

研究代表者

山内 昭人（YAMANOUCHI AKITO）

九州大学・人文科学研究院・教授

研究者番号：XXXXX850

研究成果の概要（和文）：

本研究は、アメリカ移民労働史の再検討を試み、各自がそれぞれロシア人移民、アナキスト・ユダヤ人移民、ハンガリー系移民（特に女性）、及びドイツ系ボヘミアないしチェコ系移民を対象に、各移民労働者のコミュニティやグループ内で、いかに「トランスナショナル」な関係性が築かれ（或いは失われ）、それに伴って「トランスナショナル・アイデンティティ」が形成（或いは喪失）されていったかの、日本においては先駆的となる解明を進めることができた。

研究成果の概要（英文）：

In this research we tried to reexamine the American immigrant labor history and treated as an object of research the Russian immigrants, the Jewish immigrant anarchists, Hungarian (especially female) immigrants, and the German-Bohemian or Czech immigrants, respectively. We could throw light on how they built up (or broke off) “transnational” relations in their communities and groups and, accordingly, how they established (or lost) “transnational identities,” which was the pioneering research in this field in Japan.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合 計
2009年度	800,000	240,000	1,040,000
2010年度	2,100,000	630,000	2,730,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
総 計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野： 西洋史

科研費の分科・細目： 南北アメリカ史

キーワード： 移民労働史、トランスナショナル

1. 研究開始当初の背景

本研究の計画に際して、特に以下に掲げる先駆的な研究から示唆を得た。

(1) 馬場伸也・梶田孝道編著『非国家的行動主体のトランスナショナルな活動とその相互行為の分析による国際社会学』（1977-79年度科学研究費総合研究）：国際交流が交通・通信の全地球的発展と相俟って国家の枠組を越えて（transnational）多元化しつつあるとの認識から出発し、国民国家をも含む様々な行為体が相互作用する「一つの国際社会」を措定し、歴史研究から現代社会分析へと進んだ本研究は、グローバル化した今日の関連する議論を先取りしたものであり、その方法論はなお有効性を持つ。

(2) M. van der Linden, *Transnational Labour History* (2003)：アメリカ労働史のトランスナショナルな再解釈を提起したファン・デア・リンデンの本研究によれば、アメリカ労働史の考えられるすべての側面は、トランスナショナルな再解釈の余地があり、人・資本・情報及び思想の国境を越えた移動が重く考慮されたとき初めて合衆国の労働階級及び運動の展開は理解されうる。その際、労働組合など制度的側面ばかりではなく、移民労働者に見られる文化的特質にも分析対象を拡大する必要がある。そのため

には、1990年代に社会学・人類学で提起された「トランスマイグランツ」、つまり「その日常生活が国境を越えた複合的かつ恒常的な相互関係に依存し、その公的アイデンティティが一国以上の国民国家との関係において形づくられるところの移民」という概念が有効であり、それは社会学で提起されてきた複合アイデンティティを前提とした概念である。かくして、トランスナショナル・アイデンティティ・アプローチによるアメリカ移民労働史の再解釈は、移民を、国境を越えて成立する多様な関係性のネットワークの中で自らの生活や理念の「集合性」を時には創造しうる主体的・能動的存在＝「トランスマイグランツ」として再定義することを可能にした。

(3) B. Anderson, *Under Three Flags* (2005)：アンダーソンの本研究は、多言語・多文化など多様な要素を内面化し、国境を越えて移動する個人（ナショナリストやアナキスト）が創出する政治思想・運動を解明した試論であり、その中で採用された「ノマド」概念は、「トランスマイグランツ」と通底する性格を持つ。

本共同研究者のうち特に研究代表者のこれまでの研究との関連性が見られる(2)のト

ランスナショナル・アイデンティティ・アプローチによるアメリカ移民労働史の再解釈は、今後発展しうるものと考えられ、その延長線上に本研究は位置づけられた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、従来ナショナル・ヒストリーに組み込まれてきたアメリカ移民労働史を、ヨーロッパ史をも含めたトランスナショナル・ヒストリーとして再検討することを目的とする。そのために本研究は、移民労働運動における個人・集団等のアクターを「トランスマイグランツ」(transmigrants)と規定し、彼らのトランスナショナルな諸側面を明らかにするトランスナショナル・アイデンティティ・アプローチを採用し、これにより、従来看過されてきた個人と様々なグループの諸活動、労働者の生活世界、そして個人・集団により表明されるアイデンティティにいかなるトランスナショナルな特質があるかを解明する。

3. 研究の方法

申請時に記した「研究計画・方法」を実施にあたり一部変更を余儀なくされたため、実際に行った「研究の方法」を以下記すことにする。

本研究はドイツ、東欧、ロシアを主たるフィールドとした研究者4名によって構成され、日本のアメリカ史研究ではあまり見られない研究組織であり、その特色を活かして、各自以下のように分担した。

(1) 研究代表者山内昭人は、ロシア人移民労働運動を扱い、在米ロシア人社会主義運動はもとよりアナーキスト系の在米ロシア人労働者同盟など関係史料調査のため、アメリカ国立公文書館、議会図書館、ニュー

ヨーク公共図書館、ニューヨーク州公文書館及びコロンビア大学バフメチェフ文庫へ赴いた。

(2) 研究分担者田中ひかるは、アナーキスト及びユダヤ人移民労働者を扱い、ユダヤ系移民が書いた未公開回想録など関係史料調査のため、ニューヨークのイディッシュ研究所及びニューヨーク公共図書館へ赴いた。

(3) 同山本明代は、ハンガリー系移民（特に女性）労働者を扱い、IWW ハンガリー支部、東欧移民女性など関係史料調査のため、ハンガリーの国立図書館へ赴いた。

(4) 同大津留厚は、ドイツ系ボヘミア移民及びチェコ系移民を扱い、東欧移民の送り出し国側の関係史料調査のため、チェコ国立図書館へ赴いた。

最終年度の10月、各自が2年半にわたる研究の成果を、九州西洋史学会秋季大会のシンポジウム「アメリカ移民労働史研究の再検討——ヨーロッパとアメリカをつなぐ視点から——」でアメリカ労働運動史研究の第一人者である野村達朗・愛知県立大学名誉教授をコメンテーターに迎えて別項記入の題目で発表し、そこでの質疑応答等を踏まえて最終的な研究成果をまとめた。

4. 研究成果

共同研究を始めるやいなや実際の研究対象を、「研究の目的」で記したような理論設定に合致する対象として捉えることの困難に直面し、本共同研究では一定の結論に至らず、各自が明らかにしえたのはその一端にとどまった。けれども、従来の研究では未着手の移民労働史の諸側面がヨーロッパ史とのつながり中で解明されはじめたと言えよう。

その一端を以下、各タイトルの下、個別

に記していくことにするが、残された研究課題を先に掲げておく。すなわち、個別のエスニック・コミュニティやグループ内で、いかに「トランスナショナル」な関係性が築かれ（あるいは失われ）、それに伴って「トランスナショナル・アイデンティティ」が形成（あるいは喪失）されていったかは、程度差はあれ、それなりに解明できたが、それらを複数のエスニック・コミュニティないしグループの広範囲にわたる関係史へと総合化することである。あるいは、その関係史の中で起こりうる変容過程の追究であろう。

(1) 山内昭人「在米ロシア人移民労働運動史研究——在米ロシア人コロニー統一の試みを中心に」

ロシア2月革命勃発後、在米ロシア人政治亡命者ないし移民は、帰国準備及び革命政権支援のため、ロシア人市民のアメリカ軍選抜徴兵の動きへの対処のため、そして1917年6月に到着した駐米ロシア大使バフメチェフとの関係をどのように結ぶかの検討などのため、アメリカ国内での組織統一、つまり在米ロシア人コロニー統一を求める運動を急激に展開していった。その試みは当初、①ニューヨークのアメリカ社会党ロシア人部、②ロシア人労働者同盟の指導部を占めたアナキスト・グループ、③バフメチェフを支持する市民グループの間で試行錯誤された。三者によって統一組織委員会が設立されたが、出発支援及び選抜徴兵に対するロシア大使の対処の生ぬるさを批判する①と②は、最終的に③の参加を断り、1918年2月に第1回全ロシア人コロニー大会をニューヨークで開催することになった。

大会はロシア国籍保持者の徴兵不可などの決議とともに、ロシア人労働者コロニー

の組織形態として労働者代表ソヴェトの創設、諸ソヴェトの連盟形成及びソヴェト大会の計画をも採択した。大会は「在米ロシア人移民の歴史において初めて」曲がりなりにも「ロシア人コロニーを統一し」、「これは合衆国とカナダのあらゆる方面に分離され、分散させられているロシア人組織の団結の始まりであ」った。この在米ロシア人移民の歴史において初めて団結の始まりである全ロシア人コロニー大会及び労働者代表ソヴェト創設の試みの中に、「国境を越えて成立する多様な関係性のネットワークの中で自らの生活や理念の『集合性』を時には創造しうる主体的・能動的な存在」の可能性をみることはできないだろうか？

しかし今度は、①と②が、同ソヴェト創設の試みの中で対立し、②によってのみ1919年1月に第2回全ロシア人コロニー大会が開催されることになった。この対立は、今ロシアで起こっている「勢力範囲を決めるプロセス」の反映であった。

大会をボイコットした①はアメリカ共産主義政党創設へ注力していき、他方、②は大会で新執行委員会を選出したが、その中でも対立が生じ、一部の分派だけが強引に第3回全ロシア人コロニー大会を1921年3月に開催した。しかし、そこでの決定事項は政治的対立・分裂や政府による弾圧下で掛け声倒れに終わり、これ以後、在米ロシア人コロニーの統一運動は終熄していった。

1921年初めの段階では在米ロシア人移民のソヴェト・ロシア政権への支持ないし中立的関心の高さは依然保たれていた。ロシア人移民労働者にとって、ロシア革命の帰趨は他人事ではなく、良くも悪くも革命ロシアでの対立関係が彼らの運動に大きな影響を及ぼさざるをえなかった。統一の試み自体がその対立関係の波をもろにかぶり、アメリカ政府による弾圧下で四分五裂していった。

結局のところ、在米ロシア人コロニーの統一をめざしたロシア人移民労働者の中に（ロシア革命を機にその可能性が高まった）トランスナショナル・アイデンティティの形成をみるには、（これまた革命が引き金となって生じた）多くの内的・外的阻害要因がありすぎたと言えよう。

ファン・デア・リンデンは、「労働者トランスナショナリズム」という概念を提起し、それを三つの側面、①連帯、②組織モデル、③産業関係（労働関係）からアメリカ労働史の再検討に活かそうとした。本研究では、①は当然として、②については、帰国するだけでなくアメリカの地でロシア人コロニーの統一をめざし、（③までは達しえなかったが）その組織形態として労働者代表ソヴェトの創設途中までいったことで説明した。その運動の中で、かつて「工場街の煙の中へと消えた」民族的アイデンティティが、主体的なそれとして一時期であれ復活した事実を掘り起こすことができた。

(2) 田中ひかる「アナーキスト赤十字による活動 1905-1920 年——国境を越えるユダヤ系移民アナーキスト」

従来のアメリカ移民労働史研究では、移民がアメリカ人になる／ならない、エスニック・アイデンティティ（文化）を持つ／持たない、という点が問題となっていた。しかし近年では移民のトランスナショナルな経験に注目する研究が増え、また、そのような経験を持つ移民がアナーキズムを支持したという事例が多数報告されている。この事象を検討する上で、アナーキスト赤十字の事例は重要である。

アナーキスト赤十字は、ロシアで投獄・流刑されたアナーキストを救援するためにロンドン、及びニューヨークをはじめとす

るアメリカ各地で 1905-1910 年、及び 1922-1926 年頃にロシア出身のユダヤ系移民労働者を中心にして設立された組織だった。その活動は次のようなものだった。まず、アナーキストを自認する若い男女のユダヤ系移民は、「囚人ダンスパーティー」やエクスカーションなどのイベントを開催し、収益金を集めた。「囚人ダンスパーティー」は、1911-1917 年の毎年冬に開催されたイベントだった。1913 年以降は 8,000 人を収用できる大ホールを会場とし、夜の 7 時半頃から明け方の 3 時まで開催され、楽隊による演奏にのって若い男女が踊り明かしたと推測できる。パーティーでは、アナーキスト赤十字のメンバーたちが演じる、ロシアで投獄されているアナーキストたちにまつわる様々な場面が「活人画」として展示された。1914 年から毎年夏には、遊覧船によるクルーズが実施されていた。船上ではバンド演奏やゲームがあったようである。

以上のようなイベントで集められた収益金の一部はロシアに送金され、一部は、ロシアの囚人に送られる物資の購入費と送料にあてられたが、さらに、ロシアの監獄の劣悪さを訴えるという目的で、囚人から送られてきた手紙を公表するためのイディッシュ語とロシア語の両言語で書かれた雑誌の発行や、囚人たちに手紙を送る活動にあてられた。ロシアの監獄では、法律に基づいて、囚人宛の手紙は親族から送られ、ロシア語で書かれたものしか受け付けず、厳しい検閲を受けたため、ロシア語ができ、かつ投獄経験があるような人びとしかこの活動には加われなかった。それでも、60-100 名程度のメンバーが、ひとりあたり 10 名以上の囚人を担当して手紙を書き、時には偽造パスポートや資金を見つからないようにして送り、脱獄や流刑地からの脱走の支援を行った。送金や物資の送付が物質面の支援だったとすれば、手紙の送付は精神面で

の支援だったと言える。

1917 年 3 月にロシアで革命が勃発して臨時政府によって政治犯への恩赦が出された、という報に接した多くのロシア出身の移民たちは、家族を引き連れてロシアに帰還し、革命に参加する。アナーキスト赤十字はその目的を失い活動を休止するが、アメリカ政府による左翼弾圧の結果投獄された人々、そして、ボリシェヴィキによってロシアで弾圧されたアナーキストを救援するために、ロンドンやニューヨークで再建される。しかし、帝政時代と異なり、ロシアで投獄・流刑されたアナーキストとの交信は極めて困難であり、1939 年頃には一切の交信が途絶えた。その後、救援活動の拠点はシカゴに移り、支援対象はナチスに迫害されたアナーキスト、戦後のヨーロッパのアナーキスト、さらには日本・朝鮮半島のアナーキストへと移っていった。その遺産は、今日アメリカなどで活動している Anarchist Black Cross 等に受け継がれている。

(3) 山本明代「1926 年パセーイク・ストライキにおける東欧移民労働者の実践と支援活動」

1926 年 1 月ニュージャージー州パセーイクの毛織物工場労働者 15,000 人が賃金カットに反対してストライキを開始した。本報告では、1926 年パセーイク・ストライキにおいて東欧移民労働者はいかに闘ったのか、そしてこのストライキへの支援活動はどのように展開したのか。この事例を通して、1920 年代のアメリカ合衆国における東欧移民労働者の位置づけとトランスナショナルな関係性を検討した。

1926 年パセーイク・ストライキは、賃金 10 %カットと労働時間短縮に抗議し、1926 年 1 月 25 日に始まり、翌年 3 月 1 日に終結した。

ストライキの発端であり中心となったのはパセーイク最大の毛織物工場ボタニー梳毛工場だった。工場労働者は多くが移民労働者から成り、多数を占めたのがポーランド、イタリア、ロシア、ハンガリー系だった。

ストライキを組織したのは、織物労働者統一戦線委員会であり、アメリカ労働党の労働組合教育同盟（以下、TUEL）が主導的役割を担った。ストライキのリーダーとなったのは、TUEL の活動家アルバート・ヴァイスボードだった。統一戦線委員会の要求は、賃金カット 10 %停止、超過労働に 1.5 倍の賃金、週 44 時間労働、組合の承認、工場の衛生状況の改善、差別撤廃だった。

当時パセーイクのハンガリー系住民約 5,000 人のうち、2,000 人の男女が毛織物工場に働いていた。ハンガリー系労働者のストライキ委員会委員長となったデアーク・グスターヴは、ヴァイスボード逮捕後に織物労働者合同組合を率いた。ハンガリー系労働者の集会では、労働者の連帯意識と故国への意識やハンガリーの労働者につながるトランスナショナルな意識が鼓舞された。

ストライキやデモを阻止するために派遣された警官隊が女性や子ども、ジャーナリストに暴力をふるう様子が新聞やメディアで大々的に報じられたことから、ストライキへの共感が市民へと広がった。ニュージャージー州騒擾取締法と警官隊による市民権の侵害に対する抗議の声は、労働者国際救済などの人権団体からの支援を導いた。女性労働者たちもデモを組織し、労働者階級主婦連合協議会は、食事を提供する「キッチン」を開設・運営した。ここに、階級やエスニシティを越えた連帯の広がりを見ることができる。また、女性たちが組織化の経験を有し、ストライキ戦略を発揮していたこともわかる。また、労働者国際救済が広報戦略を立て、メディアや広報が効果的に活用され、ストライキへの共感幅広く

市民層にも広がった。

第一次世界大戦後、アメリカの東欧移民の間では市民権取得が徐々に進んでいた。しかし、労働の場においては、東欧移民労働者はアメリカ生まれであっても、不熟練のパートタイムを強いられ、底辺に置かれていた。しかし、それゆえに労働者の間ではトランス・ナショナルな連帯が広がっていた。それは、ストライキの闘いや支援活動にみられたように、国境を越え、エスニシティや人種、階級をも越え、女性や子どもも主体者となる結合だった。今回はストライキの中でいかに多様な「トランスナショナル」な関係性が生まれていったかを見るという作業であった。これからアメリカ化のプロセスとは異なる、国民史を越えた歴史像の提示を試みていきたい。

(4) 大津留厚「ボヘミア、アメリカ往還——遅れてきたエスニックグループの失われたアイデンティティ」

1972年に刊行された『ミネソタ・ヒストリィ』誌には、ミネソタへ移民したチェコ人の新世界との遭遇が率直に語られている手紙が掲載されていた。この手紙は1970年に、現在スロヴァキアの首都となっているブラティスラヴァで発行された『アメリカ合衆国に移民したチェコ人、スロヴァキア人の手紙』に掲載されたものの英訳であった。そしてこの本を編集したのがヨゼフ・ポリシェンスキーであった。ポリシェンスキーはこの移民たちの足跡を調査研究した自分の経験に照らして、歴史記述の中心に「人間」を置くことを提唱した。それは「人間の顔をした社会主義」の実現を掲げる「ブラハの春」の歴史学会におけるマニフェストだった。

それはアメリカ合衆国にとっても、ベト

ナム反戦運動を契機に始まった既成秩序に対する疑問の一環として移民史研究にも大きな転換があった時期であった。そこでは移民集団の文化的伝統に根ざした主体的なエスニック・アイデンティティの確立が強調された。「オワットナからの手紙」はアメリカの歴史学とチェコの歴史学の幸福な邂逅を意味していた。しかしその邂逅は瞬時にして終わった。1968年8月ワルシャワ条約機構軍がチェコスロヴァキアに侵攻し、ブラハの春は終わった。

ミネソタ州の州都セントポールから南西方向に50キロメートルほど行くと、ニュー・プレイグという町がある。町のメインストリートにはシューマッハーという名のホテルがあつて、その中にチェコ風の料理を出すレストランがあつた。この町で目を引くのは、建物の壁面にこの町の歴史が表現されていることである。この壁画が作られたのが1989年、正にこの年の10月にベルリンの壁が崩壊することになる。アメリカ合衆国在住のチェコスロヴァキア系の人たちもようやく自分たちのルーツを語れる時がきた。ニュー・プレイグの壁画はそのことをよく物語っていた。しかしそれはあまりにも遅い「新ブラハの春」だった。壁画が作られて20年経った2008年、町のチェコ系社会の象徴であつたシューマッハー・ホテルは廃業し、壁画が描かれた建物の一つは解体され、一つは焼失していた。

ニュー・プレイグのチェコ系の人たちと時を同じくして、ボヘミア出身のドイツ系の人たちも自己を語り始めた。そこにはボヘミアのチェコ系移民たちとはまた異なる体験があつた。ドイツ系の移民たちは、第一次世界大戦にアメリカ合衆国が協商側で参戦すると敵国民として差別の対象となった。第二次世界大戦の時にはドイツ系移民たちはアメリカ合衆国の反ナチ感情に堪えなければならなかった。1984年になって漸

くボヘミア・ドイツ系伝統保存協会がニュー・アルムに設立された。この事業の延長線上に 1991 年にボヘミア・ドイツ系移民記念像がニュー・アルムのドイツ公園に設置された。

その後、アメリカ合衆国のボヘミア・ドイツ系の人々は毎年故郷を訪れるツアーを組んでいる。しかし彼らの「故郷」には、第 2 次世界大戦後ドイツ人たちが追放されたあとでチェコ人やスロヴァキア人たちが入植していた。そのためこの地域の民族構成はすっかり変わってしまった。アメリカ合衆国のボヘミア・ドイツ系の人々のツアーは、彼らのアイデンティティの表出の一つと考えられるが、彼らが実感するのは「故郷喪失」という現実だった。

ミネソタ州で隣り合わせで生活するボヘミアからのチェコ系移民とドイツ系移民。彼らの間の微妙な関係、故国の変動、アメリカ合衆国での経験、その複雑な相関関係の中で生じるアイデンティティの創出と喪失、それを実態に即して追究していくことが今後も課題となる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 12 件)

- ①山内昭人「在米ロシア人移民労働運動史研究ノート(2)」『史淵』査読無、149 輯、2012、31-78
- ②田中ひかる「ロシアで投獄されたアナーキストを救援するための組織とその活動について～ニューヨークのアナーキスト赤十字を中心に 1905 ～ 1920 年代」『歴史研究』査読無、49 号、2012、47-88
- ③山内昭人「在米ロシア人移民労働運動史研究ノート(1)」『史淵』査読無、148 輯、

2011、37-65

- ④田中ひかる「ロシア出身のユダヤ系移民アナーキストについての考察—ジュリアン・シンガー・グッドマンの生涯及びアナーキスト赤十字の活動—」『歴史研究』査読無、48 号、2011、97-138
 - ⑤大津留厚“My Journey to Bohemian-Homeland,” *Heimatbrief-Newsletter Magazine of the German-Bohemian Heritage Society*、査読無、22 巻 1 号、2011、10-12
 - ⑥山本明代「東欧移民のコスモポリタニズムと「市民権」」『アメリカ史研究』査読有、33 号、2010、40-58
 - ⑦田中ひかる「アメリカ合衆国におけるロシア系移民アナーキスト—— 1880 年代から 1920 年代——」『歴史学研究』査読無、589 号、2009、96-105
 - ⑧山本明代「ハンガリー国民共同体の形成と移民のネットワーク」『ヨーロッパ・ロシア・アメリカのディアスポラ』(駒井洋・江成幸編) 査読無、2009、260-274
- 〔学会発表〕(計 5 件)
- ①山内昭人、在米ロシア人移民労働運動史研究——在米ロシア人コロニー統一の試みを中心に、九州西洋史学会、2011 年 10 月 15 日、九州大学
 - ②田中ひかる、アナーキスト赤十字による活動 1905 - 1920 年——国境を越えるユダヤ系移民アナーキスト、九州西洋史学会、2011 年 10 月 15 日、九州大学
 - ③山本明代、1926 年パセーイク・ストライキにおける東欧移民労働者の実践と支援活動、九州西洋史学会、2011 年 10 月 15 日、九州大学
 - ④大津留厚、ボヘミア、アメリカ往還——遅れてきたエスニックグループの失われたアイデンティティ、九州西洋史学会、2011 年 10 月 15 日、九州大学
 - ⑤田中ひかる、アメリカ合衆国におけるロ

シア系移民アナーキスト—— 1880 年代から 1920 年代——、歴史学研究会、2009 年 5 月 24 日、中央大学

〔図書〕（計 4 件）

- ①山本明代、風媒社、『反響する文学』（土屋勝彦編）、2011、121-153
- ②田中ひかる、日本経済評論社、『国民国家の境界』（加藤哲郎編）、2010、229-247
- ③山内昭人、ミネルヴァ書房、『初期コミンテルンと在外日本人社会主義者——越境するネットワーク——』、2009、343

6. 研究組織

(1)研究代表者

山内 昭人（YAMANOUCHI AKITO）
九州大学・大学院人文科学研究院・教授
研究者番号：XXXXX 850

(2)研究分担者

田中 ひかる（TANAKA HIKARU）
大阪教育大学・教育学部・准教授
研究者番号：XXXXX 774

山本 明代（YAMAMOTO AKIYO）
名古屋市立大学・大学院人間文化研究科
・准教授
研究者番号：XXXXX 950

大津留 厚（OTSURU ATSUSHI）
神戸大学・大学院人文学研究科・教授
研究者番号：XXXXX 943

付録 2

【シンポジウム報告：九州西洋史学会 2011 年度秋季大会（2011年10月15日 於九州大学）】

論題

アメリカ移民労働史研究の再検討 ——ヨーロッパとアメリカをつなぐ視点から——

報 告 者 山 内 昭 人（九州大学）
田 中 ひかる（大阪教育大学）
山 本 明 代（名古屋市立大学）
大津留 厚 （神戸大学）
コメンテーター 野 村 達 朗（愛知県立大学名誉教授）

今回のシンポジウムは、科学研究費補助金による共同研究「アメリカ移民労働史の再検討——トランスナショナル・アイデンティティ・アプローチ」（代表：山内）の研究成果の発表を兼ねたものである。本研究は、従来ナショナル・ヒストリーに組み込まれてきたアメリカ移民労働史を、トランスナショナル・ヒストリーとして、すなわち（ヨーロッパ史を含めた）国境を越えるプロセスや比較に焦点を合わせた歴史の枠組の中で再解釈することをめざした。そのため本研究は、移民労働運動における個人・集団等のアクターを「トランスマイグランツ」（transmigrants）と規定し、彼らのトランスナショナルな諸側面を明らかにするトランスナショナル・アイデンティティ・アプローチを採用し、これにより、これまで看過されてきた個人と様々なグループの諸活動、労働者の生活世界、そして個人・集団により表明されるアイデンティティにいかなるトランスナショナルな特質があるのかの解明をめざした。

共同研究を始めるやいなや実際の研究対象を、上記のような理論設定に合致する対象として捉えることの困難に直面し、各研究者が明らかにしえたのはその一端にとどまった。けれども、従来の研究では未着手の移民労働史の諸側面がヨーロッパ史とのつながり中で解明されはじめたと言えよう。

本研究はドイツ、東欧、ロシアを主たるフィールドとした研究者によって構成され、日本のアメリカ史研究ではあまり見られない研究組織であり、その点、アメリカ移民労働運動史研究の第一人者である野村達朗氏の協力を仰ぐことになった。氏は「同化パラダイム」にもとづく旧移民史学から、移民労働者の果たす積極的な役割を強調する新移民史・新労働史へ、さらには「グローバルな移住史」へと研究が進んできていることを既に指摘しており、その延長線上に本研究が位置づけられる。（山内 昭人）

在米ロシア人移民労働運動史研究 ——在米ロシア人コロニー統一の試みを中心に

山内 昭 人

アメリカ移民労働運動史研究に着手してすぐに判明したのは、その困難さである。ロシア人移民は統計上の不備もあり、ロシア人としての認知が困難で、その上ユダヤ人の占める比率が高かった。ロシア 10 月革命後の干渉戦争下の状況では、ロシア人移民が親ソとか反ソとか政治的対立の影響をもろに受け、さらにレッド・スクアの時代のアメリカ政府当局による弾圧の主たる対象にもなった。それらがロシア人アイデンティティ形成の障害ないし分裂要因となり、いずれかのバイアスのかかった史料の慎重な解読を強いることにもなった。ともかく在米ロシア人移民史の全般的把握から始め、少しでもロシア人移民労働運動の世界へ入っていくことに努めた（本要旨は副題に焦点を絞って作成されている）。

ロシア 2 月革命勃発後、ロシア臨時政府によって政治犯・亡命者への恩赦が発され、帰国支援も表明された。在米ロシア人政治亡命者ないし移民は、帰国準備および革命政権支援のため、ロシア人市民のアメリカ軍選抜徴兵の動きへの対処のため、そして 1917 年 6 月に到着した駐米ロシア大使バフメチェフとの関係をどのように結ぶかの検討などのため、アメリカ国内での組織統一、つまり在米ロシア人コロニー統一を求める運動を急激に展開していった。その試みは当初、①（口火を切ったクリーヴランド社会主義・労働者組織と合同した）ニューヨークのアメリカ社会党ロシア人部、②ロシア人労働者同盟（URW）の指導部を占めたアナーキスト・グループ、③バフメチェフを支持する市民グループの間で試行錯誤さ

れた。三者によって統一組織委員会が設立されたが、すぐに③は独自に統一ロシア人組織中央委員会を設立した。ロシア大使は、国と国との関係を前提としているので、いかなるアメリカの政党をも後援することはできないとの理由で、非政治的な統一を呼びかけた。けれども、バフメチェフ自身がウィルソン政権の信任・財政援助を得て反ボリシェヴィキ勢力を支援するという政治的行動を取っていた。出発支援および選抜徴兵に対するロシア大使の対処の生ぬるさを批判する①と②は、全ロシア人コロニー大会の共催を模索して③の中央委員会と折衝したが、最終的に③の参加を断り、1918 年 2 月に第 1 回全ロシア人コロニー大会をニューヨークで開催することになった。

大会はロシア国籍保持者の徴兵不可などの決議とともに、ロシア人労働者コロニーの組織形態として労働者代表ソヴェトの創設、諸ソヴェトの連盟形成およびソヴェト大会の計画をも採択した。大会は「在米ロシア人移民の歴史において初めて」曲がりなりにも「ロシア人コロニーを統一し」、「これは合州国とカナダのあらゆる方面に分離され、分散させられているロシア人組織の団結の始まりであ」った。この在米ロシア人移民の歴史において初めて団結の始まりである全ロシア人コロニー大会および労働者代表ソヴェト創設の試みの中に、「国境を越えて成立する多様な関係性のネットワークの中で自らの生活や理念の『集合性』を時には創造しうる主体的・能動的存在」（ファン・デア・リンデン『トランスナショナルな労働史』の中の「トランスマイグランツ」の定義）の可能性をみることはできないだろうか？

次に、第 1 回大会で主導権を握った①社会党ロシア人部と、② URW アナーキスト・グループとが、同ソヴェト創設の試みの中で対立した。ニューヨークで率先して創設さ

れた同ソヴェトは、今度はアナーキスト・グループに主導されることになり、1919 年 1 月に同グループによって第 2 回全ロシア人コロニー大会が開催されることになった。この対立は、今ロシアで起こっている「勢力範囲を決めるプロセス」の反映であった。

大会をボイコットした①は、アメリカ共産主義政党創設へ注力していった。他方、②は大会で新執行委員会を選出したが、その中でも対立が生じ、2 年 2 カ月の間をあけて（1919 年 11 月の弾圧後、再組織化された URW を財政的に継承した）合州国およびカナダ・アナーキスト-共産主義諸グループ連盟とは敵対するグループだけが強引に第 3 回全ロシア人コロニー大会を 1921 年 3 月に開催した。しかし、そこでの決定事項は政治的対立・分裂や政府による弾圧下での困難な運動の中で、掛け声倒れに終わらざるをえず、これ以後、在米ロシア人コロニーの統一運動は終熄していったものとみられる。

露語新聞 4 紙の紙面分析に拠れば、1921 年初めの段階では在米ロシア人移民のソヴェト・ロシア政権への支持ないし中立的関心の高さは依然保たれていた。一般読者以上にロシア人移民労働者にとって、ロシア革命の帰趨は他人事ではなく、重大な関心事であった。良くも悪しくも革命ロシアでの対立関係が彼らの運動に大きな影響を及ぼさざるをえなかった。統一の試み自体がその対立関係の波をもろにかぶり、アメリカ政府による弾圧下で四分五裂していった。

結局のところ、在米ロシア人コロニーの統一をめざしたロシア人移民労働者の中に、（ロシア革命を機にその可能性が高まった）トランスナショナル・アイデンティティの形成をみるには、（これまた革命が引き金となって生じた）多くの内的・外的阻害要因がありすぎたと言えよう。いずれにせよ、残された／留まったロシア人の多くは、分

断された社会体制下で、アメリカ国籍の中で自らのアイデンティティを確立していく方向へ困難な道を歩んでいくことになる。

アナーキスト赤十字による活動 1905-1920 年

——在国境を越えるユダヤ系移民アナーキスト

田 中 ひかる

アナーキスト赤十字は、ロシアで投獄・流刑されたアナーキストを救援するためにロンドン、およびニューヨークをはじめとするアメリカ各地で 1905 年から 1910 年頃までの間、および 1922 年以降に設立された組織であり、その主体は、ロシア出身のユダヤ系移民労働者だった。故郷を捨ててアメリカ人になったというイメージで描かれがちだったのがロシア出身のユダヤ系移民である。しかし、帝政ロシアのユダヤ人定住地域の諸都市と移民先の各地では、イディッシュ語や被服産業労働という共通の背景を持つ政治的サブカルチャーが生まれ、相互に影響を与えながら存在していたという指摘は以前からあった。また近年では、故郷のロシアと移民先との関係を維持し続けたトランスナショナルな活動に焦点をあてた研究も発表されている。他方、トランスナショナルな経験を持つ移民労働者がアナーキズムを支持したという事例がこれまで多数報告されてきている。したがって、国境を越えた移動・情報・ネットワークとアナーキストのトランスナショナルな経験がアナーキズムの形成になんらかの役割を果たした可能性に注目する必要がある。このような点から、アナーキスト赤十字を検討する意義がある。ただし、これまで残されている文献や史料がわずかであるため、ニ

ニューヨークで発行されていたイディッシュ語によるアナーキストの新聞『労働者の自由な声 *Freie Arbeiter Stimme*』およびロシア語によるアナーキストの新聞『労働者の声 *Golos Truda*』に掲載されたわずかな広告や記事などに基づいて検討せざるをえない。その概要は以下の通りである。

まず、アナーキストを自認する若い男女のユダヤ系移民は、「囚人ダンスパーティー」やエクスカッションなどのイベントを開催し、そこで集められた収益金の多くをロシアの囚人に送り、あるいは物資を購入して発送した。また、そういった収益金の一部は、囚人たちの手紙を公表するための雑誌を刊行することに利用され、さらには、囚人たちに手紙を送るための活動に使用された。そのうち、「囚人ダンスパーティー」は、1911年から1917年まで毎年冬に開催されたイベントだった。次第に参加者数が増大し、1913年以降は8,000人を収用できる大ホールに会場が移っている。パーティーは夜の7時半頃から明け方の3時まで開催され、楽隊による演奏にのって若い男女が踊り明かしたと想像できる。パーティーの趣旨に添った出し物としては、「活人画」と呼ばれた、アナーキスト赤十字のメンバーたちが演じる、ロシアで投獄されているアナーキストたちにまつわる様々な場面だった。このダンスパーティーに加え、1914年から毎年夏には、遊覧船によるクルーズが実施されていた。その詳細は不明だが、船上ではバンド演奏やゲームがあったと推測できる。以上のようなイベントで集められた収益金の一部はロシアに送金され、一部は、ロシアの囚人に送られる物資の購入費と送料にあてられたが、さらに、ロシアの監獄の劣悪さを訴えるという目的で、囚人から送られてきた手紙を公表するためのイディッシュ語とロシア語の両言語で書かれた雑誌の発行や、囚人たちに手紙を送る

活動にあてられた。ロシアの監獄では、法律に基づいて、囚人宛の手紙は親族から送られ、ロシア語で書かれたものしか受け付けず、厳しい検閲を受けたため、ロシア語ができ、かつ投獄経験があるような人びとしかこの活動には加われなかった。それでも、60～100名程度のメンバーが、ひとりあたり10名以上の囚人を担当して手紙を書き、時には偽造パスポートや資金を見つからないようにして送り、脱獄や流刑地からの脱走の支援を行った。送金や物資の送付が物質面の支援だったとすれば、手紙の送付は精神面での支援だったと言える。

1917年3月にロシアで革命が勃発して臨時政府によって政治犯への恩赦が出された、という報に接した多くのロシア出身の移民たちは、家族を引き連れてロシアに帰還し、革命に参加する。アナーキスト赤十字はその目的を失い1919年以降は活動を休止する。他方、同時期からは、アメリカ政府による左翼弾圧の結果投獄されたアナーキストを救援するための組織が設立されていくが、1922年までには、ポリシェヴィキによってロシアで弾圧されたアナーキストが多数投獄され、救援が必要であるということが広く知られるようになり、同年、ロンドンやニューヨークでアナーキスト赤十字が再建され、ベルリンを拠点にした救援組織も生まれた。しかしながら、帝政時代と異なり、ロシアで投獄・流刑されたアナーキストとの交信は極めて困難であり、1939年頃には一切の交信が途絶えた。その後、救援活動の拠点はシカゴに移り、支援対象はナチスに迫害されたアナーキスト、戦後のヨーロッパのアナーキスト、さらには日本・朝鮮半島のアナーキストへと移っていった。その遺産は、今日アメリカなどで活動している *Anarchist Black Cross* を名乗る諸団体等に受け継がれている。以上のように、当初から故郷のロシアで投獄されたアナーキスト

を支援する国境を越えた活動を展開する組織だったという点から、また、その後、国籍や民族を問わない政治犯の人権擁護運動へと発展した、という点からも、アナキスト赤十字はトランスナショナルな性格をもっていたと言える。

1926 年パセーイク・ストライキにおける東欧移民労働者の実践と支援活動

山 本 明 代

1926 年 1 月ニュージャージー州パセーイクの毛織物工場労働者 15,000 人が賃金カットに反対してストライキを開始した。このストライキは、アメリカ合衆国（以下、アメリカと略す）の労働運動史上、初めて共産主義者が主導したストライキとして知られている。そのほかにも、移民労働者によるアメリカ人労働者としての生活水準確保の訴えに、外国人労働者がアメリカ人労働者になる過程をこのストライキにみることができる。また、このストライキはマスメディアや広報を活用した最初のストライキでもあった。

このパセーイク・ストライキの研究は近年ほとんど取り組まれていない。最も体系的な研究は 1953 年に発表されたジーゲルの博士論文であり、1970 年代には、マーフィー（1973 年）やアーウィン（1976 年）の研究が発表されている。なぜ 1926 年のストライキは近年、研究対象とされないのか。推測すると、1950 年代後半以降に明らかになったスターリンによる粛清や 1956 年ハンガリー事件、冷戦下のレッドパージが共産主義に対する嫌悪感を生み出し、共産主義者が指導したこのストライキに対する関心が失われたのではないか。しかしながら、

ストライキの規模と支援拡大の状況からみて、アメリカにおける労働運動の重要な契機として考察する意義がある。

本報告では、1926 年パセーイク・ストライキにおいて東欧移民労働者はいかに闘ったのか、そしてこのストライキへの支援活動はどのように展開したのか。この事例を通して、1920 年代のアメリカ合衆国における東欧移民労働者の位置づけとトランスナショナルな関係性を検討したい。

1926 年パセーイク・ストライキは、賃金 10 %カットと労働時間短縮に抗議し、1926 年 1 月 25 日に始まり、翌年 3 月 1 日に終結した。ストライキの発端であり中心となったのはパセーイク最大の 6,400 人の労働者を雇用する毛織物工場ボタニー梳毛工場だった。工場労働者は多くが移民労働者から成り、その出身地は 39 もの異なる国と地域にわたっていた。多数を占めたのがポーランド、イタリア、ロシア、ハンガリー系だった。当時ニュージャージー州の織物工場は、ニューイングランド地方の工場との競争に晒され、生産を拡大、製品の質を下げ、労働者をパートタイムに留め置くことによって対処しようとした。

ストライキを組織したのは、織物労働者統一戦線委員会であり、アメリカ労働党の労働組合教育同盟（以下、TUEL）が主導的役割を担った。ストライキのリーダーとなったのは、TUEL の活動家アルバート・ヴァイスボードだった。統一戦線委員会の要求は、賃金カット 10 %停止、超過労働に 1.5 倍の賃金、週 44 時間労働、組合の承認、工場の衛生状況の改善、差別撤廃だった。ヴァイスボードの逮捕を契機として、ストライキの主導権が統一戦線委員会から AFL 傘下の織物労働者合同組合に移り、ストライキは、賃金カット撤回と労働者に報復をしないことを雇用者に約束させ、妥協的な結末で終わった。

このようなストライキに立ち上がった織物工場労働者の労働と生活の実態はどのようなものだったのか。毛織物工場では、女性労働者が多数を占めていたが、夜のシフトが中心で男性に比べ賃金も低かった。熟練労働者は 10 時間労働で出来高払い、時給だった不熟練労働者は労働時間の短縮によって賃金が低く抑えられていた。最低レベルの「アメリカの生活水準」を確保することができず、夫婦に加え、子どもの労働によってかろうじて世帯を維持できる状況だった。

当時パセーイクのハンガリー系住民約 5,000 人のうち、2,000 人の男女が毛織物工場に働いていた。ハンガリー系労働者のストライキ委員会委員長となったのは、14 歳からボタニー工場で働き始めたデアーク・グスターヴであり、彼はヴァイスボード逮捕後に織物労働者合同組合を率いた。ハンガリー系労働者の集会では、労働者の連帯意識と故国への意識やハンガリーの労働者となつながらトランスナショナルな意識が鼓舞された。

ストライキやデモを阻止するために派遣された警官隊が女性や子ども、ジャーナリストに暴力をふるう様子がニューヨークの新聞やメディアで大々的に報じられたことから、ストライキへの共感が市民へと広がった。ニュージャージー州騒擾取締法と警官隊による市民権の侵害に対する抗議の声は、労働者国際救済などの人権団体からの支援を導いた。女性労働者たちはベビーカーをひいた母親のデモを組織し、労働者階級主婦連合協議会は、ニューヨークの支部やパセーイクの女性団体の支援を得て、食事を提供する「キッチン」を開設・運営した。ここに、階級やエスニシティを越えた連帯の広がりをみることができる。また、女性たちが組織化の経験を有し、ストライキ戦略を発揮していたこともわかる。

当初、ストライキに反対していた東欧移民の教会聖職者や中産階級の団体もストライキの進展に伴い、賛同者になった。ストライキ救済委員会は数カ月で 500 ドル寄付を集め、各労働組合からの支援も相次いだ。ウィスコンシン州選出進歩党のロバート・ラフォレットら連邦上院議員の支援も得た。また、労働者国際救済が広報戦略を立て、メディアや広報が効果的に活用された。製作された 7 リールの無声映画『ニュージャージーの地獄 (Hell in New Jersey: The Story of the Passaic Textile Strike Told in Pictures)』が全米で上映され、広く支援者を獲得した。ニューヨークのコニーアイランド・スタジアムでは支援コンサートが行われ、ストライキへの共感 は 広く市民層にも広がった。

第一次世界大戦後、アメリカの東欧移民の間では市民権取得が徐々に進んでいた。しかし、労働の場においては、東欧移民労働者はアメリカ生まれであっても、不熟練のパートタイムを強いられ、底辺に置かれていた。しかし、それゆえに労働者の間ではトランス・ナショナルな連帯が広がっていた。それは、ストライキの闘いや支援活動にみられたように、国境を越え、エスニシティや人種、階級をも越え、女性や子どもも主体者となる結合だった。

ボヘミア、アメリカ往還
——遅れてきたエスニックグループ
の失われたアイデンティティ

大津留 厚

1972 年に刊行された『ミネソタ・ヒストリー』誌には、ミネソタへ移民したチェコ人の新世界との遭遇が率直に語られている手紙が掲載されていた。この手紙は 1970 年

に、現在スロヴァキアの首都となっているブラティスラヴァで発行された『アメリカ合衆国に移民したチェコ人、スロヴァキア人の手紙』に掲載されたものの英訳であった。そしてこの本を編集したのがヨゼフ・ポリシェンスキーであった。この本が出版される三年前、1967 年はちょうどハプスブルク帝国がアウスグライヒ（協調）とよばれる国制上の変革を行った 1867 年の 100 周年に当たっていた。それを記念して、ハプスブルク帝国に関係する各地で研究会が開かれたが、そのうちチェコスロヴァキア（当時）で行われた研究会で基調報告を行ったのがポリシェンスキーで、彼は正にこの移民たちの足跡を調査研究した自分の経験に照らして、歴史記述の中心に「人間」を置くことを提唱した。それは「人間の顔をした社会主義」の実現を掲げる「プラハの春」の歴史学会におけるマニフェストだった。

それはアメリカ合衆国にとっても、ベトナム反戦運動を契機に始まった既存秩序に対する疑問の一環として移民史研究にも大きな転換があった時期であった。アメリカ合衆国のイタリア系移民を研究している山田史郎は次のように述べている。「『新しい社会史』の潮流のなかで、移民史研究においても 1960 年代後半以降に、注目すべき成果が現れた。従来の、視野をほとんどアメリカに限定していた欠点を克服するために、旧世界の背景や出移民の実態が重視されるようになる。（中略）アメリカ化の問題に関しては、シカゴ学派やハンドリンが描写した苦渋に満ちた移民の適応というよりも、むしろ各集団の文化的伝統に根ざした主体的なエスニック・アイデンティティの確立が強調された」。まさにその研究史的段階で「オワットナからの手紙」がアメリカ史学の中で位置づけられることになる。アメリカの歴史学とチェコの歴史学が交差した瞬間だった。しかしその邂逅は瞬時にして終

わった。1968 年 8 月ワルシャワ条約機構軍がチェコスロヴァキアに侵攻し、プラハの春は終わった。ミネソタのチェコ系の人たちが自分たちのエスニックな存在を主張するためにはさらに 20 年の歳月を必要とした。

ミネソタ州の州都セントポールから南西方向に 50 キロメートルほど行くと、ニュー・プレイグという町がある。町のメインストリートにはシューマッハーという名のホテルがあつて、その中にチェコ風の料理を出すレストランがあつた。この町で目を引くのは、建物の壁面にこの町の歴史が表現されていることである。この壁が作られたのが 1989 年、正にこの年の 10 月にベルリンの壁が崩壊することになる。アメリカ合衆国在住のチェコスロヴァキア系の人たちもようやく自分たちのルーツを語れる時がきた。ニュー・プレイグの壁画はそのことをよく物語っていた。しかしそれはあまりにも遅い「新プラハの春」だった。壁画が作られて 20 年経った 2008 年、町のチェコ系社会の象徴であつたシューマッハー・ホテルは廃業し、壁画が描かれた建物の一つは解体され、一つは焼失していた。

ニュー・プレイグのチェコ系の人たちと時を同じくして、ボヘミア出身のドイツ系の人たちも自己を語り始めた。そこにはボヘミアのチェコ系移民たちとはまた異なる体験があつた。ドイツ系の移民たちは、第一次世界大戦にアメリカ合衆国が協商側で参戦すると敵国民として差別の対象となった。第二次世界大戦の時にはドイツ系移民たちはアメリカ合衆国の反ナチ感情に堪えなければならなかった。1984 年になって漸くボヘミア・ドイツ系伝統保存協会がニュー・アルムに設立された。この事業の延長線上に 1991 年にボヘミア・ドイツ系移民記念像がニュー・アルムのドイツ公園に設置された。

その後、アメリカ合衆国のボヘミア・ドイツ系の人々は毎年故郷を訪れるツアーを組んでいる。しかし彼らの「故郷」には、第2次世界大戦後ドイツ人たちが追放されたあとでチェコ人やスロヴァキア人たちが入植していた。そのためこの地域の民族構成はすっかり変わってしまった。そのことは墓地を見るとはっきりわかる。かつての住民だったドイツ系の人たちの墓は荒れるに任され、入植者たちの整然とした墓と好対照をなしている。またチェコが EU に加入して以来、この地には隣接するドイツ資本が流れ込み、鉄道や道路のインフラ整備が進み、ドイツ系のスーパーマーケットが町ごとに見られるようになっている。アメリカ合衆国のボヘミア・ドイツ系の人々のツアーは、彼らのアイデンティティの表出の一つと考えられるが、しかしそこで彼らが経験する違和感はむしろ「故郷喪失」と言えるのではないだろうか。

コメント：アメリカ移民労働史研究——史学史的にみた概要

野村達朗

4人の報告は個別集団についての詳細な報告だったので、本コメントにおいてはアメリカ移民労働史についての史学史的な概要でまとめることにした。コメントはアメリカへの移民流入がピークだった20世紀初頭の状況の説明から始めた。

1910年の米国総人口の構成は外国生まれ15%、移民二世20%。移民一世と二世を合わせた「外国系」が人口の3分の1を占めたが、ニューヨークやシカゴを筆頭に外国系（移民と移民二世の合計）が60%を超える都市が多数だった。1900年の国勢調査では、鉱山業では外国生まれ44%、移民二世17

%、外国系合計61%、鉄鋼では外国生まれ36%、移民二世27%、外国系合計63%、繊維では外国生まれ41%、移民二世23%、外国系合計64%であり、産業労働者の大半は外国系だったのである。

以前の移民史研究は移民のアメリカへの同化が主軸であり、また移民を押し出す側のプッシュ要因と、移民を引き寄せる側のプル要因というかなり単純な枠組みで考察した。しかし1960年代の激動を機に「新移民史学」、「新労働史学」が生まれ、「底辺からのアプローチ」が唱えられ、「エスニック・リヴァイヴァル」が起こり、アメリカは民族のルツボ（メルティング・ポット）ではない、「サラダ・ボウル」なのだとの主張が高まり、同化論は衰え、移民系の伝統的文化とエスニック・コミュニティについての高い評価が定着し、移民系労働民衆の主体的な歴史形成が強調された。ハーバート・ガットマンが登場し、新労働史学は移民がもたらした労働習慣と文化的伝統の価値を積極的に評価し、それに基づく労働者の行動を資本主義に抗して人間的尊厳を守る努力として把握した。

移民を理解するには、移民の故国にまで遡らねばならない。新移民史学では移民のヨーロッパ的背景の調査が進み、ヨーロッパ内部における人口の移動が注目を集め、また人口の工業化が注目された。これらと関連して欧米を結合した大西洋経済圏という概念が注目された。大西洋を挟んで成立したこの広大な経済圏は、工業化された西欧および北米と、農業的な東欧、南欧とに分かれていた。世界資本主義経済の半周辺部の農業的地域から生じた膨大な移民が北米の工業発展の労働力基盤となったのである。

この大きな枠組みの中で、個別的な移民集団の検討が必要となる。野村は東欧系ユダヤ移民の移住の背景についての著作の内

容を紹介し、彼らがアメリカで展開した労働運動、CIO 結成への参加とニューディール支持、アメリカ労働運動への著しい貢献を紹介した。またメサビ鉄鉱山で IWW の基盤となったフィンランド系の濃密な民族的コミュニティと彼らのラディカリズムの背後に故国における運動があったことを紹介した。

アメリカでは多くの研究者が移民が労働運動に立ち上がる姿に胸を躍らせ、幾多の研究が生まれた。しかし他方では有力な移民史研究者ジョン・ボドナーは、移民の大部分を占めた労働者階級移民が築き上げた「日常生活の文化」は現実主義的なものであり、ラディカリズムやリベラルな衝動に欠けていたと主張した。

また多様極まるエスニック集団に分かれていたアメリカの労働者階級が、階級的統一を達成するのは容易ではなかった。色々な著作があるが、リザベス・コーエンの力作『ニューディールの形成——シカゴの労働者』によると、1920 年代のシカゴ労働者の大部分は移民と移民二世であり、労働者の生活はエスニシティの中に閉じ込められていたが、1930 年代になると、労働者はニューディールを支持し、エスニックな区分線を超えて CIO に加わり、自分たちがアメリカ労働者階級の一員であるとの感覚を培った。

また研究者たちは移民労働者が主体的にアメリカ化への道を求めたという事実に着目した。「労働者階級アメリカニズム」という概念も生まれた。移民系労働者はアメリカ人になることに努力し、愛国主義が高まったのである。

ヨーロッパ系の間におこったエスニック・リヴァイヴァルは長くは続かなかった。多文化主義の推進力となったのは黒人をはじめとする有色マイノリティであり、ヨーロッパ系白人ではなかった。ヨーロッパ系

はやはりアメリカに同化し続けたのであり、アメリカはやはりヨーロッパ系諸民族のルーツだった。そしてエスニック別にまとまったヨーロッパ系の労働者コミュニティは、アメリカへの同化、経済の停滞、製造業の衰退、有色移民の増加の中で、今や崩壊しようとしている。一つの時代が終ろうとしているのである。

討 論 概 要

共同研究の中心概念である「トランスナショナル・アイデンティティ」に絞って討論概要を記すことにする（そのため記載漏れとなった発言者には、ご容赦を願いたい）。

①報告によって「トランスナショナル」の用い方が異なるような印象を受ける（ヨーロッパとアメリカをつなぐ「トランスオーシャン」でもあり、「トランス・エスニック」でもある）。「トランスナショナル」をどう捉えているのか？

②研究史的な流れ（個別のエスニック・コミュニティ史から複数のコミュニティの関係史へ）からみて、ここ 10 年の日本での類似シンポジウムと比べて、違和感がある。山本報告では様々な連帯がバラ色に描かれすぎているが、都市社会内での他の集団との関係はどうであったのか？ 山本・田中報告で取り上げられている事例では、抵抗の文化やそのアメリカでの変容が捉えられていない。「トランスナショナル」はどうしてもわからない。「アイデンティティ」が付くとなおさらわからない。

③「トランスナショナル」の「トランス」がどうも気にかかる。単に国境を越えるという意味だけでなく、変容のニュアンスがあるのではないか。また、アイデンティティについてはその「ずれ」もあり、それが

アメリカ的な感じがする。アメリカの場合、アイデンティティの変容が激しいので、短期間の事件ではなく、もう少しタイムスパンを長くとらないとわからないのではないか。

以上の質問に対して、残念ながら共同研究では一定の結論に至らなかったことが予め断られた上で、各報告者個人の意見というかたちで（今後の目標も含めて）返答がなされた。

（田中）確かに事象の説明が主で、H. ガットマンのように文化やエスニックに特にこだわってはいない。むしろアメリカ史研究では軽視されていると思うが、移民が国家や権力に批判的となり、アナーキストになっていくという事象にどういう意味があるのかを問うている。しかも彼らは“uprooted”であったのが“rooted”になっても“cosmopolitan”であり続けた。B. アンダーソンがナショナリズムとアナーキズムが矛盾しない事例を掘り起こしたように、従来の歴史研究の枠からはみ出た歴史をすくいあげたい。

（山本）今回はストライキの中でいかに多様な「トランスナショナル」な関係性が生まれていったかを見るという作業であった。これからアメリカ化のプロセスとは異なる、国民史を越えた歴史像の提示を試みていきたい。

（大津留）エスニックを一番に考えて研究してきて、新たにミネソタ州のボヘミア移民を発見した。そこでアメリカのことがアメリカの中だけでは見えてこないことがわかった。ここ2、3年のチェコ史学の変容はすさまじく、そのチェコ史学とアメリカ史学と、そして現実の移民の三者間で見していきたい。

（山内）上記類似のシンポジウムについては私なりにフォローしているが、近年の労働運動史研究の低調に影響されてか、労

働ないし社会運動からのアプローチが弱すぎるように思える。私自身が示唆を得たファン・デア・リンデンは、“labour transnationalism”という概念を提起し、それを三つの側面、①連帯、②組織モデル、③産業関係（労働関係）からアメリカ労働史の再検討に活かそうとしている。①は当然として、②は報告では、帰国するだけでなくアメリカの地でロシア人コロニーの統一をめざし、（③までは達しえなかったが）その組織形態として労働者代表ソヴェトの創設途中までいったことで説明した。その運動の中で、かつて「工場街の煙の中へと消えた」民族的アイデンティティが、主体的なそれとして一時期であれ復活した事実を掘り起こしている。（山内 昭人）

在米ロシア人移民労働運動史研究
——在米ロシア人コロニー統一の試みを中心に——
(2009～2011年度 科学研究費補助金(基盤研究(C))
研究成果報告書)

印刷 2012年5月15日

編著者 山内 昭 人

発行者 〒812-8581 福岡市東区箱崎6丁目19-1
九州大学大学院人文科学研究院
西洋史学講座 山内研究室